明治四十四年三月廿五日印刷納本（毎月廿五日印刷納本）

女子文壇

四月號

第七年第五號



東京女子文壇社發行

女子文壇紀念第百號

☞五月一日發刊

▲『女子文壇紀念第百號』は何んなに立派でせう、先づ卷頭に大附錄として挿む竹久夢二氏筆、木版極彩色の繪は、日本紙に印刷したる明治の新錦繪です、こんな新しい試みは殆んど本誌を以て嚆矢となすべく、爭ふて珍重せられることでせう。

▲記事の面白いことは、申すまでもない、一般の婦人の爲に、文學を愛好する人の爲に、いろ／＼參考ともなり又感興を惹く記事を精選して滿載します。

▲本誌大半を割いて、例の如く投稿に選者の批評を加へて、發表します。材料は凡て之れ紀念號の爲に特に誌友諸君が熱血を注いで作られたものばかりです。

▲一つの書物代りに保存して置く必要のあるやうな記事も澤山ありますから、文章に心懸ある婦人は是非とも本誌を見免してはなりません。

▲あゝ歴史ある『女子文壇』の光榮！、本誌百冊を出すには七ヶ月の時日を要しました、而かも其間の經歷は何んな結果を現はしたでせうか、是を語るものは『紀念第百號』です。

▲注文は早きを要す、發行は今より一ヶ月後ですけれど、部數に限りがありますから、早く各地取次店に申込にならないと、折角の樂みが外れます。

◉紙數三百餘頁（口繪、插畫澤山）　本號特價金參拾錢　送料壹錢五厘

東京京橋區大鋸町　女子文壇社出版　賣捌全國各店

女子文壇四月號（第七年第五號）目次

創作

雜録

誌友くらぶ

雜報

▲紀念第百號豫告（巻末にあり、見よ）

櫻草



大下藤次郎筆

女學生

毎號口繪石版密刷、木版寫眞版數葉挿入、女子の好伴侶



(價)一冊税共十六錢〇半年九十三錢

四月號發行

懸賞文藝　滿載百花爛熳は本誌の獨特

○少女お伽　一人娘……月見草

○少女小説　秣瀨の波……あづま女

△日本婦人の美風……宮川すみ子

△嫉妬は唐辛の如し……源　文學士

初めて家を持つたころ

一　菓子の餡で煮物……粟屋瑛子

二　二十七歳の時後妻……星つね子

三　學生と家族的生活……近角常觀

四　女二人の淋しい世帶……河島芳子

五　其頃も矢張り平凡……徳田秋聲

六　夫に濟まぬと思ふ心……後閑菊野

七　家よりも寄席や芝居……竹久夢二

△老いて益々壯んなる矢島女史……露香生

△妾の得たる手紙の印象……若き人妻

○史傳　靜の哀史

○史傳　遠月尼を憶ふ

女學校評判記

矛盾せる心の日記

發行元　東京神田旅籠町一丁目　文光堂　(振替東京一九五五)　最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

新學期開講

女子大學 家政講義錄

會員募集

特典 四月末日迄申込に限り特に入會金免除

本會は講義錄を發行し通信教授により女子教育普及を圖る
新に開講せる家政講義は家庭を中心とせる實際的の者也
科目は直に實生活に應用し得られ處世に適切の者のみ也
講師は多年女子教育に從事し經驗ある一流の大家のみ也
内容豐富にして清新興味の裡に婦女切要の學藝を得修し得
講述頗る叮嚀懇切なれば初學者と雖も容易に了解せらる

見本附き 會則 申込次第 進呈

東京 小石川目白臺 日本女子大學校通信教育會

女子大學講義

一箇年修了の四月廿日初號發行

小石川區久堅町 總發賣所 寳文堂 電話番町九三二

造花材料

天然の花は風雨に亂れ
人工の花は家庭を賑す
面白く
家庭に
趣味を作り花
その
樂しみの
數もいろ〳〵

「金三拾六錢封入して左へ御問合せあれ」

東京日本橋區横山町
合資會社
天野卯兵衛商店
電話浪花一六四三番



幕の前



竹久夢二筆



女學世界

第十一卷第五號
四月一日發行

洋裝菊判紙數二百八頁石版寫眞版豊富
正價二十錢
郵税二錢

東京本町
博文館

▲高峰博士發見特許製法に由る消化新薬▲強度一定効力永久不變
▲類似摸造品あり「タカ」の冠字御注意▲各地有名薬舗にあり
▲日英博覧會化學品部に多数のヂアスターゼ類出品せられたるも審査の結果獨り本剤の優良なるを賞賛し特に發明者の功勞を表彰せんが爲め我高峰博士に最高賞牌たる

タカヂアスターゼ

名譽大賞を贈與せり本社は我醫界に本剤の優秀絶倫を證明せられたる此賞牌を報導し得るを大なる光榮とす。▲説明書郵呈す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目 三共合資會社

大學教授博士鈴木梅太郎氏發見の特許製法に由り製造せられたる本剤は吸收性同化性の完全なる有機性燐化合物にして其効用は總ての

特許新薬 アキリン

營養増進に在り結核性患者、食慾不振、病後恢復期に用ゆべく殊に神經衰弱患者の營養剤とし卓効あり

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目 三共合資會社

名門の夫人



伯爵壬生基義氏夫人篤子



男爵徳川厚氏夫人里子

春粧



田中丞之助氏令弟夫人靜子



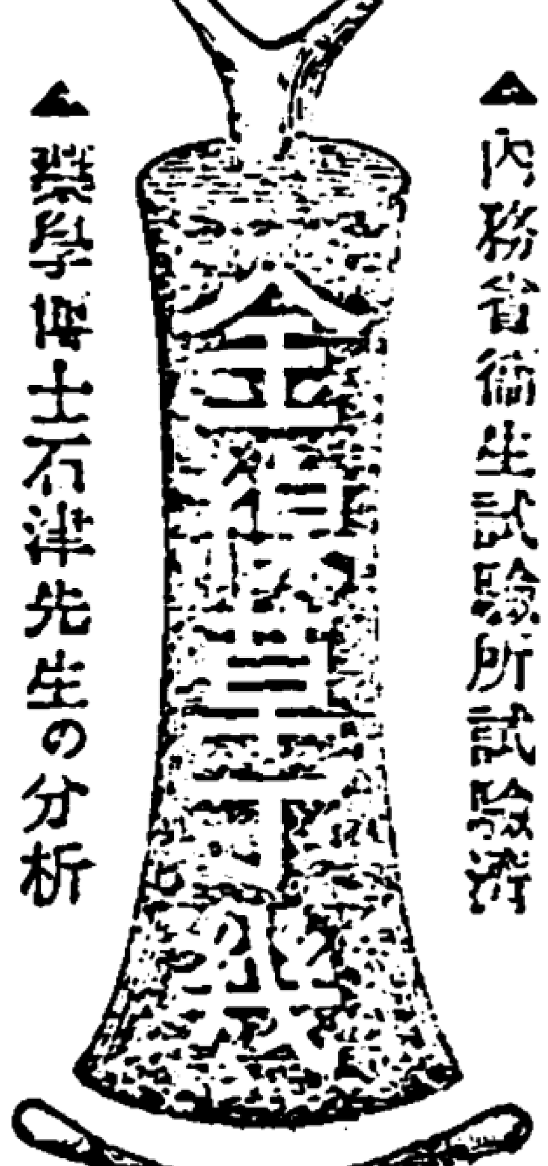
橋本郁子孃

登録商標

◎るいれきの療法に就て

ドクトル橋爪先生患者に本藥を指定して曰く「るいれき」は切開してもだめです金線草丁幾を服用せば切開を要せずして全治すべしと、一日五瓦水百瓦の處方を與へられたり此の指定を受けたる患者、如何に滿足なる結果を得られしかソワ實驗者の判斷にまつ

▲内務省衛生試驗所試驗濟



▲藥學博士石津先生の分析

△本藥特種の作用

一血液の循環を整調す
一營養を佳良ならしむ
一固結物小なるものは之を吸收し又大なるものは自然排膿全治す

▲本藥の說明書は御申越次第送呈す
▲定價參圓、壹圓半、壹圓の三種あり

本舖 東京日本橋本銀町四 東光堂 振替口座東京七六六七番

▲本藥は縣下有名藥舖に於て販賣す

毛ぬき 新劑

原名ヘルーピン
定價 壹圓
特製 參圓
内地送料十五錢
海外 三十五錢

從來脫毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脫毛劑を硏究して皮膚に無害なる一新脫毛劑ヘルーピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脫毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

飲色白 くなる藥

藥名ピオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
内地送費十五錢

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ピオール錠は極て强度の淸血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨となし惡液を排泄して皮膚を艷麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

東京市牛込區北山伏町壹番地 百合園製藥所



工學博士渡邊讓氏令孃夏子（府立第一高女卒業）



戸塚松子令嬢あき子
（東京女學館卒業）



司法省會計課井上俊雄氏令嬢壽子（學習院卒業）

洋風



堀越善重郎氏夫人令妹



宮崎千代子（女子大學教師）



在米鑛山業前田久治氏令孃八千代、三千代

新輸入 美容法 内服 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑

價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**即ち惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用化粧水及諸大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず唯だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹼獨特の靈効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗を證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を眩着する內國製の粗惡品と玉石混同視することを勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵稅共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目錄法要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髮の脫落するを止むる法●化粧石鹼製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染る法●髭毛の光澤を美にする妙藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ピットル酒製法●一夏日室內を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白爪を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●水を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らす體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を○○かす藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中纏らぬ秘術●悋氣深き女を并する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顏赤く吹出物生するを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記憶力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑学夜光の奇術●老人絲身讖取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする內服藥新法●寶丹の製法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●腹脹を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損したるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る新法●頭髮を●くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の最新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして治す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土○の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒除防の奇法●思ふ時日を儀す●●年●により房事の疲數●病●前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●麥酒を製造する法●窩を造るの秘法●一時に數●匹の鼠を捕獲する秘法●麥帽子洗滌新法●疊の汚染を落す法●新らしき錢●の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下拾法略す合計壹百四十法あり著金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

肺結核全治之奇法

全治者數千人に達す

（所謂新藥に非ず）

近時肺病の治療藥として續出する新劑は其數幾百千然も人體内に於て殺菌の効力あるものは本療法の外之を認めずとは有名なる細菌學の大家古弗博士の證言なり宜なる哉肺結核治療上の學理的見地より論及せば能く結核菌を殺滅するに足る濃度の劇劑は人間の臓器細胞を害するや論なし現に患者は所謂大家の新藥が其効果を奏せしもの幾何かありしぞ余は曩に仁義に富める多くの學者先輩の援助を得て肺結核競爭療法を企て歐洲各地病院温泉地療養所等より多くの新材料を收集し茲に空前の新療法を發見し肺病患者寶典なる書物と全治の證據を刊行し五千卷を限り無代にて之を患者に分つ事とせり

大勳位伯爵東郷閣下題字
從一位侯爵久我閣下題字
正三位伯爵東久世閣下題字
正三位伯爵土方閣下題字

肺病患者寶典　全

世に不治の難病と稱せらるゝ肺勞患者が本療法の奇効に浴し全快の幸福を得し實例は既に數千の多きに達す抑々肺病の醫藥甚だ多けれど悲かな現今にては攝生的本治療法の如く大効を奏するものは他に之ある無しとは北里醫學博士柴山醫學博士鈴木醫學博士が極力唱導されし處にして如何に本治療法が最も進歩せる唯一の療法たるを知に足らん



本療法の奇効

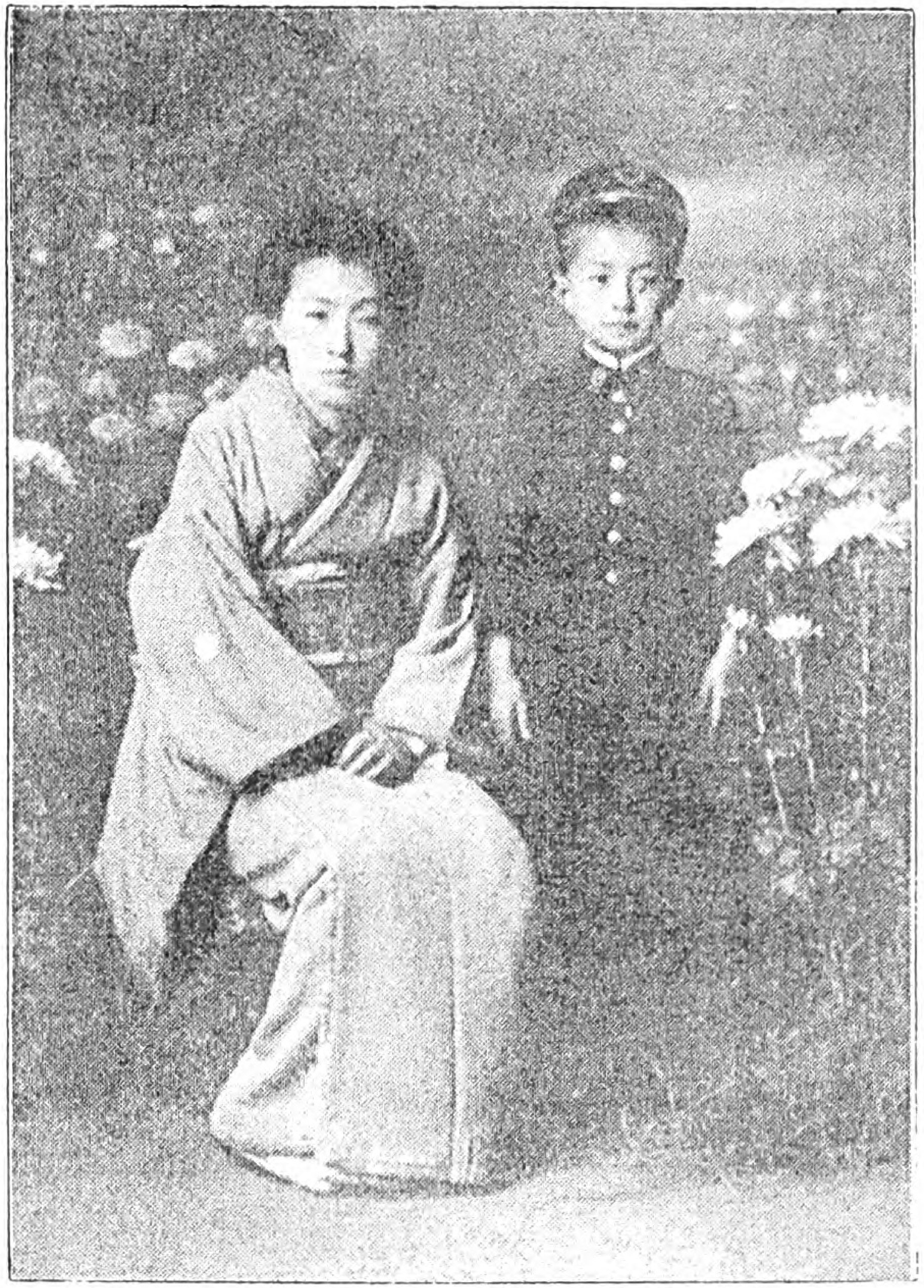
○發熱盜汗
○血管破裂
○血痰不眠
○食慾不進
○呼吸困難
○咯痰咳嗽
○胸部疼痛
○下痢貧血
○喉頭痛
○心臓衰弱
○肋膜滲潤
○胃腸障害

然れば肺結核、肺炎、肋膜炎、氣管支加答兒等に罹り前記の症狀を呈し醫藥効なく煩悶の人は決して失望悲嘆を要せず直に郵券二錢添東京日本橋呉服町二番地順天堂藥院安原尙親宛申込ば全治の秘術を盡せる前記の大書冊無代送呈す

文士の未亡人（其一）



尾崎紅葉氏未亡人と令孃令息



大橋乙羽氏未亡人と令息佐太郎君



橋本子爵令嗣長俊と夫人鍾子



香川縣多額納税者揚靜太郎氏と夫人久江子



醫學士松岡鋭作氏と夫人久子



淺野セメント會社技師俵田勝彦氏と夫人麻子

文士の未亡人（其二）



國木田獨歩氏未亡人治子、令孃貞子、綠子、令息虎雄、哲二



高山樗牛氏の遺子



川上眉山氏未亡人と令息

誌友



(東京)金川靜香女

(大阪)佐藤幸子

(東京)桐澤榮子

(大阪)村井繁子

(廣島)後藤壽美枝子

らい病根治新劑

△藥名…レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たるを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共
壹劑分五圓拾錢
特別製分拾圓拾錢

美しき聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に**美聲**を發する方法を自得せり本劑は實に無上の**發聲藥**として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又は**聲出ぬ人**にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢
特別製分參圓廿五錢

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

記憶增進丸

本劑は獨逸大醫スクリーボリー氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし現代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記憶力大に增進**し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全に**快通**

流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を適用せば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及び**惡血毒血**一を掃すると確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の**大盛**を淡み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること**保險附**

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢つゝにて郵稅代用二割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

以上五藥一手專賣元　東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

今の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の内容

- 美しい血　佐藤ます子
- 與へられたる生命　山田邦子
- 木栅　長曾我部菊子
- 大川端　鈴木春子

△美しき色彩　執筆婦人九名

- 見るも夢、覺むるも夢　夢の女
- 面がはり　若杉濱子
- 母に縋りて　前島ゆり子

△若奥樣の生活　白木絲子、枝の小鳥、きみ子

◎賣約濟　うすゆき
◎死なれぬ女　山崎千代子

- 現代婦人の進步　河井醉茗
- 良人の選擇に迷へる女に與ふ　雨をとこ

△婦人登山記　玉かつら子

- 私の心を縛つて欲しい　迷へる女
- 白き月の沈む頃彼女は眠れり　與野道子
- 獨寢の枕に響く霰の音　初月夜花
- 正氣か狂氣か　秋扇
- 教會を脱したい　芳子
- 女學校から覗いた世間　白雨女
- 涙を呑んで運命に從ふ　神保千代野
- 單調なる生活に倦む　野に降る雨
- 覆面を脱ぐ　築土の草
- 私の運命を左右した試驗の力　秋香
- 危うく戀の波に沒はれんとす　夕がほ
- 引いて歌ふや獅子の曲　さつき
- 夢の記　葛の蕤
- 三人女　芳惠子
- 遊學を志の貫かうとする初一念　星子

◎夜の自然を愛す　吉田紫花
◎覺めたる日記　安木濟子

- 懷姫日記　越路女
- 苦勞人の面影　船田豐子
- 私の離緣された一事始終　小夜時雨
- 早婚の爲に生じたる吾家の悲　新田文子

劇

- 嫂の冷たき心を悲む　島守女
- 姑の我を折らすも少しの呼吸　月見草
- 子供を持つても忘られぬ文學　はまゆふ
- 細君評判記　さくら貝
- 袖香爐　横瀬夜雨
- 朝しづく　三加島良子
- 七世の後も　原田琴子
- 栗の實　美耶子
- 小品文、詩、和歌、俳句

東京　京橋區大鋸町　女子文壇社出版
（振替口座第壹七貳九番）　●發賣所各地書店●

地方の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の内容

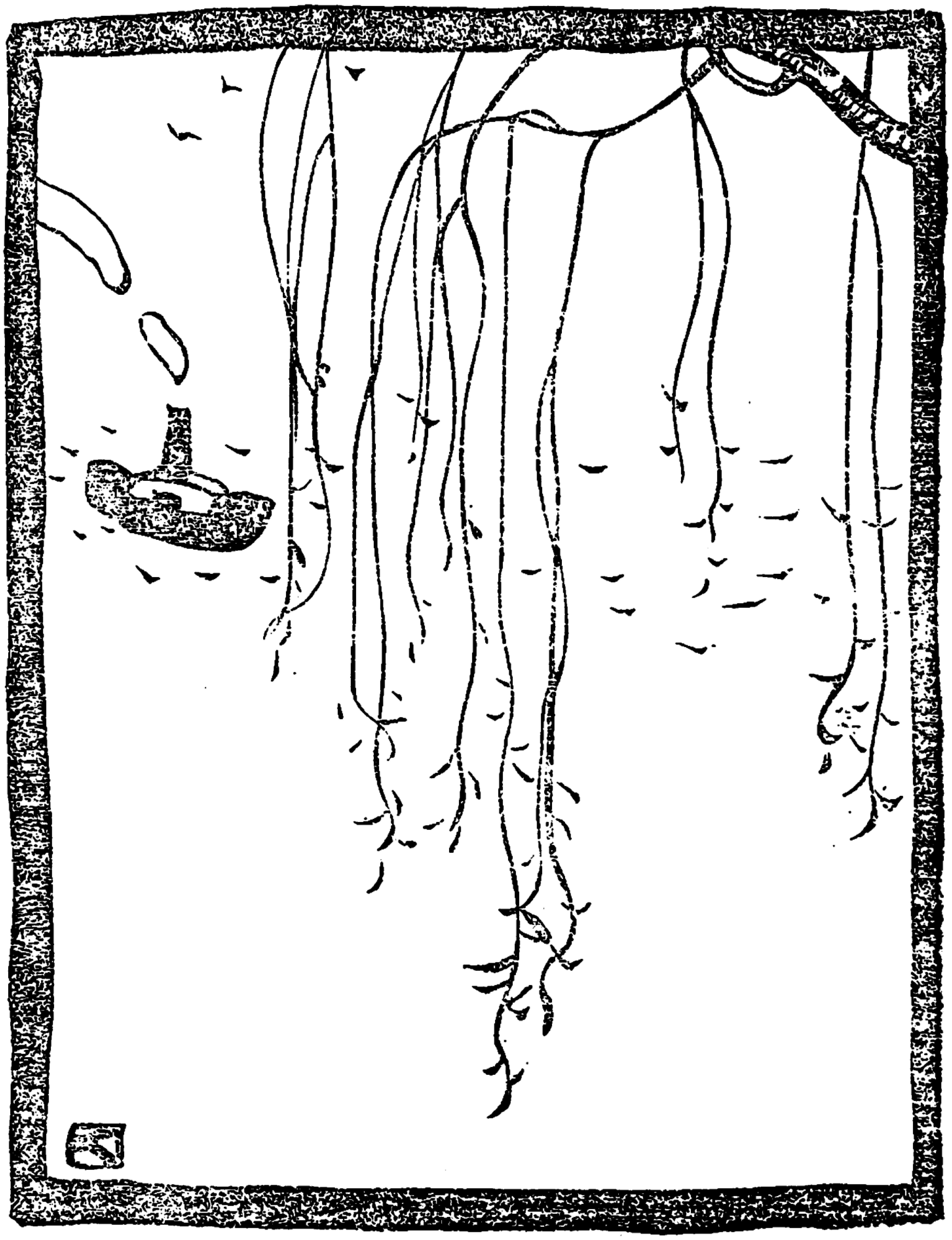
地方婦人の自重を望む 下田文學士●**女が中心**になつて働く 横井農博士●行ける處まで行き得ない 田山花袋●女性の自然の觀かた 小島烏水●天然の美と婦人の美 大下藤次郎●私の故郷 尾上文學士●**海豹島**の婦人生活 岩野泡鳴●下京の女 兒玉花外●杉坂峠 澤村文學士●雲雀鳴く野 夜雨●**煽風器**▲富士登山は宜い經驗 目賀田逸子▲鳥の鳴く廢尾の奥 仲小路八重子▲田舍では讀書より仕事 遠山稻子▲周防の德山 武田貢▲氣が利かぬ代りに人情に厚い 中村若子▲幼い時は山へ成長すれば海へ 岸すみ子▲信飛境上の深山旅行 辻村靖子▲暑い方に向ふ 中野仙子▲嫁して後忍耐强い京都婦人 松岡いと子(小說)**漁父の母** 小栗籌子●**賣り桑** 水野仙子●海岸 河井醉茗●琵琶湖 しのぶ●雨 川路柳虹●伊豆の海岸より 中村文學士●淡路の生活 一色醒川●驟鈴●**色彩**的區分したる**大阪**市の**婦人** みどり女●神戸 羅漢柏●**東京近縣**の女の特色 澁蝶花●都會より地方へ 長曾我部菊子●機の旅日記 靜江●農村の處女が最も活動する田植時(伊豆、伯耆、近江)**富山と岡山**の女 下枝子●本州の南北兩端より(薩摩、北見、)●五年以前 山田邦子●諸國通信(肥前松浦、××町、和泉の南、伊豫松山、常陸下館、駿州小山の各地より)**山岳と海岸**▲熱海▲房州の渚▲越後の海▲秩父▲高尾**地方の現在**石油の噴出 蒲原早蔵 其他**都會に憧憬れつゝある若き女の叫び**▲私の淋しい心を察して下さい 北斗星▲行きたいくと思ふ一念 桃の花▲擂鉢の底のやうな土地より 上田けん子▲嚴格に過ぎたる家庭 白露子▲船中より身を投んとしたる其後の私 汀女●創作(和歌、小品文)

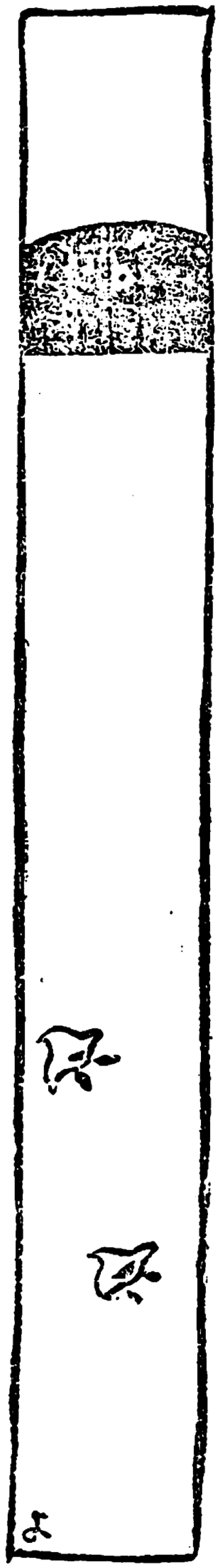
東京 京橋區大鋸町 **女子文壇社出版**
●賣捌各地書店●(振替口座第壹七貳九番)

女子文壇

第七年第五號

明治四十四年四月一日





家族と娘との間
保存すべき女子の美點
附り　女には仕事が多すぎる

文學博士　幸田露伴

▲家族制度で治まつてゐた時代

これからの娘は如何いふ風に教育するかと言ふことは随分六ケ敷い問題である、今日妙齡の娘を持つたる親は大抵古い教育を受けた人間である。斯う言ふ親達の頭には家族制度と言ふことが染み込むで居る、封建時代に於ては總て階級の世の中であつたから、何人も皆階級と言ふものゝ束縛を受けて居た、又侍は知行を世襲し、町人は家業を世襲して居たから、子を育てるにも知行なり家業なりを受繼ぐに適する樣に教育して居た。侍の子息なれば侍になる樣に育てる、侍になつて親の知行を受繼ぎ得られる樣に教育する、町人なれば町人に安じ得られる樣に育てる、町人として親の家業を受繼ぎ得られる樣に教育する。斯くの如く子を

育てるには家と言ふものを基礎として、其家の家風に適ふ樣に育てゝ居たのである、この時代に於ては世の中が總て階級に依て支配されて居たから、容易に出世をすることも出來なかつた代りに、生存競爭も烈しくなかつたから、親の官職なり親の家業なりを世襲してさへ居れば、安じて生活することが出來た、故に封建時代に於ては子孫は家を守る爲めの者とし、子孫も亦家を守る爲めに生れた者と心得て居て、其間に少しも調和を缺く樣なことは無かつた。

封建時代の樣に親の官職を世襲し、親の家業を世襲して居た時は、子の中でも長男のみが必要な人物で次男以下の男の子や娘なぞは有つても無くてもよい者とさへ思れて居た、であるから家の内で長男は親の跡を繼がねばならぬので責任も重く、從て親にも大切にされるが、長男以外の二男三男や娘等は家に在つて必要のない者であるから、大抵他家へ養子なり嫁なりに遣られるのである。斯う言ふ時代の家庭に於ける娘と言ふものは、成長して嫁に行つて他家の人となつた時、よく之に調和して行かれる樣に敎育されて居たのである。嫁して舅姑に仕へ、夫に仕へ、よく一家を守つて行かれる樣に敎育されて居たのである、偶々實家に在つて婿を貰ふ娘のないではないが、これ等は例外にして大抵は皆他家に嫁して他人の家に入らねばならぬのであるから、自然斯う言ふ風の敎育を受けねばならぬのであつた、又實際斯う言ふ敎育を受けるのが斯る時代に在つては必要であつたのである。

▲經驗を無視するは愚なり

ところが今日になつて見ると、階級制度は破れて四民平等となつてる、從つて周圍の束縛と言ふものがなくなつて居る、のみならず、官職の世襲と言ふこともなくなつて居れば、子は必ず親の家業を繼ぐべきものなりと言ふ習慣も殆どなくなつて居る。世の中が既に斯う言ふ風になつて居れば、子女の敎育も封建時代の樣に家を基礎として敎育する譯には行かぬ、子の人格を認め個人の人格を認めて、生存競爭の烈しい今の

世の中に處して行かれる樣に敎育せねばならぬ。然し經驗を棄てると言ふことは頗る愚なことである、假令社會の組織は違うて居たにしても、長い間の經驗に依つて養成されて來た女には確に長所がある、從來の女は多少の缺點はあるにしても、舅姑に仕へ、夫に仕へるに於ては決して不都合はない、女は何所までも女にして、嫁しては夫に從ひ舅姑に仕へるのは昔も今も變りはない、イヤ變つてはならぬのである、此點に於ては封建時代の敎育は決して失當ではない、して見ると古いものは悉く惡いものとして破壞することは出來ないと思ふ。寧ろ斯う言ふ點は從來の敎育を保存せねばならぬ必要がある、何故かと言ふに、今後は如何しても個人主義と言ふことが勢力を得ることになるから、今日までの反動として女は何所まで放縱になるか知れない、これを防ぐのは從來の敎を保存するに限る一方には斯うして從來の敎を保存し、女は何所までも女らしく敎育して行くと同時に、今後の時勢に適合する樣に新しい敎育を施さねばならぬ。

▲都會と地方の相違

從來の敎は或程度まで保存する必要のある事は前にも言ふた通りであるが、昔と今とは世の中が變つて居るから餘程取捨を注意せねばならぬ。近い話が、女が手を突て禮をする時に、脈所を見せると言ふ樣なことは、疊の上でこそ行へることであるが、家が西洋風になつて上靴で歩く樣になつては、脈所を見せて手を突く譯にも行くまい。總てのことがこれと同じ樣に禮式でも、習慣でも、道德でも、皆物質上の影響を受けないものはない。物質上の關係に依つて昔のことの今日行へることゝ行へぬことゝある、斯くの如く物質上より到底實行の出來ぬことは已むを得ぬが、然らざるものは出來得る限り保存した方がよからうと思ふ。然しこれとても一概に言ふことが出來ぬ、同じく日本の中でも都會と田舍は餘程趣きを異にして居る、山間僻地へ行くと都會に住むで居る者の想像も出來ない程舊式なことを行て居る、であるから、山間僻地の人間に

向つて、なるべく古い經驗を尊重する樣にと言へば、愈々退歩して人間が少しも進歩しないことになる。れと同樣に、都會の人間になるべく舊習を棄てて新しい方向に進むべしと言へば、さなきだに放縱になり易い都會の者は、愈々放縱になる。斯う言ふ譯であるから一概に古い習慣を守れとも言へない代りに、又新しい方面に向つて進めとも言へない、都會の人間に向つてはなるべく從來の經驗を尊重する樣に、山間僻地や田舍の人間にはなるべく新しい方向に進む樣に導かねばならぬと思ふ。



▲娘達が煩悶の一原因

それから娘の教育を學校にのみ依賴するのは間違つて居る、學問上の知識は學校に於て學び得らるゝも、婦德と謂ふものは到底學校に於て養成され得べきものでない、婦德を涵養することは如何して

も家庭教育に俟ねばならぬ、ところが今日の家庭に於て子女を教育する者は大抵舊式の頭腦を持つたる親であるから、學校教育と家庭教育との調和が圖れないのである。學校では西洋流の新しい思想を吹き込むし、家庭では舊式の親が舊式の鑄型に入れやうとするのであるから、其間に衝突の起るのは當然である。現代の娘の煩悶と言ふものは、この間に處して行く苦痛より起るのであらう、然しこれは過渡時代に於ける避け得べからざる現象である、今日の娘が親になる時分には斯る衝突も起らない樣になつて、學校教育と家庭教育との調和も圖れる樣になるであらう。要するに今日の娘を教育するには學校にのみ依賴せず、學校に於て知識の教育をすれば家庭に於て、女としての教育を施さねばならぬ、而かも家庭に於て教育する方針は土地の狀態に應じて、長い間の經驗が產むだ女の長所はなるべく保存する樣にして婦德を涵養せねばならぬ。

▲臺所を打破せよ

これは問題外のことであるが序だから話をして置くが、日本の女は餘りに任務が多過ぎると思ふ。上流社會の女は別として、中流以下の女の仕事の多いことは非常なものである、パン屋もやらなければならず、料理屋にもならねばならず、洗濯屋にもなれば、裁縫師にもなり、張物屋になるかと思へば家庭教師になると言ふ樣に隨分多くの仕事を持つて居る。斯う言ふことに忙殺されて居ては女の修養する暇がない、修養する暇がなければ進歩もせぬ、それは將來の國民を作る母として大に心細い次第である、斯う言ふことを言へば少しく極端かも知れぬが、女をして進歩せしめるには、今日の臺所と言ふものを打破せねばならぬ。現在の狀態では、中流以下の女は臺所の爲めに齷齪して一生を送るのである。これでは餘り女が可愛相である。のみならず次の國民を作る重任を帶びたる女を斯う言ふ狀態に置くといふのは、社會進歩の上に於て決して褒めたことでない。何所の國へ行つたところでパンまで自分の家で作る所はない、それを日本では何から何

まで、一家の生活に必要なる物は殆ど女の手に依つて作られるのである。斯う言ふ狀態を續けて居たら、何所まで經つても女の進歩する望がない。又家の建築から考へても、現在の樣な臺所の組織では、西洋の如く二階三階と言ふ樣に上へ長屋を作ることが出來ない、若し今日の臺所の儘で高い長屋を建てたとすれば、二階三階位までも豆腐屋や八百屋も廻るかも知れぬが、五階六階の上まで八百屋や豆腐屋が毎日御用聞きには行くまい、五階六階に住むだ人間は毎日食はずに居なければならぬことになる。であるから今日の樣な臺所の組織では高い長屋を建てることが出來ぬ、如何しても平家か二階位で横に廣い長屋より建てることが出來ない。今の中はそれでもよいが人間が益々增加した曉には、確に困ることが起つて來ふ、その時になつて狼狽るより、今の中から高い長屋に住み得らるゝ工夫を考へて置いた方がよからうと思ふ、今日の臺所を打破すると言ふことを、一寸考へると非常に破天荒の如く又實行の出來ない樣に思ふかも知れぬが、行り樣に依つては決して實行の出來ないことではない。何所の家でも牛乳を飲むからとて牛を飼ふて居る家はない、牛乳は牛乳屋から配達を受けて安心して飲むで居るではないか、飯と言ふものが牛乳と少しく趣を異にして居るから、今日の習慣上、飯屋から配達さすと言ふことが頗る變に思れるが、これとても方法次第で、信用するに足る會社でも出來たれば、牛乳と同じ樣に安じて飯の配達を依頼する樣になると思ふ、總て臺所に於ける女の任務を減少して、修養すべき時間を作つたら女の進歩も著しからう、從て國家も進歩するであらうと思ふ。

家族制度の改革や、個人主義を主張する前に、此の女の仕事の多すぎると云ふやうな、手近な問題から解決してかゝらねばならぬ。女が終日臺所で、まご〳〵して暮らすやうでは、人格の修養や、良人を慰める方法や、子女を教育する根抵などに深く立入るだけの用意の出來ないのも當然である。先づ其邊にも心を遣つてみる必要があらう。

自覺なき服從は時勢が許さぬ

女子大學々監　麻生正藏

▲重大なる問題

家族と娘との間と言ふだけでは少し意味が分り兼ねるが、家庭に於て家族制度と個人主義とが衝突する爲に、娘の地位が頗る不安である、如何にすれば家族制度と個人主義との調和が圖れて、家庭に於ける娘の地位が安全になるかと言ふ問題は、頗る重大なる問題にして、又頗る至難の問題である。何故かと言ふに、家族制度と言ひ個人主義と一口に言ふが、何所までが家族制度で何所までが個人主義か其分界が判然せぬから從て如何にして調和を圖るかと言ふ問題は容易に斷案の下せるものでない、であるから具體的に此問題を論ずることは他日に讓り、茲には單に家族制度並に個人主義に就て感じたことを少し述べやう。

▲系圖を難有がつた時勢

家族制度とは抽象的に家を崇拜するのである、抽象的に家を崇拜すると言ふことは、祖先を崇拜することである、この祖先を崇拜するには系圖が必要である、祖先崇拜の弊は系圖の僞造となる、家族制度の根本は祖先崇拜である、祖先崇拜には系圖がなければならぬそこで系圖のある家はよいが、系圖のない家では祖先崇拜の道具がないから、已むを得ず系圖を僞造する、昔は系圖師と言ふ者があつて、注文に應じて如何な系圖でも直に作製する、此時分には系圖師と言ふ商賣は隨分繁昌したものである、祖先崇拜の盛な時代であるから、苟も一家を爲す以上は系圖がなければならぬ、そこで猫も杓子も皆系圖が要るので、系圖師に依賴して望み通りの系圖を作製して貰ふ、斯う言ふ風で出來あがつた系圖を今日持ち出して物體を附けたところでそれが必ずしも難有いものでない、然れども家族制度

の世の中では系圖が唯一の寶であつたのである。
然し私の考では祖先崇拜と言ふことが各自に個人の祖先を崇拜することなれば、それは害あつて益のないことゝ思ふ。何故かと言ふに、昔の如く大名、士族町人と言ふ樣に階級の嚴しい時代なれば個人の祖先を崇拜して居てもよいが、今日の樣に士族も町人も新平民も總ての階級が打破せられ、四民平等となつた上は各自の祖先を崇拜すると言ふことに意味がない、イヤ意味がないばかりでなく、反つて不都合が生ずる。士族が士族の祖先を崇拜すれば新平民は新平民の祖先を崇拜せねばならぬことになる。誇るべき祖先を有して居る者には都合がよいかも知れぬが、誇にたらぬ祖先を持つて居る者、例令新平民の祖先を持つて居る者や惡事を爲した祖先を持つて居る者は、祖先を崇拜することが出來なくなる。それを強いて崇拜せんとすれば自己の不名譽を購ひ、祖先の爲めに自分の肩身が狹くなるのである、又祖先の分らない者は昔なら系圖師に依賴して系圖を作製して貰へるが、今では系圖師と言ふ者もないから系圖のない者となる、世間でも個人の祖先を尊み系圖を重じて居れば、祖先が分らず系圖のない者は悲觀せざるを得ぬ、斯う言ふことは決して悅ばしい現象ではない。

▲日本人の崇拜すべき祖先

個人の祖先を崇拜することがよくないと言へば、それでは家族制度の基礎は何所に置くかと言ふ問題が起る、この問題に答へるには少しも遲疑しない、個人の祖先を崇拜する代りに共同の祖先を崇拜するがよい。共同の祖先とは日本人の祖先で、則ち天照大神を崇拜するのである、斯うして共同の祖先なる天照大神を崇拜することになれば四民平等で、階級的の弊害がない、士族も平民も新平民も等しく日本人として、同一の祖先を崇拜して家族制度の基礎を鞏固にすることが出來る、祖先崇拜と言ふことは決して惡いことではないが、近い祖先則ち個人の祖先を崇拜することになれば、今言ふた樣な弊害があるから、溯つて共同の祖

先たる天照大神を崇拜せよと言ふのである。然し尚ほ溯つて進化論の領分にまで入る必要はない、若し進化論の言ふ處に從ふて祖先を崇拜すれば變なものになる、進化論で人間の祖先は猿と言へば、猿を崇拜せねばならぬ、又猿の祖先は何かと訊ねて其祖先を崇拜しその又祖先を崇拜すると言ふことになれば殆ど際限がない、斯う言ふ風に祖先を研究して行けば最早進化論の領分を出て哲學の領分に入つて居るのである。

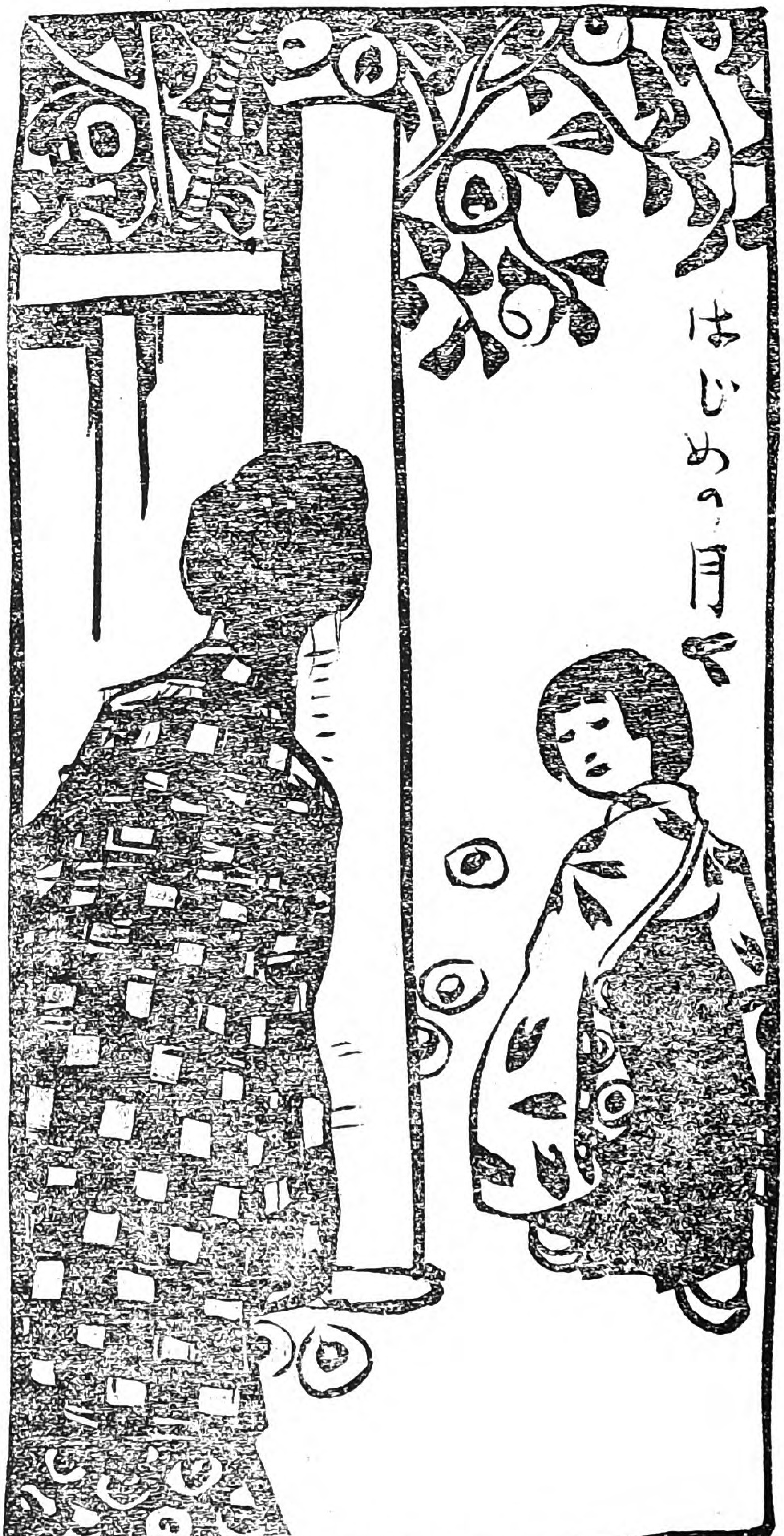
▲基礎を國民の祖先に置け

哲學的に祖先を研究することは別問題として、今日家族制度より生ずる弊害は主として個人の祖先を崇拜する爲めである、個人の祖先を崇拜すると、子孫は皆個人の祖先が殘して置いた家を守る爲めに犧牲とならねばならぬ。何も家の爲め、彼も家の爲めと言ふ樣に、家の爲めに子孫の發展も、子孫の進歩も犧牲に供せねばならぬことが起つて來る。子孫で家の犧牲となると言ふことは要するに個人の祖先を崇拜するより生ずる弊害である。故にこの個人の祖先を崇拜する代りに、共同の祖先を崇拜する樣になれば、家族制度を破壞せずして、家族制度より生ずる弊害を除くことが出來る我々共同の祖先は實に優俊なる人間であつたことは爭ふべからざる事實であるから、我々が共同の祖先を崇拜す所以は、我々も亦我々の祖先の如き優俊なる人間となることを望むからである。それには家の爲めに犧牲となつて優俊なる人間となることを妨げるは祖先崇拜の道でない、祖先崇拜は軈て子孫をして祖先の如く優俊なる人間となすことになると、人間は進歩する。國民は發展せざるを得ぬのである、子孫をして進歩せしめると否と、國民をして發展せしめると否とは、家族制度の基礎たる祖先崇拜の目的物を個人の祖先となすと共同の祖先となすとに依つて別れるのである。

▲個人主義と自覺した女

それから個人主義と言ふことであるが、これも個人主義と言ふものが如何なる程度まで家族制度と調和し

得るものかと言ふとの研究がまだ出來て居ないから、輕々に個人主義が如何の斯うのと言ふことは言はれぬが、然し前に言ふた通り、個人の祖先を崇拜する結果子孫をして祖先の犧牲となることの不道理なることは言ふまでもない。然れども個人主義の極端に走つて、家の祖先も認めないと謂ふことになつては大變である、これまでの女は



盲從的であつた、自覺なき服從であつた、悉く家の爲めに犧牲となつて居た。然れどもこれからの女はさう言ふ風には行かぬ、女をさう言ふ風に教育することは最早時勢が許さぬ、今日の女は自覺をして居る、自己

の人格を自覺し、自己の存在を自覺して居る。然し自己の天職を自覺して居ない、これからの女を敎育するには、自己の人格を自覺せしめ、自己の存在を自覺せしめると同時に、自己の天職も亦自覺せしめねばならぬ。從來の女は盲從的に服從的に家內に在つて家政を執り育兒に從事して居た、ところが現代の女は自己の人格を自覺し、自己の存在を自覺して來たので、家政や育兒のことが無意義の樣に思はれて、斯う言ふことに全力を盡して居るのが詰らない樣な氣がする、茲に於て不平が起り煩悶が生ずるのである。

▲女の天職は昔も今も變らない

然し斯う言ふ不平が起り、煩悶の生ずるのは現代の女が、自己の人格を自覺し自己の存在を自覺して、未だ自己の天職を自覺せざる罪である。女の天職は昔も今も變らない、夫を助けて現在に於て働き、次の國民を作り第二の我を作つて將來に働くのが女の唯一の天職である。自ら外に立つて働かずとも、內に在つて夫を助け、夫をして充分に驥足を展ばさせて居れば自ら天下を動かして居るのである。又子孫をして自己よりも優等なる者たらしめば、次の國民則ち第二の我が國家を組織するのであるから、人間としてこれ以上の天職はなからうと思ふ。斯る重大なる天職を有し、斯る立派なる働きをして居ながら、それを無意義の如く詰らない事の樣に思ふて居るのは、女の天職と言ふものを知らないからである。女の天職を自覺せざるが爲めである、昔の女は斯う言ふことを自覺せずに、盲從的に服從的に勉めて居た。これからの女は、自己の責任の重大なること、自己の天職の立派なことを自覺して、最も熱心に最も愉快に其任務を盡さねばならぬのである、要するに家庭に於て娘を敎育するには、娘を家の犧牲とする樣なことなく、女の天職を自覺せしめ、其天職に向つて進む樣に育てねばならぬと思ふ。則ち今日娘を持つた親は、娘は第二の我で、而かも次の國民であつて又その次の國民を作るべき大切なる者と思ひ少なくとも自分よりも優等なる者にする覺悟を以て敎

育せねばならぬ、斯くの如くにして始めて社會は進歩するのである。

▲女のみに罪は被せられぬ事

終に臨むで一言して置き度い事は現代の婦人が、舅姑のある所へ嫁に行くのを厭がるとか。虚榮に走るとかと言ふ非難である。成程外から見ると現代の婦人は舅姑のある家へ嫁に行くのを厭がる樣に見ゑる。又若い細君が夫の困るのも關はず虚榮に走つて居る樣にも見ゑる、然し内部に入つて詳に觀察すると、これは現代の婦人の罪ではない、舅姑のある所へ嫁に行くのを厭がるのは、嫁に行く當人に非ずしてその親である。嫁に行く當人は舅姑に仕へるのは如何いふものか固より經驗もないことであるから、斯る事には多くの注意を拂ふて居ない。唯目的とするのは夫とすべき當人であるゆゑ、その當人さへ自分の氣に入つて居れば、舅姑の有無なぞは殆ど眼中にないのである。それを親が自分の經驗から割り出して、舅姑のある所へ娘を遣るのは可愛相だから、嫁に遣るのなれば舅姑のない所でなければ、大切な娘を遣ることが出來ぬと言ふ樣なことを言ひ出し、遂には親子別居論などを擔ぎ出すに至つたのである。又若い細君が夫に強請て着物や指輪を買はして徒に虚榮に走ると言ふ非難もあるが、これとても細君のみの罪とは言へぬ。何故かと言ふに、新婚當時は妻が珍らしい爲め、彼れも買ふてやらう、此も買ふてやらうと、夫の方より進むで物を買ふ習慣を作つたものだから、其習慣が遂に妻の虚榮心を增長せしめたのである、故に妻に對する非難の過半は夫自身が受けねばならぬと思ふ。

何事にも感化と云ふことがある、女子は殊に感化され易い性情を持つてゐるから、虚榮心の增長するのもつまりは周圍の感化が不良いので、世の凡てが虚榮を排し、質實を尊ぶやうになれば、女子其ものも質實になるに相違ない、今は口で虚榮を排しながら、男子は勿論世間の凡てが虚榮を好む傾向があるから、猶更其風潮が盛んになるので、單り女子の罪ばかりでない。

子孫は家の奴隷でない

子爵　秋元興朝

▲徳川時代の夢を見てゐる親

娘を育るには如何すればよいか、娘には如何なる教育を施すべきか、これは却々六ヶ敷い問題である、一口に娘の教育と言ふけれども、親の身分にも種々ある娘の性質にも種々れる、親の方でも財産家もあれば、貧乏人もある、華族もあれば平民もある、軍人あり、學者あり、官吏あり、商人あり、職人あり、勞働者あり、親の身分と職業とに依りて娘の育方も違うであらう。教育法も違うであらう、又娘の方でも天才もあれば普通の人間もあり、活潑な女もあれば內氣な女もあると言ふ樣に一樣でないから、娘は斯の如くに教育すべしと言ふ一般的の方法を立てる譯には行かぬと思ふ。一般的の方法を立てる譯には行かぬが、さりとて今日では徳川時代の育て方を其儘用ひることは時勢が許さない、斯う言ふと今日は女子教育が盛になつて女子の學問が進むで居るから、徳川時代の教育なぞを其儘用ひて居る者は無いと言うだらう。成程女子教育が盛になつて女にも學問をさして居るゆゑ、徳川時代の教育とは進むで居るには違ひない。然れども未だ極端なる家族制度に心酔して居る親が多いので、假令娘に學問をさしても育て方は徳川時代と同じ樣に家族制度の犧牲にしやうとする、玆に於て娘と親の間に思想上の衝突が起る、悲劇が生ずるのである。

▲最愛の子でも犧牲にした家族制度

徳川時代に於ては家族制度と言ふものが絶大の威力を持つて居た、抽象的の家と言ふのを最も大切なるものとして居た、この家を守る爲めに子孫が必要と認め

られて居た。子孫はこの家を守る戰士にされて居たのである。故に家の爲めには子孫は犧牲にならねばならぬ、家の爲めには親は子を犧牲にして悔まなかつた。子は又家の爲めに犧牲になるのを以て、自の任務と心得て居た。家の爲めに犧牲になるのが孝行だと思ふて居た、親は子よりも家の方を大切に思ふて居る、家が大切であるゆゑ家を守る子が可愛いのである、家族制度の根本は斯う言ふものである。然し斯る極端なる家族制度は、封建時代に於ては適當なものであつたかも知れぬが、今日では決して好いものとは言へぬ。何故かと言ふに極端なる家族制度では抽象的の家のみを大切にして、總てのものを之が犧牲にしやうとする、最愛の子でも之が犧牲に供して悔まないのであるから、家の前には何物もないのは無理はない、家の爲めには我が子でさへも犧牲にするのであるゆゑ、家の前には義理もなければ人情もない、甚しきに至つては國家もないのである、我が子は可愛い、可愛い子であるから敎育せねばならぬ、然し敎育するには金が要る、金を費やすのは家に取つて利益でないと思ふと敎育せずに了う、家の爲めに子を犧牲にするのである、最愛の我が子でさへ家の爲めなりと稱して敎育を思ひ止る位であるから、公共事業などに金をだす筈がない、遂には國家を愛する念もなくなるのである、家のみを愛する結果、子を愛せず人を愛せず國を愛せずと言ふ樣になつては、極端なる家族制度は人道の賊であると同時に國家の敵である。

▲極論な個人主義は成立ぬ

斯う言へば家族制度と言ふものは絕對に惡いもので根本的に破壞せねばならぬかと言ふに、決してさうではない。成程封建時代の極端なる家族制度には、今言ふ如き弊害があるが、さりとてこの家族制度を根本より破壞して、個人主義を實行することが出來るかと言ふに、それは到底行へるものでない。極端なる家族制度に弊害があると等しく、極端なる個人主義にも亦弊害がある。イヤ弊害があるどころでない到底實行の出

來るものでない。人間に男女の區別がある以上は、そこに夫婦と言ふものがある、夫婦があれば子が出來る、夫婦があつて子が出來れば又子孫も出來る、斯う言ふ風に家族と言ふものが自然に出來ると、其家族が互に共存して行く上に於て都合のよい方法を執らねばならぬ、茲に於て家族制度と言ふものが起るのは自然の結果で、家族制度を根本より全然破壞して了うと言ふことは、人間が孤立して生存することの困難なると等しく、到底行なへるものでない。若し家族制度を根本より破壞して極端なる個人主義を實行したとすれば、親は親、子は子、夫は夫、妻は妻と言ふ樣に互に思ひ思ひの行動をとるからそこに、親子もなければ夫婦もない、遂に國家と言ふ觀念もなくなるのである、個人主義を極端に實行しやうとすれば、國家は亡びるのである、故に極端なる家族制度を排すると同時に極端なる個人主義も亦排擠せざるを得ぬのである。

▲子孫は家の奴隷でない

では如何すればよいかと言ふと、家族制度は何所までも存續せしめるのである、家族制度と言ふものは我國體と全然離るべからざるものであるから、何所までも保存するとして、前にも言ふた如き極端なる家族制度とならぬ樣にせねばならぬ、封建時代の家族制度は我國體に適合したるものであるが、極端なる家族制度は反つて國體を破壞するものである。故に家族制度は保存して行くとして、或る程度まで個人主義を容れねばならぬ、イヤ個人主義と言ふと語弊があるかも知れぬが、兎も角個人の人格は認めねばなるまい。從來の家族制度の如く家族の人格を認めず、家族は悉く家の奴隷となつて、家の爲めには家族は犧牲にならねばならぬと言ふ樣なことは、到底現代に於ては容れることの出來ないものである。これまでの家族制度では、家と言ふものが絶對に大切なるものであつて、子孫はこの家を守る一種の奴隷に過ぎなかつたのである。これは大變な誤解である、家と言ふものは成程大切なものには相違ない、然しその大切なるは何が故に大切であ

るかと言ふことを考へねばならぬ。これは言ふまでもない子孫安住の場所として大切なのである、祖先の祭を絶さない様にするのは家でない子孫である。子孫が大切であるから、其大切なる子孫の爲めに家が大切なのである、子孫が主で家は客である、然るを此道理を取り違へて主客を顛倒して子孫よりも家を尊び、子孫を家の犠牲にしやうとするのは以ての外である、斯う言ふ迷夢は何所までも打破せねばならぬのである。故に家族制度と個人主義との調和を圖つて玆に初めて、健全なる家族制度が出來るのである。



進歩せる家族制度が實行される様になれば、家庭に於ける娘の地位と言ふ問題も、自然に解決されるであらうと思ふ。

娘も家族の一人である以上、家族制度が進歩すれば娘も共に進歩する、國家の爲め社會の爲め、家族制度も進歩しなければならぬのであるから、娘だけ取り殘されると云ふ心配はないのである。

家族制度も個人主義も眼中にない

子爵　加納久宜

▲然んな問題の起らず濟む方法

家庭に於て家族制度と個人主義との衝突を如何に調和するかと言ふ問題は、私共には全く無意義である。世間では或はさう言ふことが問題になつて居るかも知れぬが、私の樣な考を持つて、私の子供を敎育する樣に敎育して居れば、家族制度と言ふことも念頭に浮かばねば、個人主義と言ふことも念頭に浮ばない、眼中家族制度なく又個人主義ないのである、加納式制度の下に加納式家庭を作つて、何の不平もなく何の衝突もなく、至つて平和に、至つて無事に暮して居るから、家庭に於て家族制度と個人主義とが衝突するなどと言ふ樣なことを聞ても、私には少しも感じない。であるから家庭に於て家族制度と個人主義との衝突を如何に調和するかと言ふ問題には答へられないが、斯う言ふ風にして行けば、さう云ふ問題の起らずに、平和な家庭を作つて、娘を圓滿に敎育して行けると言ふことなれば話をする。これとても私一家だけの事で、私が自分の娘を敎育した經驗談であるから、直に之を以て一般に行へと言ふのではない、只私は自分の娘を斯うして敎育したと言ふ事實を語るに過ぎないのである。

▲劇は一切見せない方針

私は四人の娘を育て、四人共嫁に遣りました、その育て方を言ふと別に變つたことはありませぬが、益にならぬことや危險なものには一切近づけない樣にして居る。女の最も好むものは演劇であるが、未だ思想の定まらない若い女に斯う言ふものを觀せるのは、百害あつて一利ないのである。女が總て危險なる思想を養ふは主としてこの演劇にあると思ふ、故に私は自分の

娘には絶對に演劇は觀せない方針を執つて居る、單に演劇のみでない、興行と名のつくものは一切觀せない樣にして居る、私は相撲は好きだが、その好きな相撲でさへも娘共には觀せないのである、それも壓制的に觀せないのでない、子供の時分から斯う言ふものを觀る習慣をつけず、演劇や其他の興行ものに對する趣味を養はない樣にして、此方から觀るなと言はなとも、本人が觀るを好まない樣に育てゝ居る、斯う言ふ樣に育てゝあるから、演劇を觀せないからとて決して不平を言はぬ、不平を言はぬどころでない、演劇などはテンデ腦裡にないのである。

▲娘に旅行をさせる

私の娘は斯う言ふ樣に演劇や興行ものを觀せないから、その代り娘共には極幼少の時分から旅行をさして居る、十二歳位の時分から誰れも附添はずに單獨で旅行をさすのである。如何いふ風にして旅行をさすかと言ふに、旅行をする前に四人の娘に各自に望みの旅行先を選定さすのである、すると皆思ひ々々の地方を選む、この四人が選むだ土地が一致すれば無論其所へ行くことに定るが、若し行きたいと言ふ旅行先が區々になる時は、悴が裁決することになつて居る。悴が裁決して行先が定ると、出發するまでに先づ旅行する地方の名所舊蹟は固より、歴史上の關係から、道中の路順まで研究さするのである地圖や其地方に關係の有る書物は無論買入れる、若し其地に關する書物が東京に無い時は、其地の地方官に賴むだり宿屋へ依賴して取寄せる、斯うして材料が揃ふと研究をさす、一通り研究が出來ると家庭談話會で其研究を發表さすのである一寸いひ後れたが私の家では家庭談話會と言ふものがある、それは毎週土曜日の午後六時から始まるので、家族は固より召使まで一室に集つて、思ひ々々の演説をするのである、御互に見聞を廣め意志の疏通を圖るのを目的として居る、この土曜日の家庭談話會へ娘共は出席して、旅行先に就ての研究を演説することになつて居る。

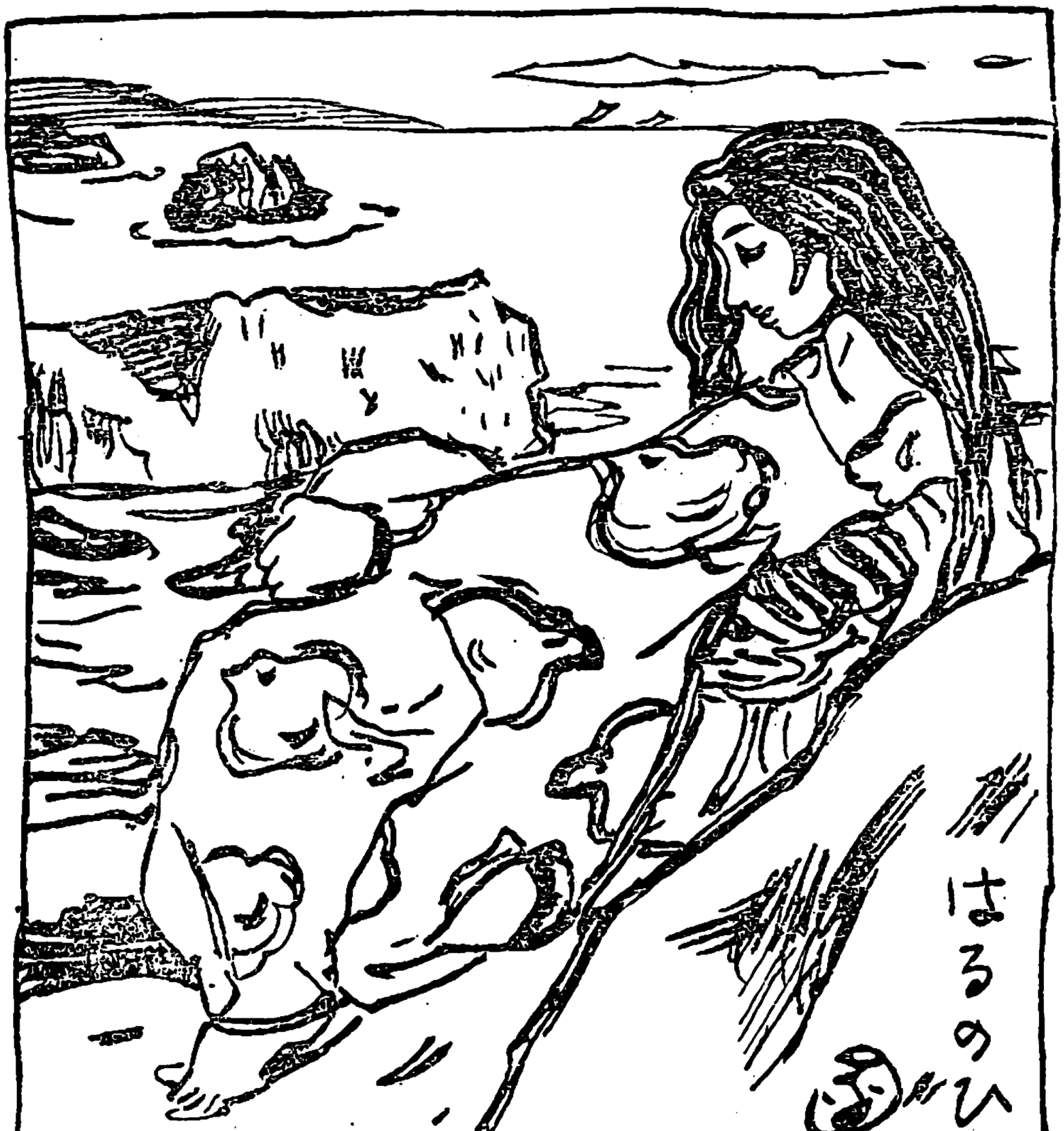
▲旅行の樂みと利益

この時若し其研究に缺點があれば互に補ひ合ひ、充分に旅行先の知識を養ふて置いてそれから出發するのである、出發の際にも決して餘分の金は持たしてやらぬ、汽車賃、俥賃、宿料等を豫じめ調べて豫算を作りこの豫算の金額と尚ほ臨時の用意をして豫算の三分の一の額を加へたるものを旅費として持たして遣ることにして居る、それだけの金で目的通りの旅行をして歸らねばならぬのである、若し途中で金が無くなつても決して此方から金を送る樣なことはせぬから、途中で金の無くならぬ樣に注意して旅行する樣に命令してある、萬一途中で金がなくなつた場合は、自分で何とか工夫して歸る樣と嚴しく言ひつけてあるから、旅行中は一生懸命に金の計算をして少しも贅な金を費はない樣に注意する習慣を養ふて居る。斯うして出發すると兼て研究して置いた其土地に就ての知識を實地に應用して旅行しながら實地に就て歷史上地理上の研究を爲し、その研究を毎日旅行日記に書いて置いて、歸つて來ると其日記に依つて例の家庭談話會の席上で旅行談を述べるのである。斯う言ふ樣に演劇や興行ものを觀せない代りに旅行をさして、而かも其旅行を無意味のものとせず、知識を得る事、身體を健康にする事、世間を知る事、萬事に注意深くなる事等の利益を得る樣にして居る。

▲加納式結婚法

娘を育てるのは斯う言ふ樣に、一方では演劇や興行もの等の惡いものに近けない樣にし、同時に旅行をさして健全なる思想を養ふて居るので、今日までは先づ失敗はなかつた。斯うして育て方は圓滿に行くとしてさて茲に問題となるのは結婚である。其の結婚と言ふものは所謂家族制度と個人主義が衝突の原因とよくなるものであるが、私の家では斯う言ふ衝突は決して起らぬ。何故かと言ふに、私の家では家族制度に依つて娘を家の犧牲にしやうとはせぬ。同時に又個人主義の

樣に自分勝手な我儘もさゝない、中間を執つて家族制度にも重きを置かず個人主義にも重きを置かない樣にして居る。それは如何いふ樣にして居るかと言ふと、先づ娘の婿を選むに、家族制度に重きを置いて居る人と標準を異にして居る、家族制度に重きを置いて居る人は、娘の婿を選む場合にも必ず家を標準とする、身分が如何の家柄が如何のと家と言ふものに重きを置いて肝心の婿になる人物には餘り注意を拂はない樣である、これは大變な誤解である、幾許身分があつて家柄がよくても、肝心の婿になる人物に見込がなかつたれば、其結婚は決して幸福を生むものでない、私は斯う言ふ標準で娘の婿は選まぬ、私が娘の婿を求めるには身分や家柄なぞは眼中に置かぬ、目的は人物である、標準は人格に在る、假令身分は低くとも門閥はなくとも、將來に見込のある人物を求める、然



し結婚は本人の意思に重きを置かねばならぬ、幾許親の氣に入つた人間でも本人の氣に染まねば配偶者とする譯に行かぬ、それを無理に强ゆるのは家族制度の弊である、私はさう言ふことはせぬ。

では如何するかと言ふと、私が娘の婿にしてもよいと思ふ人物を幾人も選むで置く、標準は無論今言ふた如く人物標準で身分や家柄は眼中にない、斯うして私が數名の候補者を選むで置いて、この候補者と交際をして、例の家庭談話會にも出席して貰ひ、御互に談話を交換する中に互の氣心が知れる、その候補者の中から、娘に好いた人物を選ますのである、そうして娘の氣にも入り又相手も承諾することになると愈々それを婿と定め、結婚の手續をするのである。その結婚の式も亦加納式で世間でやる樣な虛禮は排けて居る、加納式結婚と言へば互に誓約書を取交し、誓約書を取交す時に指輪を取交す、この誓約書と指輪とが夫婦の固めとなるのである。斯う言ふ風にして四人の娘を結婚さした、一人は陸軍大佐に、一人は理學士に、一人は法學士に、一人は法科大學生の妻となつて居る、そして孰れも圓滿な家庭を作つて居るので、私の考は失敗に終らなかつた、確に成功したと信じて居る、悴の嫁を取るのも亦これと同じ方法を執つた、先づ體格、性質、學問等に於て缺點のない女を選むで候補者としその候補者の中で悴の氣に入つた女を選まして嫁にした、これも亦確に成功したと信じて居る。斯う言ふ風にして行けば、家庭に於て家族制度と個人主義と衝突する樣なことなく、最も平和に最も圓滿に娘を育てゝ行くことが出來ると私は信じて居るのである。

家庭の組織に就て特に注意すべきは家庭は單純にして鞏固に且持續的でなければならぬと云ふことである、複雜なる家庭即ち異分子（僕婢の如き使用關係にあるものは別として）の這入つて居る家庭は鞏固なる家庭ではない、異分子は家庭を紛亂せしめるの因である、紛亂の多い家庭を調べて見ると、或は叔父とか叔母とか、やゝもすれば家庭に干涉する勢力のあるものが寄寓して居るとか、或は其他緣故のものを世話にして居るとか、必ず異分子が這入つて居る、而して此間に男女の關係などを生ずるは無論あり勝ちのことで、さなくして假令男子と男子、女子と女子との間にあつても、一家内いつも平和圓滿には行かないものである、故に健全なる家庭を組織せんと欲せば僕婢の如き使用關係にあるものゝ外は親子兄弟、水入らずの家庭でなければならぬ、

（今村恭太郎氏）

衣服の着こなし方

幷に帯の締めかた

立ち姿

江木榮子

◎舊式の美人と云へば、顔を中心として居りましたが近頃の美人と云へば、顔ばかりでなく、姿態全體にも重きを置くやうになりました。窓から顔を出した時の美人でなく、プラットフオムに立つた時の美人をも求めるやうになつたのでございます。

◎此の立ち姿と云ふものも、顔の道具卽ち目鼻立と同じ事で、短かい脚を長くすることも出來ませず、いかり肩を撫で肩にするわけにも參りませんけれども、衣服の着こなしとか、帯の結び工合とかの注意一つで、姿を見直すことがあるのでございます。衣服の着工合が、縱から見ても、横から見ても、隙間なく、整つて居りますと、全體の姿態が一層引立つて見えるのでございます。

◎日本の婦人が衣服を着た時には、帯から上には、襟がある、肩がある（肩揚がある）、腋下には皺がある、兎に角其邊が賑やかしく見えますが、帯から下は皺も襞もない、のんべんだらりとして如何にも淋しく見えます。ですから下に、タクシを拵へて、一寸其邊に變化を見せるのでございますが、元來日本の婦人は脚が短く、其上内輪で歩く習慣がついてをりますから、見た眼には餘り好くない、急に引伸すわけにも參りますまいから、せめて衣服の着やうでも巧くしたいもので

ございます。

◉脚を長く見せるには、成丈け衣服の丈を長くするのでございますね、長いと申しても程度がございますけれど、歩くのにずる〳〵引摺るやうなことのない限りは、長く着る方が宜しいやうでございます。

◉それから帯でございます、帯は日本婦人の姿勢上、服裝の中でも最も重大な關係を持つて居りますので、全身の釣合も帯で取れるのでございます。脊中の恰好から、お臀の工合、腰の邊りに掛けて、帯と云ふものの大切なことは、云ふに云はれぬ點にあります。

◉帯の締めやう一つで、臀部を大きく見せることも出來ますし、小さく見せることも出來ます、又臀部の恰好の可否もつまりは、帯の締めやうに因るのでございます。何の氣なしに締めるのと、少し氣を付けて、締めるのとは、見たところで餘程異つて參ります。

◉人に依りまして（或は體格にも因るのでせうが）腹部が凹むほど、緊く帯を締める人と、又、二月か三月位の懐姙でゝもあらうかと思ふほど、膨脹ませて締める人とがございます。腹太の締め方が不恰好なことは申すまでもございませんが、又あまり引締めすぎて、腹部の小さくなつて居るのは、薄つぺらで、安つぽく見えて不可せん。其處が云ふに云はれぬ加減ものでございませう。

◉偖て帯の締め方は其れとして、一つは又帯其物の地質なども、最初に於て好く選擇ばなければなりません縮緬とか、羽二重とか、地質の薄いものは、自然引締りが足りないやうです、地質はなるべくしつかりしたものが、適當いたします。

◉序に足袋のことを一言いたします、和服に白足袋は定つたものでございますが、その白足袋が、何時までも白くて居てくれば宜うございますが、直ぐ汚れ易いので、誰も困るのでございます、けれども白足袋の汚く垢染みてゐるほど、見にくいものはございません。江戸つ子は、人の服裝を見るのに、先づ第一に足もとを見て、それから着物なり、髪なりを見ると云ひますがなるほど、幾許新しい好い衣服を着て居ても、汚い

足袋を穿いてゐるのは、價値の落ちるものです、不斷でも、新しくないにしても、足袋は綺麗に洗濯したものを用ゐたいものでございます。

一般向き

關屋愛子

◉衣服の着こなしの巧いのは藝者に限ると云ふ人もございますが、私は必ず然うと思ひません。成るほど彼等は其れが商賣ですから、衣服の着こなしは巧いでせう、身體に能くうつるやうに着るでせうが、其餘りしつくりと、はまり過ぎた處が私共の嗜好に適ひません其は例へば人形に着物を着せたやうで、又料理屋のお料理を食べるやうで、決定り切つて却つて面白くないやうな處がございます。やはり一般の素人は素人らしい衣服を着こなしてゐる方が、快く感じます。

◉衣服を着るのに、前ばかり氣にして、背後をお留守にしてゐる人がございます。背から裾まで通つて、中央にあるべき脊筋の縫目が、帶の處までは正しく付いても、お尻の曲線の爲に調子が狂つて、其處から下は縫目が片一方へ偏つて居ることがございます。如何にも不體裁のものでございます、殊にをかしいのは、お尻の所で殊更に引締めた爲め、縫目の口が開きかゝつて居ることでございます、地質の弱い絹物などに能くあることでございます。

◉呼吸をするのも苦しからうと思はれるほど、襦袢、下着などの襟を咽喉の下で、嚴しく重ね合せてゐる人もあるかと思へば、又ゆるく、だらしなくしてある人も見受けますが、前者をハイカラとすれば、後者はバンカラなんでございませう。年若き婦人は、孰かと云へば、襟元の引締つた方が威嚴がございます。

◉處が人の母となりますと、お乳を飲ませる爲にさうさう引締めてばかりも居れず、襟を開ける習慣がついて、内に居る時は勿論、外へ出ても襟を開けて居るやうな事になります。年の若い人でも、子のある婦人は何うかすると襟元が開き過ぎて、胸まであらはになり

がちですが、此は能く注意すべきことでございませう

◉衣服の前がはだかつても、平然で歩いてゐる女も見ますが、實に下品に見えます、此は衣服の仕立方にも因り、また着やうにも因るのでせうが、注意すべきことです。私は孰かといへば痩せてゐる方でございますが、それでも普通女並巾よりも、後も、前も、五分づつ廣く、衽たけは並にして、ゆきも五分だけ長くし、襟下も思ひ切つて長く仕立ます。身巾が廣いと恰好がわるいなど云ひますが、決してそんなことはございません。

◉衣服を着ます時にも、襟先の直ぐ下を持つて、深く合せて、襟先の下へ結ぶやうにしますと、衣服の前がはだかりません。それからタクシが餘り長いと、餘計に脚が短くみえますから、長ければ帶下に入れるやうに、又人に依りまして高くなつたのも見ますが、高ければ高いほど腰の廻りが太つて見えますから、下前のタクシを手を入れて帶下に入れると恰好よくなります

◉胸から下、腰の邊りを飾る大切な所ですから、皺などの出來ないやうに、私は懐中鏡の大きいのを、帶の間へ入れて置きます、帶揚も反物紙を二枚に折つてその角を一寸落してするだけで、高いのは用ゐません

柳は青む

河井酔茗

柳は青む
ゆるやかに、やはらかに
はた伸やかに
舗石の上にぞ垂る、
薄青き街樹の柳
雨降りいでぬ
鈍色のおどめる寒さ
泥ふみかへす
電車の途の兩側に
柳は並ぶ濡色の
春のあをみのたゞよふ都會
晝の火動く玻璃戸に
わかわかしくしく
影ぞ顫ふ柳の青
忙しき市の生立に
驚愕と――
また張合と、嬉しさに
雨降る日
柳は青む
伸やかに、はたしなやかに



繪の東京(三)

築地居留地

荒井寛方



曲角の石がぼろぼろと
壊れてゆくほど温い日だが
窓のガラスも花の呼吸で
沸騰した乳のやうな
色を帯びて曇つてゐる。

高い窓の僕のこの瞳は
極々軽い靴を穿いて
何だかもの丶影を、さうだ、
もの丶影を追つてゐる。

胡夷



東京の芝居と大阪の芝居

中村春雨

◎金碧燦爛たる帝國劇場

一般の物質文明は素より、文學藝術などいふ精神文明の方面にかけても、一國の首府たる東京は矢張一番進んでゐる、今まで新らしい時勢に取殘されてゐたと思はるゝ芝居なども、近時は何や彼やいろんな刺激を受けて、多少動搖を始めたやうである、殊に今回、丸の内に新築成つて開場された帝國劇場の如きは、歐米の第二三流程度な大劇場をそのまゝソックリ持つて來たやうで、單に劇場といふ上から云へば、貧乏世帶の日本には、チト過ぎてゐる程の贅澤加減である、飾電燈に反射する燦爛たる金碧の色に蒸されて、上氣するやうな心地になるあの觀覽席や、大理石の角柱と十二ヶ月の装飾畫に圍まれた大食堂や、すべてそこらを出入する紳士淑女の影には一大夜會的の空氣が附き纏うて、今まで日本人一般に考へられてゐた日陰者の芝居を、急に白日の下に引き出して、社會的にその地位を保證するものゝ如く見えるのである。

◎有樂座

帝國劇場と同じ形式の下に出來てゐるのは今一つ、有樂座がある、これは多少西洋の寄席的のところもあるが、兎に角小劇場として小ヂンマリしたものである此等の劇場に入つて行くに、第一に氣持のよいのは、靴や上草履を履いたまゝで、上れる事である、腰を掛けるのが窮屈だなどゝ不平をこぼす人もあるらしいが

狹い檻の中に、しびれを切らして鮨漬になつてゐるのから見ると、何んなに樂だか知れない、加之に開場時間を、西洋の如く夕食後とすれば、別に食堂に出入する必要もなく、從つて金錢上の經濟と時間的の經濟とが並行して、半宵の藝術的娛樂が得られる譯だから誠に結構である、將來の文明國民に相應した新らしい芝居は、何うしてもかゝる西洋流の劇場に於て演ぜられなくてはならぬものであらう。

◎歌舞伎座式

併し、在來の純日本的の舊芝居を見るには、矢張り歌舞伎座以下の、日本風の劇場が善い、芝の上に坐つたといふ古の習慣をそのまゝに、平土間や、棧敷に埋つて、烟草を吸ふ、菓子を喰ふ、辨當を使ふ、大向ふからは「成駒屋ヤー」とか「澤瀉屋アー」とか、時折は「大根役者」などゝ罵聲、笑聲が起る、舞臺の方では意氣な根〆の三味線が鳴る、見物の氣をそゝつて頭で步き出せるやうな、小歌の節がひゞく、日本風のジミな背景の前に、繪畫式のコッテリした、化粧と扮裝をした俳優の印象がハッキリ浮上つて見える。

一體西洋風の舞臺を額緣の中に入れてあるのは、觀物席と、舞臺との間に一つの線を入れて、藝術を實世界から切り放し、これを活きた繪畫的作品として、鑑賞し、尊敬せしめんとするのである、故に此際に於ては、俳優その人は、立派な藝術家として、世間から認められん事を要求する、併し日本流の、屋臺的舞臺では、見物と俳優との間がハッキリ區別が附いてゐない同じ電氣燈や、瓦斯燈の下に、一視同仁的に照らされてゐる、見物は半ば娛樂半ば玩弄物的に、俳優等の藝を見てゐる、何うせ藝人だと、一段下眼に見てゐる、この呑氣な處、氣輕な處、洒落氣の多い處が、江戸時代の傳統を引いた東京の芝居小屋に行き亘つた空氣である。

◎江戸時代の餘勢

この江戸時代から傳つた空氣が、作者河竹默阿彌を

して、白浪物、侠客物等の狂言に大當りを取らせ、又先代菊五郎や左團次をして大なる人氣役者とならしめたのである。大江戸全盛の中心であつた吉原の花魁にからむ町奴と大盡客、或は强を挫き弱を扶くる義賊の頭領だのいゝなせを賣り物にする鳶の者だの、かゝる江戸つ子氣質の粋とも云ふべき者が、芝居小屋の中に生命を保つて流れ〳〵て來て、今以て一部の見物の喝采を博してゐるのである。

又、一方には、九代目團十郎をして芝居道の王者の如き大人氣を博せしめた所以は、家康とか、清正とか春日局とか、大石由良之助とかその他、文覺、高時などもいろ〳〵あるが、第一徳川時代い政治的、若くは社會的方面の大立者に扮して腹藝を見せると同時に、他面に市川家傳。荒事流の俤を何處かに傳へたによるものが多からうと思ふ、斯の如く、所謂東京の芝居には、徳川時代、江戸幕府といふ空氣が、上流の方面からも、下流の方面からも、又表からも、裏からも吹き通つて、一種の型を作るに至つたものである。

然るに、古い名優が次第に亡くなつて、その子孫が家藝を繼ぐ事になつた、今日、或俳優は洋行して兎に角新空氣に觸れて來る、又他の俳優も多少新教育を受けた結果、いろんな疑惑が生じて來る、見物の方面にも江戸や幕府とは緣遠い者が次第に增して來る、それやこれやで所謂舊劇壇にも新氣運が動きかけてゐるのではあるが、併し興行師なる者が附いてゐて、兎角後の方許り見てゐたがるのだから、容易に新しい事がドシドシ實行されるといふ譯に行かない。

要するに舊い芝居と舊い藝とを見やうと思へば在來の日本風の芝居小屋に限るが、今後の新らしい芝居と新しい藝は、どうしても西洋風の劇場に俟たなくてはならない、卽ち芝居を單なる娛樂物視する事より、一轉化して、一の國民的藝術として賞翫せんとする新時代の見物は、新劇場の味方とならなければならぬのである。

◎新しい芝居

尤も新らしい芝居といふのは、今の新派劇の事でないのは勿論である、新派劇の「不如歸」とか、「己が罪」とかいふ芝居の如きは、無理に見物の涙を搾るといふ方が主眼で、人間の實生活に切實な味のあるものではない、又新派の俳優の如きも、藝が徒らに誇張されてイヤ味、臭味が多く、藝術としての價値は、到底、舊芝居、舊俳優に及ばないのである、故に新らしい芝居とは明治の新文明が母となつてこれから產み出すべき藝術を指すのである、一口に云へば彼の自由劇場や、新時代劇などの演劇が純粹に日本化された演劇となる事である

猶この事もナカ〳〵長い説明を要するから暫らく措いて、東京の芝居の方は、兎に角、斯樣に新氣運の見えそめてゐるのに引かへ、大阪の芝居はまだ一向に武陵桃源の夢を貪つてゐるやうに見える。劇場方面には川上の帝國座の如き、西洋式のものが出來てはゐるが演劇方面には然うした氣及もないらしい、經濟的の神經は頗る銳敏に尖つてゐるのに引かへ、文藝などに對する觸覺は頗る痴鈍である。

◎大阪の劇場

一體、大阪の劇場の中心地、道頓堀は花街に接近してゐる、否、裏表だ、花柳社會と芝居とがしかく密接の關係がある事を示してゐるのは、封建時代そのまゝである、イヤ、大阪の芝居の櫓太鼓をトン〳〵打つてゐて、表の繪看板の何枚つゞきが軒の間口丈を占領してゐるのも昔風である、東京の芝居小屋は、內面は兎に角、外部丈は西洋風に塗り立てゝあるのが多いのに、大阪の重立つた芝居小屋は、スッカリ日本風で、羽織の代りに、上衣を引かけてゐない、質實な商人氣質を露出してゐるところにも、東西の文運の差異が現はれる芝居小屋の中に入つて見ると、花道や舞臺が東京のより一層低いやうで、又土間の一間も何だか狹いやうな氣がする紅提灯なんかは矢鱈に吊られて、派手々々しく見え、又土間や棧敷へ持込む御馳走は御重詰、丼物、その他何や彼や仰々しく、酒宴が始まるといふ勢

ひで、開幕中も何も區別がなく、又ムヤミに喝采などして騷々しい、要するに遊山に來てゐるやうな、花やかな、賑やかな、又無遠慮な、秩序とシマリのない、だらけた空氣が蕩然として場内をゆるく流れてめぐつてゐる。

◎大阪の人に解る芝居

演ずる芝居其物も、江戸の粹とか、花とか云つて、東京人の賞翫するものは、大阪人には向かないのである、由來商業の中に育ち、經濟社會の實利的空氣を呼吸してる人々に、俠骨とか意氣とか云ふやうな蠻的な事はあまり通用しない、又通用したら商業道德は毀されて、大阪市の立脚地は動搖する、近松翁の幾多の傑作が主として金錢問題、經濟問題を中心として浮沈し生死する男女の運命を描いてゐるのは、やがて大阪の地方的特色が出てゐるので感情のデリカシーがあり、近代的生活と通じた處もある、今の仁左衞門や雁次郎が此を演じて大人氣を博してゐるのも、道理である、時代物にしても、秀吉とか、片桐とか、木村長門守とかより、多く史的關係を有するものが、大阪人に早く了解され、若くは歡迎さるゝ所以である。

この他、人形芝居の文樂座、堀江座は大阪が天下一品を以て世に誇つてゐる處である、人形芝居その者は兎に角、淨瑠璃の名人がゐるのは爭はれない。

大阪俄から脱化した曾我の家劇も、此地の特産物であるが其の趣味は劣等である、要するに、過去の文藝の全盛地たる名殘が、大阪の芝居や俳優の上に見られてゐる、この時期が過ぎ去れば新らしい藝術の潮流が東京方面から押かけて、一度、洗禮を與へる事になるだらうと思ふ。

◎女優の新募集　劇界刷新を目的とせる文藝協會は、此度組織を一新し、坪内文學博士を會長として附屬演劇研究所を大いに擴張すると共に、新しく研究生を募集せり、將來女優を以て身を立てんとする者は、此際同所に申込むを宜しとす、高等女學校卒業程度の學力ありて、女優たり得る素質さへあれば研究生となることを得べし、志願者は保證人及び父兄の連署を以て願書に履歴書を添え、寫眞と共に牛込區余丁町文藝協會事務所に申込まるべし。

蘇生

横瀬夜雨

(中) その夜

八男助より、

畢竟「豫修」をさせたのだ、本當に騷ぐのはちつと早かつたよと、君の兄さんだけれど、人の惡い夜雨さんはすまして居らあ。僕はあの日は例によつて體操を願下にして、序に「豫科も休んで了へ、前望は多望だ」と勝手な理屈をつけて校内を出たのは二時少し前だつたか知らん、惶恐灘頭説惶恐零丁洋裏歎零丁と敎つたばかりの詩を微吟して大串の森を出はづれると、しほれた顏をして晃が東の路からやつて來た。本は貞雄さんが敎へてるのだが今日はやらないのか知らそれにしても柳原へ歸るのには南へ土手傳ひに行く筈だと思つて、おい夜雨さん歸つたかと聞くと、「先生は死んぢやつた」といふ。「この野郎おどかしやがる、どうしたんだ、死んぢやつたなんて」「だつて今電報が來たんだ、そんで大町と三道地へ沙汰に行くんだ、皆は貞雄さんの跡追つて下館へ行つた、三番で死骸が來るんだ」と言ふ「さうか、うそぢやあるまいな、ぢや急いで叔父さんを呼んで來い」と言ひすてゝつと離れた村までは十町しか無いのに、急に遠い遠い道にまぐれこんだやうになつて、靜に横はれる行手の道を見た、正面に筑波か眉庇を壓して立つてゐる。はてしなき空は深緑色に澄んで青い光を地に投げるのか田の畦に枯れた草まで靑う見える、自分はたゞ急いで。死んだのは本當だらうか、どうして死んだらう、醫者に見せるとは言つてゐたが、ひよつとしたら自殺ぢやないかなどゝいろ／＼の考へがてんぐらかつて、「眞か」に對してはどうしてもネガチブの答がその九を占めてゐるやうに思はれて。遠くの田に鍬を振る男の二三人が見える切り、長い田中の一本路は自分一人が歩いてゐる。と村の入口から俥が二臺射るやうに出て來た。前

なのは若い二十位の女、今泣いたばかりの目つきをして、かすかに紅を頬にとゞめてゐる、後の丸髷の四十ちかくと思はれるのが白いハンカチーフを顔にあてたまゝ通りすがりにぢつと自分を見おろした、眼は黒くぬれてゐた、嗚呼悠々たる行路の心、道行く人の上にもかなしみは有る！自分はなほ疑ひつゝ信じつゝ吉平がところから一走りに門へかけ込んだ、「飛んだことをしやんしたねい」とまづいつた者があつた。ぢうんと頭から釘をぶつ込まれたやうに感じてそれがおはつだと分つた靴の紐を解くのも忘れて「本たうか」「え、本當ですとも」

伯母さんが起つていらした、「本當だよ八男、これ」と電報を手にのせて下さる。トラジシス三バンデカヘルムカヘタノムとある。「こりや、……どうしたんだらう」「さうさ何したんだか少ともわからないよ」手がふるへて仕方がなかつた、シスといふ二字ばかりぎら〳〵した光を放つて目を刺すやうで。もう疑ふ餘地が無くなつた。夜雨さんは死んだのだ。「間違ぢやあるまいね」とくりかへして聞かれるので辛かつた。端に青い切手のついてる柔かな電報紙を膝において見つめてる伯母さんを見ると、あれほど氣強い人が迸らぬばかりに眼は涙に滿たされて、ペールな顔には眼の下に仄り紅が見えるばかりである。

……七ちやん、七ちやんはお母さんの泣いた顔を見たとが無かつたらう、七ちやんは「ばつち」(末子)としてお二人の愛を鍾めたばかりではなく多くの兄さんに可愛がられて現に大兄上を第二の父として其膝下に居るのみか、十九年の間憂いも辛いも知らずに育つて來て孝ちやんと兄弟揃つて官立大學の學生——未來は博士の「榮冠」を戴く人ぢや無いか。けれど直言するを許せ、伯母さんは他の六人を愛するよりもまあちやん一人をいとほしんでゐた、君達が博士になるからとて、まあちやんを失した伯母さんの涙を乾かすことはできない……………

と其時は思つたのである。かんにんし玉へ、死んだ夜雨さんは生きて來た、今だからこんなことも書くけれど、自分などの顚倒は別として實際あの騷つたら無かつた、今日は一日試驗前の貴い時を割いて、わが敬愛する花兄七君の爲に「報道」の筆を續けてゐるのだ…

座敷には入と中坪と新宅の小母さん達がゐて、口一つきくのでは無いが皆目には「驚愕」を示してゐる。聞き傳へ語りついで村の人達は一人づゝ二人づゝ集つ

て來る、凶報は瞬間に廣まりて大町の叔父さんは役場から駈けつけて來た、新宅の小叔さんもいつものにこにこ顔を變じてかけつけて來た、吉田へ誰かやつたかと叔父さんが言ふので、人をやるまでもない嫂さんの悲みを見たうは無いけれど姉さんには自分の口から傳へたいやうに思つたので、「ぢや私行つて來ませうすぐ起たうとしたら、いやお前は本の仕末をしてやれ」とそれ切り留められて宅へは儀兵衛が行つた。兄さんと揃つて走らして來るだらうか、兄さんだけ先來るだらうか。

「丸さんが」とか虎壽樣がとか我輩に眞似のできぬ調子で交〱「まあ飛んだことでしたね」「どうしてだかよね」「急病だとすれば死ぬ前に知らせる筈だ」「ほんと夢のやうではありませんか、魂消たことで」とあとから〱來ては言ふ。云ふものは事實辛くはあるまいが言はれるものは唯一人の伯母さんである、よくよく坐つてゐられることゝ思ふほどじつとしてゐる。入、中坪の小母さん達はそれを取圍んで、來る人來る人、交る交る應對する、炊出の米を量らせたり、膳椀を運ばせたり、倉に出入するのの宰領は新宅の小母さんであつた、そつちでもこつちでも一人二人より三人より「どうしたんだろね」「順ちやんが附いて行つたらうからまさか汽車に轢かれたゝではあンめい



渡しをこしてから

うによ」貞雄さんが飛出したので塾生も一人殘らず下館へ行つたといふ跡には、机が縱横に板の間に置き亂れて硯なども出し放しである。それを片端から擔ぎ出しては辰巳庫へ運ぶ者水を汲んで來てはそこらへぶちまける者。座敷中に散らばつた材木やら薪やら樫の落葉やらを片づけかける者。平川戶、筑波あたりからもだん／＼に寄るし、振つた弔詞をいへば「新年おめでたうムいます、さて此程は先生が亡くなられましたさうで」がある。ヤマカの屋號を知らぬ者は少からう、夜雨さんの名は病めるが故に詩人なるが故にさらに廣く知られてゐるので、其死は電の如く近郷近在に傳はつたらしい、自分は混雜した心の渦に出頭沒頭しつつをりながら、不思議にも、數日後に幾百人かの會葬者に護られて、富士を西南に淺間の煙を西に見る一の墓を幻視した。

時は愁傷せる一家の上にも移つて行つた。三里半を二十何分かで飛した貞雄さんは何の報をも齎らさず空しく歸つ來た。「いくら待つてゝも來ない、三時に水戶を出るの間違ぢやないか、それならまだ十二時間の隙があるので、どんな容子かと思つて一應戾つて來たといふ。「知らずにゐたら子供等も飛出したと見えて野殿で出くはしました。中には足袋跣のもあつたが、皆はアはア息をついて、私の跡を追つて來たといふのです、今から行つて五時まで待つと歸りは夜になるからおれと一しよに歸れと言つて其なり飛して來ました、多分今黑子あたりまで戾つたでせう」と續ける。「まあ彼方まで行つたんだらうか、知つてれば遣るんぢや無かつたに」蔽ふべからざる失望の色を顏にして伯母樣は坐つてる空も無さ相に見えて來た。三番で來なけりや堺屋からでも電話をかけて見りやよかつた」といひかけた入の小父さんは「貴樣も一度行け」と命令する。「停車場から電信をかけようかとは氣がついたけれど、あわてゝ出たので一文も持つてなかつたし、ぢや電話を借りて見ませう、腹が減つたから何かありませんか」貞雄さんはそれから熱くて手のつけられぬおむすびを二つ三つ頰張つてまた自轉車を飛ばす。

炊出しは追々と集つて來た女房連によりて盛んに爲された、釜の下を燃しながら焦つきを手にしてるもの流しに立ちかゝつて茹でたばかりの菜を手摑にするもの、東の戶口や湯殿の蔭には子供等までがや／＼してる、八月、上總から蓄音器を携へておよしさんがお祖母樣の見舞に來て村中を集めて聽かした時よりも今日

よつた人の方が多い、混雑はしてるけれど誰一人座敷で笑ふ者が無い、ひとり島公が嘷のきは立つた聲のシリルボイスが嘲笑的に聞えて、なぐりつけたかつた。他村から來た人でお待受しませうといふ者もあるので次の間に主を失つて殘つてる机を片づけた。黒檀?の戸簞笥は左の端に、「CAOBALTBLUE」と『煙塵』と『獨逸文學の研究』が右の端に載つてるきり、硯箱は使はず筆も置いてなし、寂しいものである。

五年間おなじに寢起きして、布團をかけてやつたり湯に入る世話もしたり、あと三十日でお別れする際になつて一人ぼつちにならせられた。寂しきわれ等の室よ。

寒くならぬ前は奥にゐたので、手廻の品は多く床の間にある、小さな桐の要簞笥、二つ並びの本箱、竹の書棚、片々の角の亡くなつた銅の鹿や、木版畫ばかり集めて綴ぢた「唐錦」や、角のくたくたになりかけたアルバムや一つ一つ障つて見た、醉茗さんが持つて來た通草の籠には寸斷した手紙が詰めてある、中に神はいかなれば師を悲劇より悲劇に移すだらうといふ意味の歌の裂かれたのもある。手紙は來るも來るも裂いてしまうし、日記はつけず、人と語るすやなし、折々はチヤームな聲で詩を朗吟するが、日の暮れぐれにはよく緣の柱にもたれて默然として雲を見る僻があつた。床ばしらの上に、中山百合子が自分で拵へた寫眞挾みに挾まれたまゝかけられてある、T、Fの手づから刻んで送れるマドンナの塑像も懸けてある。百合子は死んだ女だといふ。

死んではつまらない。しかし夜雨さんは生きてゐてもつまらないと思つたらう、おれは卑怯なんだとよく言つた。「幸福」も「健康」もはやくから脊を見せてゐたので夜雨さんは自ら救ふ力が無かつた……が、どうして死んだらうと思ふと、涙がとゞまらぬどの座敷にも人が立廻るのでたうとう納戸に入つて積み重ねた布團の上へ仰臥になつた。

今來るだらう、今來るだらうと思つては、青い?顔が目について、夢、夢、恐ろしい夢を見てゐるのだ。

ガタン〱と隱居所で音がする。大病後せうたいなくなつてるおばあさんは——まあやが死んだとも知らずにゐるだらう。

障子を明けて伯母さんがはいつて來た、一寸眼を押へて簞笥の前に立つたが、ふと自分を見つけてしばらくしてから八男氣を落さない方がよいよ、お前まで泣

いてくれたから、まあちやんも悅ぶだらう、さつき加養の蘭子とお慶が來てゐる處へ電信が届いたので泣いて歸つた今頃はあちらでも大騷をしてるだらう、お慶が歸つたのとお前の戻つたのとはひとあし違ひだつた」と靜かに言はれた。自分は車上の二人を思ひ出した、が口が利けなかつた。

夜になつた。女達が額でぶつかり合ふほど急がしく、働いてゐる。金平を切るもの、千六本を刻むもの、爼の音と庖丁のさツくさツくする音と、釜場には湯氣が白く籠つて、行きかふ足音が高い。爺やがあわてた顏をして南の大戸口から入つて來た、高津から薪を積んで筑波水門まで戻つて來たら俊が土手の下で土刈をやつてゐて、「おぢさん先生が死んだぞと敎えてくれやした。ちくだッぺと言つたら、ちくなもんかまあ行つて見さつせいといふので急いで來たら、どうもはや」といふ。

俊が水戶の四郞さんの店にゐる時、夜雨さん「とし」つて呼ぶとどうしても「とす」と聞えるといふので、邦子(山田)さんが、夜雨さんをトスさんと仇名したその俊君だ。

火がつく。廣間も中の間も次の間も點いた、奥座敷は來るとすぐ寢させるやうに絹布團を敷いて、二双の屛風で圍つて、枕元へはニッケル臺のランプを置いたやゝ細目に心を出したのが黃地の屛風に心細く映つてゐる、こゝへ置かれるのだな、冷たい、そして靑い。雨戶は一枚も引かぬ、中ぞらにかゝれる十日の月もやうやく光りはじめた。前倉の屋根はつゆじもであらう、瓦の一つ一つ銀のやうに光つてゐる。寂として風無き夜である。

貞雄さんの蹤を追つて野殿まで驅けたといふ子供等が三々五々歸つて來たが、今朝まで坐つてた机は片つけられる、捨てゝ行た本も辨當も何處へ藏はれたのやら、遲くはなつたし、腹はへる、家も心配なので途方に暮れたのであらう、戶口に固まつて入りかねてゐるのをやうやう板の間へ上らして膳に就いて貰ふ、巢立前のつばくろと同じで一日咿唔の聲を絕やさぬ連中が萎れ切つて顏ばかり見合つてゐるそれをお初とお米が給仕しながら、みんなは揃つて『門送り』をして上げればいゝやね、先生が亡くなつても貞雄さんが敎せてくれべい、野殿まで迎へに行つたんだつてね、おかみ樣も大へん喜んでゐる、夜になつたんだからもし何なら送り人を賴んでやッぺいかどうだ銈さん向上野まで

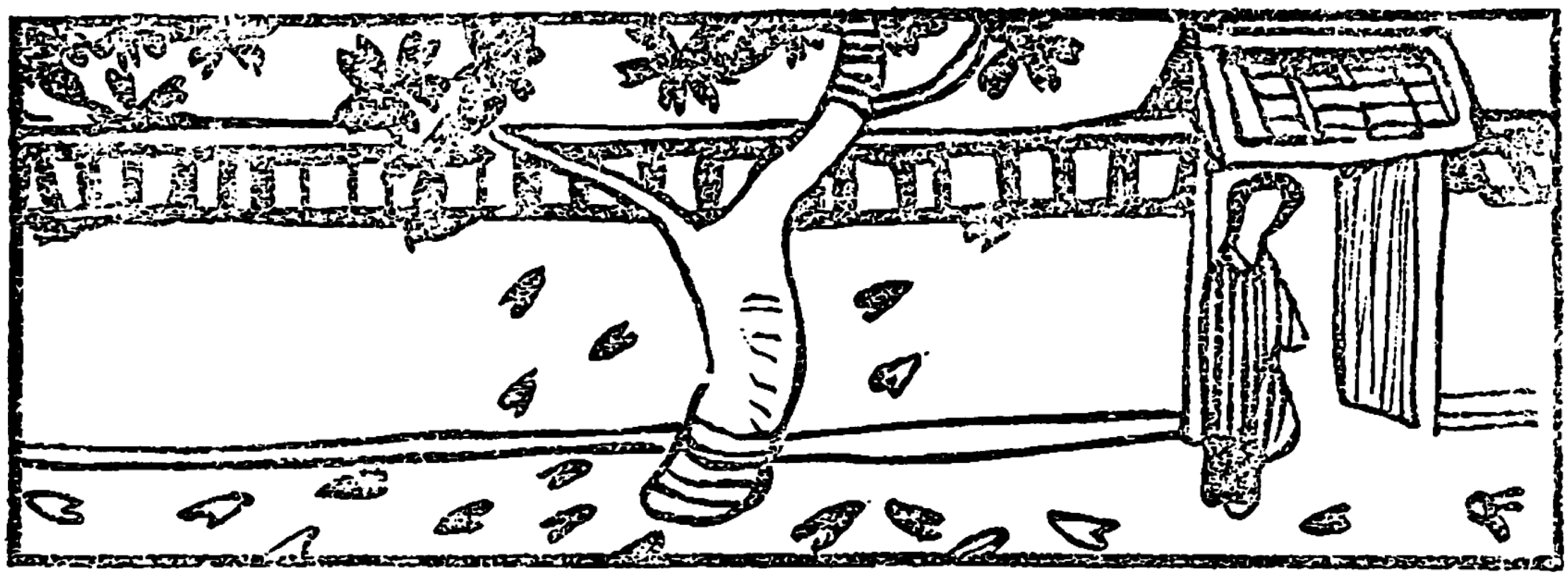
歸れるか、一人づゝの人は怖くはないかなど話してゐる中に、そろ〳〵元氣が恢復したと見えて棺内の入口で國が仰向にすつころがつたつけあん時のたん瘤はまだ引込まねいとか、野殿で貞雄さんに出くはしてまだ來ねいと言はれた時は引返してもつまらねいから下館まで行んべと言ふのと、腹が減るからそれよりや歸らうといふのと、やつつけろ派が十何人でへこたれ黨が十幾人で、誰と誰とかは二股大根だつけとか話しあつてゐた。

佛壇には燈明が上つてゐた、誰がつけたか線香が五つ六つ立つて縷々たる煙の中に阿彌陀如來の金碧が燦として奥深く見える。おれは死んだつて地獄へも極樂へも行かない頭を剃られて經帷子など着せられてはたまらぬ何々院何々居士のちつとも意味を成さぬ戒名をつけられるよりか横瀨虎壽で澤山だ、貴公等後で石を建てる必要があつたら、頭字は名筆の醉茗に賴めといつか冗談を言つたことがあつた、が今夜から事實の佛樣だ、大きらひな坊主頭に剃られよう六人か七人かのなまぐさ連のニヤゴ〳〵に送られて遠く行かねばならぬ、行けども行けども歸らざる、人を送りて野はあをきと歌つた人はやがて人に歌はるべき運命となつた。

伯母さん、倉からSに貰つた座布團を出して來て「も一枚のIさんからのは今度持たしてやつたから枕にして來るだらう、これも愛しがつてばかりゐずに平生も敷かせておけばよかつた、二つとも棺の中へ入れてやる」といふ。初めて見る大せいの村の女達はまあ見事なきれだこと、襦袢の胴になるとか、袖にしたいとか勝手に手にもつて見てゐる、山の如く盆に盛られた饅頭は皆の袖がくれに向うに見える。

ひとりこれのみならず、見よ手澤なめらかなる愛讀の書は茶簞笥の上にもある、神棚にもある、納戸に、中の間に、辰巳藏に儲へし千百の書の一つ一つに亡き人の愛は籠つてゐる、今こそ氣が立つてあゝしても居られるけれど、日を追ひ月を重ねてあまりに多き思出を辿りて心を傷ふやうなことはあるまいが、萬が一、世をはかなみ人と怨みての自殺であつたら？

何の爲に女達の手を假らずにその手廻の用を足してをつたか。何の爲に人の前でする肩に縋らして帶をしめてやり手を曳いて勝手に誘ひ出したりしか、生んでから三十年の間、財をつくし心をつくして其病ひを護つたかひも無く、一朝にして終焉の床に見るを得ざりし母のうらみよ、はかなき母子の契よ。（つゞく）



うら〳〵と
のどけき
春の
心より
匂ひ出たる
山ざくら
はな
眞淵

つりがねに
とまりて眠る
こてふかな
蕪村

花散るや
伽藍の樞
おとし行く
凡兆

落花枝に
歸る
と見れば
胡蝶かな

よしのやま
霞の奥は
知らねども
見ゆる限りは
さくらなりけり
知紀

明星や櫻さだめぬ山かつら　其角

油斷して花になりたる櫻哉　樗良

行きつくせば波青やかにうねりゐぬ
山ざくらなぞ咲きそめし町　牧水

仁和寺の門跡見ます
花の日と
法師幕打つ
山ざくらかな　晶子

久方の光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらん　紀友則

もゝしきの大宮人はいとまあれや
櫻かざして今日も暮らしつ　山邊赤人

花さかば告げんと言ひし山里の
使は來たり馬に鞍おけ　源頼政

ゆふひかげ
町なかに
飛ぶ
胡蝶哉
其角

奈良七重
七堂伽藍
八重櫻
芭蕉





とのもりのとものみやつこ心あらば
この春ばかり朝ぎよめすな　公忠

はるの夜は
さくらにあけて
しまひけり　桃青

戸をくれば
厨の水に
有明の
うす月
さしぬ
山櫻ばな　晶子

湯の中や
人より人に
蝶の飛ぶ　一茶

咲くからに
見るからに
花の散るからに　鬼貫





杣の鋒
櫻に斧を
忘れけり　保吉

妖艶に
怖ぢむともしぬさくらばな
灰いろ空のたそがれどきに　穂

ほのぼのと
山ざくら扉のありあけに
雉子なく翠す尾より峯より　薫園



山櫻かな　忠度
昔ながらの
荒れにしを
滋賀の都は
さゝなみや

人戀し
ひともし
ごろを
さくら
ちる　白雄



駒なべて
いざ見に行かん
ふるさとは
雪とのみこそ花は散るらめ　讀人不知

春のうぐひす何をきて痩やる
花を枕に蝶をかけて



咲いたさくらに
なぜ駒つなぐ
駒が男めば
花がちる



人手を省いて機械を使へ

女子商業學校學監　嘉悅孝子



▲女は何うしても算筆の心得が要る
▲女中の代りに好い機械を使ふこと
▲私の試してみたお米を磨ぐ新機械
▲洗濯の機械と機敏に足袋を洗ふ法
▲大小の家事に能く知識を働すこと

もう方々様から度々の御注文で、私の知つて居ります事は、皆お話致しつくしてしまつた程、何んにもこれと申して新らしいお話も御座いませんが、それでも折角の御出でゞすから何か主婦として心得べき二三の事をお話致して見ませう。商家にもあれ、官吏の家にもあれ、凡そ世界に家てふものを持つて居る以上は、其主婦に算筆の必要で有る事は言を待たぬのであります經濟方面が餘り複雜で無かつた昔すら、これが第一で有つて見れば、ましてお金が本位と成つて、經濟方面が非常に複雜に成つて來た今日では、もはやどうしてもです、どうしても算筆、經濟の心得が大切で有ります。處でこれを今日の日本の主婦はどういう風に使ひ居るかと申せば、甚だ心細い次第で、一般から押してまだ〳〵もそつと經濟を綿密にして見たらばと思はれる樣な點が澤山有ります。どうも旦那樣はほんの月給のお取り次ぎ者で、奥樣の手に渡つたが最後、皆羽根がついて舞ひ出すと言ふ樣では、心細い次第で御座います。どうぞしてまあかう言ふ事のない樣に、入をはかつて出るをなすと言ふ處に精神を置きまして、一日のお小使が何程と言ふを豫め月の始めに割當て置いてもうよく〳〵の事でなければ、つまり止むを得ぬ事で

ない限り、此上一文も越ぬ、其中からよし一錢でも五厘でも殘すと言ふ精神でやつてほしいものであります第二には人手をはぶく事です、世の中がだん〳〵進歩するにつれまして、工場やら公衆の事業が多くなり、其影響として現今女中の拂底で有る事は家々の奥樣がよく御存じで有るはづです之は止むを得ぬ事で、どうも不平を鳴らされる事では有りません、そこで成るべく人手をはぶいて、其代り機械を用ふ事を御すゝめ申たいもので有ります。と申して私は御存知の通り、どちらかと言へば舊式を好みます方で、成



る丈け、新に染まぬ樣、流れぬ樣にと絶えず注意して居ります。然しかう言ふ、たしかに我れに取て良き事は決して之を見逃しにするべき事では有りませぬ。早い話が、此頃お米を磨ぐ機械が發明されましたが、私は早速試して見まして、誠に重寶なものが出來て有難い事だと思ひました。今迄寒い時なぞ、女中が手を赤くして磨ぎますのを見て、非常に可哀さうに存じ、又自分手を下して見て、つらいことは知つて居りますが、それを彼の機械ですと、何の苦もなく冷い思ひもせず、きれいに磨がれるのですから、つま

りは女中を用はないでも宜い事にもなります。

又此頃以前私の學校に居りました或る先生の知人が洗濯機械を發明しました、私は早速それを只今試驗中ですが、どうやら都合がよい樣に思はれます。目下試驗中のものから、確とした處は申上られませんが、衣服なら五六枚を三十分ばかりに洗つて了ふので、それも自分は只機械を廻して居さへすれば、何の世話も有りません。小供にでも出來ます、然し私はこゝに又一つ御注意申上る事が有ります、それは丁度一昨日、私は其機械を試しました、其中に衣服五六枚と足袋を五六足入れまして、洗つて見ましたが衣服の方は實によく洗はれました、ところが足袋の方は思ふ樣に白くなりませんので、昨日其洗ひなをしをして居りますと、學校の先生の奥さんが見えまして、機械のお話から、そんな都合のいゝものが出來たら、私も早速試しませうとおつしやつた後、然し足袋だけは私が一つ發明して有りますとおつしやいます。私は早速それを伺ひますと、先づ足袋は十足でも二十足でも一夜水にひたして置きまして、翌朝ずつと板に並べ其上をカメノコタワシで端から摩つてゆきますと、それは實によくおちます、其上に水を流して、此度はきぬ洗粉（粉しやぼんの如きものにて十錢も買へば澤山にある）をつけて、再びこすりますと眞白に成ります。其早い事十足や二十足は譯もない事ですとお話下さいましたが、私はそれを聞いて實に感心しました、一家の主婦となるものは、此やうな心がけでなくては駄目です、早くばかり片付いても、清潔にならなかつたり、不秩序であつたりしてはなりません、かう言ふ樣に清潔に、しかも迅速に事は片付ける事に絶えず心がけて居る必要が有ります。

此外にも一つ、如何に人手をはぶく爲に、機械を用ふと言ても、又經濟に合ぬものは用ふる事はよろしく有りません。それについて私は瓦斯に付いて考へて居ります、私は瓦斯で試しては見ましたが、どうも瓦斯代が薪代より少し高くつきます上に器物の痛みます事、お竈がどうやら一年に二つ位どうしても入用に成つて來ます、こんな事を考へますと、矢つ張り從來の薪の方がよろしいかと今考へ中で御座いますが、何んでも隙のない樣に、家事の事に知識をも働かせて、勉める事が此からの婦人には大切で有らうと言ふ事を申上ておきます。



新しい世界

三宅やす子

豫て覺悟はして居りながらも、さていよ〳〵新生涯に入りますと今迄豫想しませんでした困難が、それかれそれと出て參りまして、あゝ、此樣と知つたらもう少し娘のうちにあれもして置けば可かつた、こうも用意しておいたならと後悔する事が往々ある事で御座います。其當座は事毎に新らしい事許りで、今迄に知らなかつた喜びも悲しみも恐れも深く身にしみておぼえます、恐らく一生を通じて結婚の前後ほど深い記憶はあるまいと、まあ思はれるので御座います。

從つて最初のうちの失策話などは一生忘れは致しますまい。ほんのまだ淺い經驗でございますが、思ひ出すまゝに一つ二つ申して見ませうなら。

初て『奧樣』と呼ばれました時はきまりが惡いといふより吃驚して了つて、あゝ成程それでは自分の事なのかと思つた樣な事で御座いました。それが當日旅に出て停車場に着くとすぐ宿屋の女中に云はれたので御座いますから、全くあはてゝしまつたので、此時の感じはそれこそ一生忘れはいたしませぬ。いよ〳〵新らしい家の人となりましては下女が「奧樣これを如何致しませう」「奧樣あれは」とうるさい樣に呼びますので初めは人事の樣で其都度まだ自分は奧樣などゝ賴られる程の者ではない、と云ふ樣な氣もしますしそれに何かしら、急に年でも取つた樣な氣がしてなりませんでした。先それより第一に差し當つて困つたのは食事の支度で御座いました。夫の嗜好が殆、全く分りませんのに、成るべく口に合ふ物を調理へて氣に入られたいと思つて其苦心は一通りではありませんでした。はじめての日、歸宅の時間までには整へておくつもりで居りました處が、少し歸りが早かつたのでまだ臺所でガタガタして居ましたら丁度みつかつて、「自分で一々手を下さなくても、松(下女)に指圖さへすれば可いから」と云はれましたので、それからは賴む樣にして少し手

傳ふ位の體にして、實は自分でしましたり、すつかり下用意をして下女にあとをさせて、下女にさせた積りにしましたり、こんなよけいな心配も致しました（尤今ではそんなどころでなく、だん／＼と注文も多くなつて、此頃は食事の前は大方私が大騷ぎして、僅かの物ながらあれこれ整へるので御座いますが）魚屋が參りましても一々下女に聞いて（下女は長く居てよく慣れて居ましたから）好き嫌ひなどを承知して取りきめましたので、忘れもしません「大御好物で」と下女の言葉を信じて鰆を取つて照燒にしておきましたらいきなり「今日こそは初めて腹が立つた」と云はれて何が何やら煙に卷かれて、恐る／＼其理由を尋ねますと「鰆は松の十八番で一週間に一度はくり返して必ず御膳につけられたものだつた、そんな食べあきたものを出されて腹が立つ」といふ事なんで御座います。度々したか如何か念を押さなかつたのが不注意ではありましたけれど、いはゞ無理の樣な腹立、それがまだ五日目の花嫁の時で御座いましたから、たゞもう何といふ事も出來ないで困つて居る許りでしたが、こんな些細な事でも其當時の事となれば大層に困つた事の樣に深く印象されて居ります。

却て當座は五里霧中でどうやら過しますが追々一月經ち、二月過ぎますにつれて、物事がわかればわかるほど心配にもなり、手に合はぬ事も多くなつて來ます受取つた額で足りない樣になつては大變と、午前を大方算盤取つて過した事もありましたし。さゝやかな活計でも慣れない事と云ふものは、ほんとにむづかしいものだと存じました、價にかまはず珍らしいものを買つて（食物）今から考へて見れば不經濟極まる事も平氣でしました。もうこれは半年以上過ぎてからではありましたが、やはり「秋」が初めてだつたもので御座いますから、ついよくわかりませんで、一口茄子を買はう、買はうと思ひながらについうか／＼と時を過してしまひました、けれども「冬になつてから、一口茄子の鹽漬や芥子漬を食べたい」といはれて居ながら、とう／＼一年むだをしてしまふのは如何にも殘念なので、諸方の八百屋を探しました擧句、こゝならと思ふ樣な、手廣い八百屋に行つて「是非に」と賴みますと價さへ高く拂へば無いでも無いと申しますから、とうとう一升四十五錢（普通、出る時季には一升十錢前後）の約束で注文しました。すると其處の亭主が云ひますのに「今も其處の公使館から西瓜を持つて來いと云ふ

御注文で、一個五圓といふ西瓜を納めに行くところです。色々な事を仰しやる方がありますよ、まあ大しておいしいものでもなし、たつて御入用でなければ漬物屋の鹽押でも芥子漬には御間に合ひませうそうなすつては如何です、「御孃さん」と笑ひながら私の顔を見て居るのです。あまり馬鹿げた注文をするものですから家持ちなどゝは思つてくれなかつたのでせう、私も恥かしい樣な氣がしましたが「しかし是非要るのだから」と遂々それを取り寄せましたが、これなどはほんの一寸の注意をしますれば、出盛りの時に苦もなく手に入りますから、價も何分の一かで濟み、心配もしないでよし、探しまはる時間も、勞力も入らず、おまけに八百屋の亭主などに馬鹿にされなくてもよかつたのに、これも經驗のない情なさで御座います。が、やはり、娘時代に注意が足りなかつた事もたしかに原因の一つだと思ひます。一々細少の點に渉つて物事を覺えて見なければならないと云ふのでは決してありませんが、何にでも注意を深くし、綿密に究めて習慣は出來るだけ娘時代に養つておく事は極く必要だといつもいろいろの場合に當つて深く感じます。一寸した點に注意が行き屆くと屆かないとでは妻の信用がどれほどちがひませう、この點で全く信じられもし、何事にも不信用になるでく〳〵大切な分れ目で御座いますから、片時も油斷なく氣をつけなければなりませんのに、私などはいつも此事では失敗許りで其當時も只今も、相變らず苦しんで居ります。とに角急に內外に氣あつかひが殖えますから、少し氣を付ければ何でも無い事もうつかりとしてゐて、手落になつて了ふ樣な事も往々ありますが、いつまで馴れぬせいにしても居られるもので有りませんし、勿論手落のないやうにと心掛けるのが當然なので御座いますから、せめて其あたりまへといふところにまで達し度いものだと思つて居ります。男子は妻といふものは氣を付けて呉れるもの、整へておいて呉れるもの、綿密なものとしてある女性の美點を、餘程頭において期待するものらしく考へられますから、其積りで出來るだけ行き屆く樣にしなければ飛んだ失望を與へる樣な事になります。これも年も足らずまだ實際にあたつてあまりした事のないものゝする事で御座いますから、男子側の不平は無理のない、眞實のところなので、待ち設けられる程の事はとても半分も出來はしませんが、まあなるべく努力するより外ないと思ひます。

それから極普通の事を知らないといつて、よく夫に笑はれました。一例は、床の間飾りの木魚を香爐と間違へたり、貝の柱（大きなのでした）をあはびだと云つたりしました事などは、娘の中こそ愛嬌談ですけれども、もう主婦となつてはこんな事から飛んだ恥をかく様になります、これには見聞を廣くする事が肝心で御座います。

外國語の知識があまり少いと云つて驚かれました、これは學校の罪などでは決してなく、これも心掛次第の事なので。卒業後更に人に就いて英語なり其他の語なり習ふ方が大分ありますが、こんなのは特別としてまあ裁縫とか料理、音樂、活花、茶の湯の様な學校時代に稽古の不足して居る方を修めますと、つい英語などは忘れがちで、折角つらひ思ひをして一通り修めた初歩の英語もまるで用も立たない事になつてしまひます。やはり此頃の事で御座いますから、其上に習はないまでも時々は英語の教科書などの塵を拂つて、ごく普通の言葉位聞いて、も理解出來る程にはしておかなければならないと思ひます。

和服の手入は困りませんけれども洋服の方はとかく不慣れなのと疎になるのとで、ヅボンの折目の見苦しくなる事などがあつて困ります。それからまた、洋服其他附屬品に關しての一般の知識があまり少なかつた爲に、隨分難義を致しました、ネクタイの結び方一つ知らないと云つて、不平を云はれたので御座います。やつと一事に慣れたと思へば、また新らしく知らない事が出て來、覺束ない事をして過してゆきます、他家へ上つても奥様方との御挨拶振も今迄の様に「お辭義をいくつもして居れば、先様で種々御口上を述べて居て下さる」等と暢氣な事も云つては居られず。それ相當に御あいさつしなければなりませんが、それがもう氣おくれする許りで、一向用にたりなくて困つて了ひます、宅に夫の知己友人方が見えまして、御とりもちに出ても何を申上げたらよいかなど〻、苦にして考へる様で、まだ〳〵とても御話にならないので御座います。まあこんな様な可笑しな事だらけですが早く少しでも物馴れる様にと願ひつ〻、まづ〳〵其日其日を送つて居る様なわけです。これはあとさきもないほんの頭にうかんだま〻の事で御座います。

娘時代の想像と、家庭時代の實行と、其處に餘程の間隔がありますから、宛然新しい世界へ入つた心持がいたします。

創作

短篇小說

水野葉舟選

○母（天賞）

信濃みゆき

「喜多屋のお時さんが流產したつて」

お波が裁縫の稽古から歸つて來ると、母のお貞は待ち倦んで居た樣に急き込んで斯う云つた。

「まアさう」とお波も眞から驚いたらしく、大きな眼をして母の顏を見詰めた。而して

「まア一寸も知らなかつた、誰がさう云つて」とすぐ問ひ返した。

「先刻林屋のお內儀さんが買物に來てさう云つたよ、一昨日の晩だつて」とお貞は何時もの樣に、長火鉢へ兩肱をついて早口に云つた。

「お時さんの子なら甚麽に可愛いでせうに、惜しい事したのネ」とお波は話に身が這入つたのと、手先が冷たいのとで、ぴたと長火鉢へ寄り添つて、溫かさうに上氣した、母の顏を見上げた。

「フヽン、大きな聲じや云はれないけれど、亡くなつて幸福さ、人つて云ふものは入らないお世話を何時までも色々な事云ふからネ」とお貞は火の活氣でどんよりした眼をわざとお波の視線から外して、冷笑ふ樣に云つた。

「だつてもう好いじやありませんか、繁太さんを入婿つたんですもの」とお波は母の云ひ方が氣に入らないので捨てる樣な云ひ方をした。

「所が世間の口はなか〳〵喧しいからネ」とお貞はまた輕蔑む樣に云つた。

「……………」默つて灰を搔平しながら聞いて居たお波は、嫌な氣持ちがした。

ぱつと電燈が點いた。そこらが明るくなつて夜らしくなると、

「おや、もう電氣が來たの？」とお貞は彈かれた樣に立ち上つた。

「何しろまア嫌な事さ」と獨言の樣に云ひながら、勝手の方へ行く母の後姿を、眤と見詰めて居たお波の美しい瞳には、不快らしい濁つた色が漂よつて居た。そして母の姿が見えなくなると、

「知らないと思つて――」と力のある小さい聲で口走つた。

「……お波ちやん、其麼事誰にも仰有ちや不可ませんよ、お波ちやんの父樣はネ、お波ちやんが母樣のお腹へ出來てから來なすつたんですよ」

仕事婆さんのお作さんが云つた此言葉を、お波はまた思ひ出したからである。

お波が踊を習ひ始めた八つの歳であつた。中庭の八重櫻が眞盛りだつた日の暮れ方、話好きのお作婆さんが何時もの裏二階で派手な裾模樣の紋付を忙がしさうに解いて居ると、そーつと音のしない樣に階子段を上つて來たお波は、笑ひながら足音を盜んで、

「トッ」とお作婆さんの肩へ捉つた。

「あれ、またお波ちやんは……」とお作婆さんは喫驚した樣にお波の可愛い顔を肩越しに見上げた。

「オホ……喫驚して？」とお波はさも得意らしく莞爾した、がすぐ其着物に目をつけて

「あら是誰の？母樣のでせう」とくるりと前へ廻つてお作婆さんの明り先へぴたりと坐つた。

「えゝ左樣で御座んす、母樣がお嫁樣の時お召になつたんですよ、それを婆やが斯うして早く解きましてネもつとずつと派手な色にお染め變へになるんですつて然うすると又婆やが、立派にお波ちやんのにお仕立申して上げますよ」と眼許の優しいお作婆さんは、明り先へ坐られても別に顰顔もしないで、長い袖の紅絹裏を、ギウ〱云はせて解きながら、斯う云つた。

「え、私のに？私の處にお振り袖が二つもあるのにまた是も？」と前髪を切り下げたお波は、嬉しさうに聞いた。

「えゝ」とお作婆さんは大きく點頭いて、「お嬉しいでせう、だからお波ちやんはお幸福だつて云ふんですよ好いた仲に出來たお子ですもの、可愛くて堪りませんわネ」と終ひは獨り言の樣に小さい聲で云つた。お波は只何となく嬉しかつた。そして無闇に母の若い時の

事が知りたくて、執念く聞いた。それをお作婆さんは別に煩いとも思はないで根氣よく話して聞かせた。其時である「……お波ちやん、其麼事誰にも……」とお波には一生忘れる事の出來ない言葉をお作婆さんは別に苦にもしないで普通の聲で、お波の胸へ刻み込んだのは……。

其時は、それが何となく好い事の樣に思はれて、お波は他愛無く莞爾々々して居た。けれど其心持ちは長くは續かなかつた。何時とはなしに母の愛に反抗する樣になつた。「波ちやんは此頃什麼したの？眞實に不可なくなつたネ、前は恁麼娘じやなかつたけれど……」と母のお貞が度々云ふ樣になつた。其麼事を云はれると猶焦れつたくなつて、只理由もなく泣いた。

喜多屋のお時さんの話が出ると、お貞はいつも口汚なく輕蔑んだ。其度にお波はじり〳〵する程嫌な氣がして、わざとお時さんを庇ふ樣な事許り云つた。さうしてお貞が不安らしい顏をするのを見ると、何か或物に勝ち誇つた樣な氣がして、冷たい笑ひ方をした。

勝手・高調子に笑ふ母の聲がする。眤と火鉢の中を見詰めて考へて居たお波はついと立つた。そして「母樣お湯へ行つて來ますよ」と障子の外から優しみの無い聲で云つた。

「今から？もうすぐお夕飯だのに」とお貞は大きな聲で問ひ返した。

「お夕飯なんか食べなくたつて好う御座んす、さうして今夜お時さんの家へお見舞に行つて來ますよ」と云ひ捨てたまゝ、母がお燗でもつけて居るらしい聲で何か云つて居るのを聞かうともしないで、中形友染の前掛けを掛けたまゝ、店の名入れの手拭ひを持つて、お波は露路口の格子戸をがらつと明けると、ふいと外へ出た。花街近い夕暮の町は、何となく色づいて居た。

○轉機（地賞）

小笠原　さだ子

「逢魔が時に外で遊んで居ると、おばけが來てさらつてゆく〳〵」

と平常御祖母さんから云聞かされる此言葉が友子の子供心にどれ程恐しくしみ込んで居たらう夜ほどいやなものは無かつた「夜」と云ふ事からして其が何か大なる魔力のある無形のけだものゝ樣にも思はれてわけても夕方は其怪しい化性がそろ〳〵現はれてくるいわゆるお祖母さんの「逢魔が時」と云ふ恐しい刻限で

あるかの樣に思つて居た

太陽が西に落ちかゝると裏の墓場であわたゞしく烏が鳴き出す友子は其聲をきくと何となく物悲しい名殘惜しい樣な心持がしてきて急に母さんやおばァ樣が戀しくなつてくる

「私、家に歸るの」

と云ひすてたまゝ未だ日のくれる事なぞには氣もつかず夢中になつて遊び廻つて居る子供の群からはなれてハタ〳〵と家にかけ込んでくる

友子の家は福島町でも片よつた西うらと云つた昔しの士族町であつた、家の直ぐうらが東安寺と云ふ寺の墓場で便所にゆくと高窓から直ぐそこの墓場の森がすつかり見える、友子はきつと誰れかと一所でなければ便所には行けなかつた、友子の家は平家の大きな家であつた晝中でもかもゐと高い天井とのすみなどの光線のあたらない所などには云ひ樣のないうす氣味な陰影がひそんで居る樣で何となく淋しく感じて居た、庭もかなり廣かつた櫻だの梅だの松だのびつしり茂つた中に苔のむした石燈籠がすえてあつた、北側には竹藪があつて深い藪の色をした中に細い若竹が日をうけてチラ〳〵青く光つて居た

そこにまはり椽になつた父の書齋があつた友子はいつもこゝに來て繪本を見たり繪をかいたりして一人で遊んで居る

「おまへは大きくなつたら美術家になるのか」

と云つて友子の父は娘の頭をなでながらよくかう云つて笑つた

友子は幼い時からあまり外で遊ぶ事なぞは好まなかつた、古い繪草紙の八犬傳だの田舍源氏だのを見て居るのが一番面白いと思つて居た、殊に田舍源氏の光氏の華やかな生活がどれ程友子の心を醉はしめたかそして幼い彼の心に男！と云ふものに對して或る思を早くから解せしめたのも此等の繪草紙であつた、それに友子を非常な空想家にもさした、小學校に通ふ時分にも外の子供がお手玉だのまりつきだのに夢中になつて居る時にも友子はいつも机のそばをはなれなかつたそして石磐を出しては心覺えのお姫樣をかいたり美しい光氏の顔などをかいては一人で空想に落ちて居た

友子が十五六の時であつた、もう其時は町の女學校に通つて居た、或夕方とも子は息を切つてあわたゞしく家にかけこんで來た

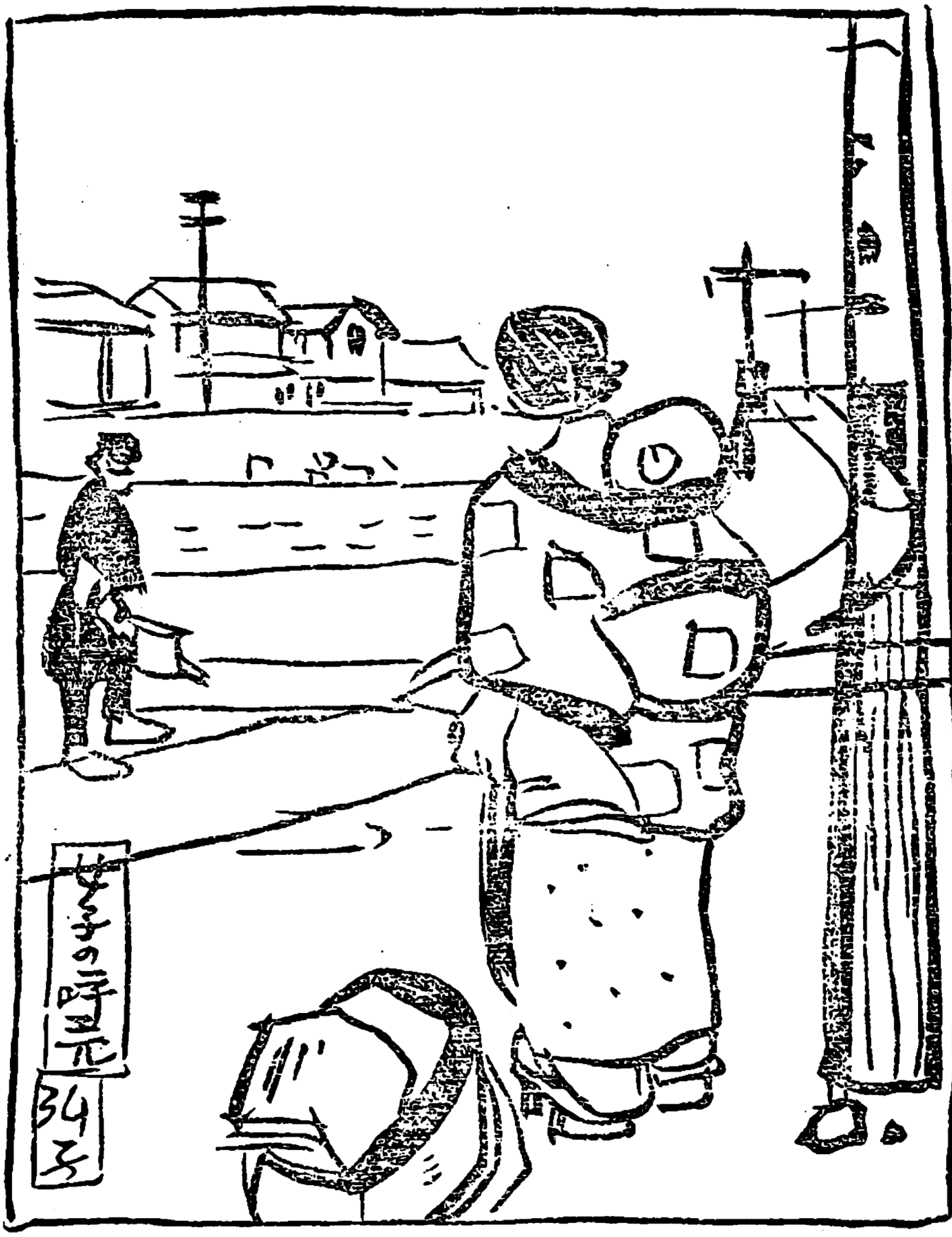
「何ですねそんな仰山らしく」

火鉢のそばで何かつぎものかをして居た母はたしなめる樣に云つた

「だつて阿母さん……今御墓の前を通つてきますとね男の子が大勢よつて後からワーッつて云ふと何か私にぶつつけたのびつくりしてふり返つて見るとねまア猫の死んだのなのまァ私恐くつて〱」

友子はどの位驚かされたのか顏の色がまつ青になつて唇の色までが變つて居た

「もうあんな裏を通るんじや有りませんよほんとに此邊の子は下等社會の子許りなんだから」



（天賞）女の呼聲　芝　中村弘子

母親はいまいましさうにかう云つた、其翌日友子は頭がいたいと云つて一日ねて居た

それから妙に時々熱が出たり寒氣がしたり又でくさゝいな事などに色をかへてふるへる程驚いたりする事があつた

「お母さん私氣味がわるいのよ猫のかほが目のところに居るんですもの」

などゝ夜中に母親をゆり起す事なども有つた母も始めの内は氣にもとめなかつたが晝間でものぼせた樣にぼうつとして居る娘を見ると何だか心配になつてきた
「ね一體此子はどうしたんでせう」
こんな事を心配さうにお祖母さんに云ふ樣になつた
お祖母さんは物におびえたり夜うなされたりする孫の樣子を見るときつと是は猫の死靈に取りつかれたのだときめて居た、けれど其は口には出さなかつた、たゞ朝夕、神佛に向つて熱心に祈つた
友子はあれからと云ふものは夜になると不思議に色色なものが目の前に現はれてくる
美しい光氏の首とつぶし島田の「たそがれ」の首とが互にもつれたりはなれたりまりの樣にころがつたりして寢て居友子の顏の上に出てくる、それがだん〳〵天井の方に上つてゆくかと思ふと今度は猫の泥にまみれたまゝ白い目をむいて向つてくる「アヽこわい」と思つて横をむてうとすると蒲團の上から何んだか形體の知れぬ煙の樣なうよ〳〵したものがヅーとかぶさつてくる、ともう大きな石でおしつぶされる程重くつてどうしても動く事が出來なくなる、アもう殺されたつて仕方がないと覺悟してじつとして居る内に少しそれがかるくなつた樣にも思つてそうッと目を開けて見ると臺ランプが細めにつかつたまゝ母さんがすや〳〵とねて居る外何にも見えなかつた、友子は體が氣持わるく汗ばんて居るのを感じるアヽ早く夜が明ければいゝとひたすらどこかで鷄のなくのをまつた、友子は毎朝早くどこからか一番鷄の鳴くのがきこえ出すと始めて生返つた樣にうれしかつたそれから少しの間安心してぐつすり寢むつて終ふ
こんな不安な氣だるい氣分が一と月もつゞいた家のものもどこか靜かな溫泉にでもつれて行つたならなどとひそ〳〵相談して居た
友子は或る朝起ると今迄にない或る變化が自分の體にきた事を知つた、是を知つた時友子は少さな胸をおとらした
椽がはに出たまゝじつと靜かな朝の庭を眺めながら母親に云はうか云ふまいかと思ひまよつた「……」と思ふとたえがたい羞耻か體中にみなぎつてもう自分はあの無邪氣なお友達仲間に交つてゆく事が出來なくなつて終つた樣にも思はれたそれにこの事が家のものに知れたなら意地の惡るい書生や女中に何とかからかはれやしまいかいつもならどんな事でも負けてやしないの

だけれど……友子はもう家のものに顔を見られるのがいやでたまらなかつた
いつもの樣に母親に甘へる事すら何んだか氣がとがめて出來なかつた
其日の午後やう〱此事を母親に告げた
「ね、お祖母さんよう〱安心しまたの、此子が先達からおかしな具合なのもあの故でしたのさ、今朝からあつたんですつて」
と笑ひながらてう云つた
「そうだつたのかへ、私は又死靈にでもつかれたのじやないかと思つてねおまへどの位心配したか」
お祖母さんもニコ〱しながら云つた
「昔ならお赤飯をたいて祝つたものだが、とも子やてれからはもう女らしくおてんばは出來ないよ」と云つた、友子は泣き出しさうな顔をして母親によりかゝつて坐つて居た。

○榮さんと女（入賞）

横濱市　うめの

「榮助さんの今一緒に居ん女てえのは一體何したんだらう……」と、長火鉢の前にあぐらをかいて、眼のはれぼつたい、顔色のつや〱した三十男の主人がてう云た。「何でも以前から、榮助さんによく聞いた女なのお幸とかつてね、それに又何うして逢て何うして何うなつたんだか、よう知らないけど、又一緒になつて了たんだわ……顔は好いわね、小柄で、けどヒステリーの樣な、我儘らしい、氣の強さうな、其癖直き泣き相な女だわ……それが小父さん……」と、色の白い若い客の娘が、丸い顎を一寸引く樣にして、呆れた表情をし乍ら「其お幸がね、不意に家へ來たには呆れたわ。」
「へえ、一人でかい？」主人は面白相に娘の顔を見た
「否さ、榮さんが連れて來たんだけど、だつて私愕ろいたわ。それ迄もう榮さんと云ふ人には逢へる時はないと……何故てね、榮さんがあんな風に逃げて了たのだから、よもや二度と顔合せられた義理ぢやないんだわ……だのに平氣で……而かもお幸と二人でよ……」
「だつておかしいぜ。去年お前の家に榮さんが居た頃「遂々お磯さんを貰ふ事にきめた。」なんて云てゐたつけが……」「さうなの〱……それもね、恐ろしく熱心にね、てんな事を云てきめたんだわ、あのおいそさんを貰ふに就ては、定めて今迄の私の品行を知てゐる、皆さんは不安に思ふでしようから、どうぞ結婚しない中

に、私の行動を向ふ半年位見てからにして頂いても好い位です。なんて大眞面目で……最も其時には心からさう思てゐたのでせよけど那麼事を云たのよ。」「フウンおや矢張り噓ぢあないんだね。それで？」と主人は熱心に娘の顏をみつめた。「でねーそれから三十日程は何事もなく家にゐたわ。だけど其間あの人はまあ優しいつたつて……何て云たらよからう……まあそれこそきまりが惡い位でね、それこそ榮さんとなら眞個に何んなにしてだつて……と私思たわ。全くあの人丈けは忘れられないの……」と恍惚した樣にこう云たが、不圖主人が笑て自分の顏を見てゐたのに氣が生いて、娘は稍や顏を染め乍ら「あらだつて小父さん眞個だわ…………」と笑ひ乍らこう云た。主人は何處かなつこい娘だなと思た。「まあ好いやね、それあ無論眞個だらうよ。彼男だからね……お磯さん餘り喋舌らしたんで口が渴いたらう。一ッお剝きよ、存外甘いよ」と主人は猫板の上にのせた、蜜柑を集めた。「有難う……」と娘は皮の軟かい甘相なのを取て剝き乍ら、「それからなの、何でもお酉樣で濱の眞金町……遊廓ね、彼處が賑やかだと云ふので、行て見樣て云ふのでしよ、だけど其時私行かなかつたの……そして彼人一人で出て行たわい〻けどそれつきり……「歸らないのかい？」と主人は蜜柑の皮を吐き出し乍らこう云た。「え〻……さあ家の母なんか、ほら見ろ榮助の事だもの一寸も不思議はありあしない、だが何處で引か〻つたらうなんて割合ひに平氣だつたけど私あ、あんなに思て〻くれたんだから眞逆私と云ふ者を委り忘れて了ふ筈がないと思ふと、屹度今日こそ〳〵と何だか歸て來る樣な氣がしてゐたのよ……矢張り自惚だつたのね……だけど小父さん私今でも、何故だか彼人は私を厭やになつたとか、捨てられたとかは思へないの、だが其時には最う苛々して來了たわ……でねもう〳〵彼人には彼時きし二度と逢ふ人ぢあないんだ……逢へた義理ぢやないものと思てゐるとね、一月計りして、もう暮れの押し詰てから、其時私一人で仕事をしてゐたは、夜なべをね、と靜かに格子を開ける音がするから出て見ると、色白の若い男が笑て立てゐるの、それが榮さんなんだもの……ねえ愕ろいて了たわ……だけど一向平氣で「お磯さん？父樣がゐるなら急いで逢はしておくれよ……お願ひがあるんだから……お前には後でゆつくり聞いて貰ふからさ……」て厭やにせか〳〵してゐるんでしよ、それから二階へ通して私は、胸がドキ〳〵してゐたけど階

下が空だから降りて來てゐると、間もなく榮さんが降りて來て、私のゐるのも忘れた樣に、門口へ出ていつたかと思ふと此度は一人の肥肉な白色の女を連れて入てきたの、私あ夢の樣な氣がしてね……「非常識な男だなそれがお幸だね？」「ええ、割合ひに洒々して、さも場慣れた樣な樣子でね、憎い樣な氣もしたわ、而て私に一寸會釋し乍ら二人で二階へ昇て行くんでしよ何うする積りだらうと思て故意とお茶を持て行くと、父が其女に、貴女が此樣男でも、添いたいつて心があるなら、夫婦になつたら好いでしよ、それで榮助も眞面目になれるなら此上なしでさす。」と云ふと「有難う存じます……」と嬉し相に榮さんの方を見てゐるの、而て歸る時に彼人だち「家が決たら知らせるから遊びに來なさい！お磯さんにも咄したい事があるんだからね。」つて例の眼をしてるの……何うも逢ふと憎めない人ね幸て云へば幸な人だわ、お金はあるしさ、年中彼那事ばかりして日を送てゐるんだもの……三十四にもなつてねえ……」と娘は思ひ染みた樣に云た。



（人賞）　二階の窓　京橋　鈴木よろづ子

○世間

横濱　田枝子

以前の亭主の鼻先で世帯を持つなんて、隨分お樂さんで女も厚皮ぢやありませんか。をつてまた

お君ちやんて兒がもう五つか六つになりませうよ。小供は一番罪がありませんや、毎日生んで貰たお袋の、目の前で何にも知らずに遊びまはつてるんですからね其で又お樂さんも平氣なもんですよ。心ぢや何と思てるんだかしらないけど、他人から見ちや、まるで冷淡ですてとよ。

え、全く、小供は無邪氣ですからね、お樂さんがきれいにして帳場に坐てる時なぞ、まあ近所の小供と一緒になつて店先へ上り坐で、おばさんとか何とか云ふ樣な時もありますさあ。其麽時にですよ、優しい詞一つかけやしませんもの、其は尤も故意とかもしれませんがね、何ぼ何でもね、他人から見ると餘り曲がなさ過ぎてよく云はれませんよ、え丶？通さんですか。あの男も暢氣な人間ですけど斯うなつちや流石に意地が出まさあ、藝者買をする樣な男にや末の見込がないつてんで向ふから御免蒙むつたんですからね。……見込があるかないか、よく眼をあけて見てるが好いつてた樣な突張つた氣にもなるぢやありませんか。おまけにお樂さんとはお互に好で夫婦になつた仲でせう。棄て丶逃げたかと思やあ、いくら氣樂やだつて、男ですからね、……通さんもね、什うして此頃はなか〳〵眞面目に働いて升よ。月給ですか？今ぢや四拾圓もとりますかしら？ですが全く、通さんも惡かつたんですよ。あの時分にやね、月給日つて云ふと、定つてもう眞直にあ歸つて來ないんですよ。懷に札の束をふくらませて花柳街をうろ〳〵する其だけでも嬉しいんです、其から馴染の樓へ上つて、若いきれいな妓を澤山並べて、馬鹿陽氣に騷ぐんです、其麽時にあ、家の事も女房の事も小供の事も何もかも頭から消えて了てるんですねまあ誰しも若い間はそうですが、又通さんときたら苦勞つて事知らない男ですから、たゞ夢中で浮れてるんですよ。其代りあゝ云ふ罪のない男だから、決して其の女に深入したり、其爲めに他人に迷惑かけたりなんて事はないんですよ、其にお樂さんだつてあの男の道樂は今始まつた譯ぢやなし昔から知りぬいて一緒になつといて今更ら、其麽愛憎づかし見たいな事云つて出てゆくなんて、世間の手前だつて餘りよくもないんですよ、其に通さんが月給皆つかつて了たつてちつとも世帶にさわる事ぢやなし、あんな兒まであるんだからも少し音なしくしてれば好いんでさあ！でも通さんも不幸ですよ、此間もね、私の家へ遊びにきて「お神さん、成たけ、若いきれいなのを俺に世話しておくれ、

頼むよ」つて云ふんでせう、私も「ようござんす。お樂さんに負けない樣な好い娘を一生懸命で探しませう。」と斯う云ふと、ニコ〳〵元氣な顏してましたつけが、何だか急に沈み込で了て、「あゝそんな我まゝが云へた身分ぢやなかつたつけ、俺ももう五つになる君ちやんて娘のお父さんだからなあ……」つてさも尤らな想に考へ込むんでせう、何だか平常があんな氣樂な人ですからね、其麼風にガッかりして考込む樣な顏なぞ見せられるとしみ〴〵氣の毒になりますよ。其に通さんの妹のお柳さん、これがもう三十歲に近い年ですけど、未だに嫁づかないでいるんですよ。最もズッと前に一度遠方に緣づいたつて話ですがどうしたのだか戻て來て了て、今ぢや何もかもあのお君ちやんの世話は一切お柳さんがやつてませう。私やお君に好いお母さんが出來るまでどこへも嫁づかないんだつて自分ぢや云つてますが、親の身になんやあ氣がもめるだらうと思ふんですよ。通さんとよく兄妹喧嘩もしますがでも全くは仲の好い兄妹ですよ。よく通さんが餘りズボラな事してお袋さんに叱られたりすると「俺も獨身で居るもんだから馬鹿にされていけない、」と云つて好い樣な女はきちやあくれないし寧そお柳お前と一緒になつてとつかゝ世帶持つて氣樂に暮したら好いだらうね。全くだよ」其りあ冗談にや違いないにしても、一寸其麼事が思へるんでせうよ……氣の毒ですよ、通さんも全く今となつてはお樂さんの手前にも餘り尤らぬ女は貰へませんしね、お樂さんの亭主ですか。何でも船乘だつて話ですがネ、始終留守ですから、つい見かけた事もありませんよ。無論大した男ぢやないでせうよ、お樂さんの內職でせう、何だか煙草の店を出して、每日お化粧しちや帳場に坐てますよ。赤手柄の大丸髷に厚化粧なぞして明い瓦斯の下で新聞でもよんでる時には一寸可愛い初女房の樣にも見えますよ。通さんとは每日厭でも顏合せるでせうけどお互に何と思てるんだか、其にお樂さんは今、今月か來月かつてお肚してるんですよ、えゝ生れた兒はお君ちやんとは種違の姉妹ですネ。

全く世間にはいろ〳〵の事實があるもんですね！

○歸　途

福島　春　子

佐吉が姉の家を辭し去つたのは、十時過ぎであつた星が氷れるやうにかゞやいて、空のさえきつた、寒い

夜である、冷たい吾妻おろしが、さつと襟元にしみると、かはいた道の上を、さら〱と白い紙屑が吹かれてゆく。

夢に入りかけた町は靜かに、時折、寂寞を破つて、あんまの笛が、悲しい音を傳えてくる。

小一時間も只わけなく、佐吉は町中をあるいて居たふと氣づいた時、再び姉の家の前を通つて居た、燈火が淡く、障子に映つて居る、けれども家の中からはせき一つもれなかつた。

一合の酒にほろよひの顏は、いつかあるいて居るうちに、冷たい風にさまされて、あごひげのはえかゝつて居るあたりに、敗者といふたやうな、いひしらぬ淋しさがみなぎつて居る。

姉なんかたのむものか、どうしたつて行く……」佐吉は又しても出京の思が胸に浮ぶと、堪えられぬ程の苦しさを感ずる、妻と四人の子供をつれて、ゆかなければならぬはめになつたのだ、こうして居ては食はれなくなる、けれども再び思ふとき、華やかな都會の影も勞働してとの希望も、消え去つて、なにごとにもずべらな妻の樣と、四人の子供の中でも、腰のたゝぬ不具者の、御花といふ子の姿が、わけなく胸をゆきゝする、もつて生れた性質は、同業の、兄の膝下に働らくのが馬鹿々々しくてならなかつた、兄よりは腕があると自信して居る、男一疋、三十五歲の盛りの年を、わずかな日給によつて暮すのは、つまらぬと思ふ心は、つい兄との折合をわるくする、

姉にもと、打ち合けた話が第一に不贊成された。

東京だつて此所だつておなじじやないか、此地で家を持てないものが東京でなにが、くらされるものか…………」取りあはれぬ姉が、只うらめしかつた。

佐吉は默して、暗い道を我家の方へあるいて行く。

晝間の勞働につかれた體は、酒氣のさめた淋しさとに一層つかれてくる。

××寺の裏道をぬけて、細道を行くと眼前は廣い、はづれの家に、茫やりと軒行燈がともつて居る。

「あなた……」のれんが動いて、暗にくつきり白い顏が浮いた、佐吉はそれを別にながめやうともしなかつた、通りかゝつた若い男が、チヨツといま〱しさうに舌うちしてペツ〱つばをはいて行く、ゆき過ぎる時甘たるい白粉の香がつと鼻にしみた、それがなんとなく、ふるいむかしの自分を思ひださせた。

十一歲で父に別れて、十四歲で叔父にも別れた、其

時であつた、叔父には一人の子もなかつた、叔父もよく佐吉を可愛がつた、指物大工であつたので、いつも小船やなんかをこしらへて佐吉をよろこばせて居た。

かみの毛の薄いぬかの廣い、叔父よりも年かさな叔母は、遂に佐吉を養子にもらつた。がまもなく叔母も此世を去つた、佐吉が二人の佛を守るべく定められた時は、既に、家も地も、叔母が生前の飲代にかへられてあつた。

二十歳の時、稻荷の祭りの夜であつた、其頃の佐吉は若く、且つ美しかつたが、若い女をつれて家を飛び出した、一月餘り過ぎて、雨のふる或る夜、とう〳〵茫やりと、もどつてきた、甘い白粉の香みなぎる、其女の心を、滿足させることが出來ない爲だつたのだ。

「金がないからだー」と、それからの佐吉は頗る働きものであつた、紺もゝひきに、肩に置手拭の、いなせな姿に若い女達をさわがせたこともあつた。

一時盛んであつた兄の家も、父の死後は思はしくなかつた、かたむきかけた家はますますくづれて行く、くづれて〳〵、土臺許りとなつた今日、少しはもりかへして、困らぬ迄にくらして居る、



舊友 澤子

佐吉はもう四人の子の親となつた、働いても〳〵なせか家に、溫かな氣を味はふことが出來なかつた。乳飲子が朝に限つてなくので、佐吉は起きて飯を炊くべくよぎなくされて居る。

兄よりは腕がある、「こんな小さな所ぢや仕事は出來ない……」と口ぐせのやうにいふて居たのが眞となるやうになつた。

姉は四人の子の樣を思ふて、女だけに切にとゞめた、兄は一言もいはなかつた、「馬鹿野郎、自分にどれ程腕があると思つて居るんだ」としきりに笑つた。

妻がわるけりや十年の不作さ、朝起きて飯もたけないやうな女では」と姉はいつもいふて居た。

近處の時計が十二時を打つた時、佐吉は軒ひくい我家の前に立つて居た。

「とみ……あけてくれ」がちんとあけやうとしたがあかなかつた、家の中からはかすかにいびきがもれてくる、こたつにあたつたきりに寢そべつて居る、いつもの妻の樣子が眼に見えるやうだ、腰もたゝない子供、まだ東西もわからぬ子供達を、知らぬ他鄕につれて行くなんて、悲さんな話だ、佐吉はわけなく胸苦しかつた三十有餘年、父に別れた時きり知らなかつた淚がわけなくほゝをつたわつてきた、佐吉は裏口にまわつた乳飲子が火のついたやうに、にはかに泣き出した。

* * * * * *

○或晩

福島野分女

「雙六知らないつてお石も餘つ程……」

「さうだつて俺あは、やつたことないんだもの。んでは南京豆買つて來つから。」と喜んでお石は走つて出出たと思つて幾分もたゝないうちに南京豆の袋を抱へて歸つて來た、玄關の戶を荒々しく閉めて上つて來る足音が聞えたとき米子は「お石は早いんだえ」と殆んど獨語か何だかわからないやうに語つた。

「また雪降つて來たあ、とても寒かつた」と長火鉢の側に行つて手をかざして居たが間もなく「早く初めつぺ、米さん」と急いた。

先刻から炬燵にはいつて橫を向いて默つて居た薰が「私もまざつかなあ、お石と同じで知らないんだからあんまり負さないことだ」と炬燵をとび出た米子の前に行つて座つた。

「本當？何んだか。」米子はランプの絲を出した。黃色に疲れ切つた樣な室の中が急にパッと光を增して隅々まで光に濡れたかと思はれる。炬燵の中には米子の母親が寢て居る。そして時々鼾が思ひ出した樣に起る。

「お石硝子の平たくつて圓いのあわどうした。あれ持つて來な。」「これ？はいしよ。」「お石もこゝに來て座んなくて解んない、薫さんはこの硝子んの、お石は銅貨だ、俺らこのパんにしるから。」「よし來た、えゝかえ私から振り出すから、かうか」とは言つたものゝ薫はまさか雙六を知らない程野暮でもなかつた。只何となく知らないと言つた方が面白い樣に思つたから。そして米子になるべく話をさせたかつたのだ、薫が此家に來てから六日になる、しかし何となく米子にしても薫にしても若い心には向ひ合つて話するのが間が惡かつた。

母親の睡つて居るのが何となく氣持がよい。そして今夜のやうなときでなくてはといふ樣な氣がして始終「今度は薫さん。はい薫さん。」と言つた。お石は三人のうちで一番噪いだ、キヤッ〳〵と無邪氣な笑聲は絶えなかつた。

南京豆と金米糖とが互違に賭けられた。米子が三度上るうちにお石は二度上つた、薫は一度上つたきりだつた。米子は薫が上れないのを氣の毒に思つたが薫は滿足して居つた、上る上らないよりも一緒に雙六をするといふことが既に心の充滿であつた。

お石の聲があまり高まると「そんなに喧しくしないでしなんしよ。折角えゝ氣持になつて居るところだからなえ」と言つて炬燵の中の母親は時々安眠を防げられた、しかしまた一分と經たないうちに鼾が起る。

「妾この『理想の姑』はいやだ、大嫌。」「妾とは洒落たもんだ、矢張女學校の生徒は異つたもんさ」「あら、えゝよなあに、妾洒落て居ますとも。」「米さんは立派な言葉使ふんだえ」とお石が言つたときに「米さんはお嫁さまになるんで姑が恐いんだわい」と薫が思ひ切つて冷笑の口振りを出した、そして米子の樣子を窺つた。恥しい顏をして「薫さんは……」と横眼に相手を視て默つたこんな話をしては居つたものゝ始終順々に采を振つて早く上りたいと思つて居るから次第に顏に血が集つて熱くなつた。

母親も起きて來て茶を飮んだ、米子と薫はなるべく眸を合せない樣にした、直接話を交ゆることも避けたしかし胸の中には囁きが堪へなかつた。薫はつひ前のことを忘れたかの樣に母親と快活な對話を續けてゐる

米子はそつと炬燵にはいつて暗い方に向き靜に胸の騷ぎを止めやうとつとめた。醉つた樣な先刻のことは次第に物悲しみを生んだ。何が悲しいとはなく悲しい、

氷の塊が胸を上り下りする樣にうす寒い悲しみはそれからそれへと四肢にまで傳はる。

「米子、米子餅燒いてあげるから出してくれなんしよ。」母親の言ふこともこんなときには憎々しい。「何故他人の物思ひを防害するんだか」と思つた。

「米子、米さん、一寸だから出してくんなんしよ、薫さんとあんたに燒いてあげんだから」米子は再度目の母親の言葉にやつと切餅を出して來たがすぐもとのやうに暗い方を向いて炬燵にはいつた。

頰を布團に押しあてゝ「何故にこんなに僻者なんだか」と呟いた。

外は全く靜な雪の夜である。

翌朝から朝寢坊の米子は薫より廿分位は毎時も早く起きた。そして自分と云ものを考へる樣になつた。

選評

選者

▲女學生（土佐桂花）　文章には割合にしつかりした處がある。だが書いてある事をよむとその幼稚なのには、驚く外はない。

▲髮（智代子）　女の感情の一部が非常によく書けて居るので嬉しいと思つたが。結局、例の單純な反抗心——勝ちたい。人に敗けたくないので終つたので、うんざりした。もつとそんな心持を離れて人間を見てごらんなさい。

▲乳の香（蔦の葉）　一寸しんみりした處がある。しかし、このしんみりは德川時代のしんみりだ。情のしんみりだ。こゝが僕にはあき足らぬ。

▲世間（田枝子）　此の作はたゞ達者と言ふだけ。この人には是非、もつと心の底からの努力がして欲しい。こんな、世間話を達者に書くだけの人にはこれでは、失望しなければならない。もつと、新しい人達の作をよんで考へて貰ひたい。いゝ藝術は自分の考へる上の相談相手だ。大切な相談相手だ。しかしまねをしてはいけませんよ

▲或晩（野分女）　上手に書いてある。キョウと言つた方が適當だらう。心持もこまかく動いて居るが、これは作りものだ。

▲姉（中川つる子）　も少し進んだ心持になつて書いたらよからう。

▲甘酒屋の前（藤井由子）　これだけでは困る。もつと何かを落ち付いて見るのが必要だ。

▲榮さんと女（うめの）　この人の作にも、自分は田枝子といふ人に書いた言葉をくり返し度い。諸君の心が洗はれてほしいものだ。洗はれて生々と新しく感じてほしいものだ。

▲スミレの花咲く丘へ（ひなげし女）　この雜誌では珍らしいものだが、あまり淺薄だ。

▲森（月盈子）　久しぶりでこの作を見た。いゝ技巧を持つて居るが、心が足らぬ。もつと人間を知る爲めに、人間の「生」を知る爲めに努力してほしいものだ。

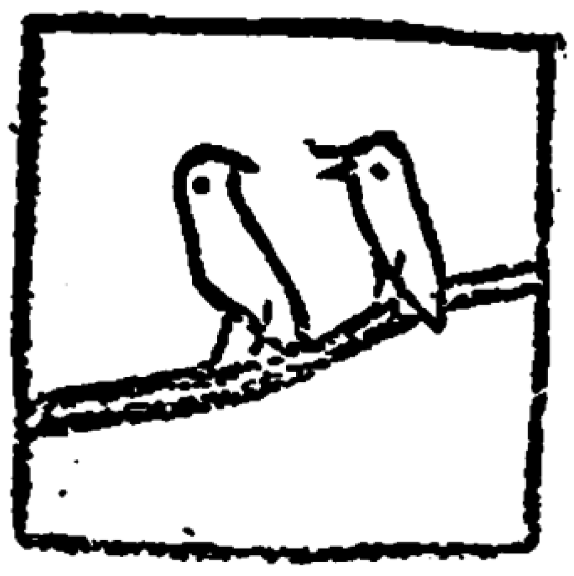
▲人の心（くれたけ）　これもを聞くやうな心持の作だ。この人などは何故もつと考へて人間を見ないのだらう。あんまり幼い心持だ

▲母（みゆき）　この作は大變いゝと思つた。ともかく、このお波とお作婆さんとの間にある心持の距離もよく書けて居るし、「母」の心持もよく見えて居る。不足を言へば不足もあるが、それはまだ作者の自覺が不明瞭だといふ點である。とも角いゝ作だ。

▲歸途（春子）　上手だこの作者も、近來手が上つて來た一人である。

▲おすみ（世緖子）　これも上手な世話ばなしである

▲轉機（小笠原ゆり子）　中々重味のある作であつた。全體にまだ感じた力が弱かつた爲めにそれを傳へる力が弱いのは殘念だが、いゝ作だ。で、今回は全體からして、多數の作が集つた。久しぶりてどの位にも活氣があつた。これは嬉しい事だ。



散文

編輯局選

○哀音のゆくへ（天）

冷花

越して來てまだ間がなかつた。崇高な白雲が湧いてチカチカと青光る星は、教會の屋根の十字架を照し、赤色の建築の窓硝子に、何となくたゆげにうつる。灯の流れは、つやある長椅子に、額伏せて、祈禱する男女の喜悦を思はせ、其上に降り立たす徐なる足音の聞えるやうで私の胸の荒野にまでやはらぎを覺えた事を思ふと、其夜は日曜だつたと思ふ。

文字のない軒燈の曇り硝子にはくすんだ柳のしだれて居る格子先に、風に吹かるゝ落葉のやうに、立ちよつた女の美しい肉聲と、三味線の絲のふるへと、私は針もつ手を膝に落して、朝顔日記の一くさりを聞いた

門の人は撥をとめて、何處ともなき放涙の一夜の旅に去た、人の戸口をさすらひく〳〵、あぢきなくはこぶ一歩一歩をふりむいた時、涙もなからう。

橫町のくらやみにふと起る刹那のなやみと、よろこびと、灰色の戸を閉ぢたひくい家の間を、太田の山の方へ哀音はいつも消えてゆく。

婆やにつれられて寄席の階段をトントンと登たのは美しい絹の肩掛が、白いえりもとをつゝみそめた頃だつたと思ふ、お靜禮三にほろ〳〵と泣かされて、紺青の肩衣と、えりと、髮と、白い花かんざしと、うら若い人の生活を思うて、新しい涙を知つたつけ。

雨上りの道路の粉つぽいやうな、或る晩、月も星もなく角の質屋の軒燈が淋しくついて居た、若い時分くろんぼの洋妾をして居たとか、今居るお爺さんは男妾だなど〻云ひはやされて居る質屋のお婆さんは、とうに氣が狂ふて仕舞た。たよりないかいなに、三味線をいだいて、四十路女が來かゝつた時、二階の障子は半明いて、火のない暗黑からあやしいさけび聲がもてれ居た、女の胸はふるへたであらう、かつて其窓によつて唄ふた時、障子にうつつた圓頂の人影を、さけびの主とは知るよしもなかつたであらう。

門づけは來なくなつた。

うちの軒燈には未だ字が入れられずにある。

柳は冷い冬枯れの姿になつた。

お婆さんは紅療治を初めた、頭をひわ色に光らせていつもねづみつぽい絹めの〻裳をしだらなく引いて。表情の沈默して仕舞つた顏の、目はぼんやりと、何か

を追ふやうに人に交てひるまの町をあるいて居る。

なつかしき哀音のゆくへよ。

横町の暗黑に、あのやるせない撥音がとけこんで居はしまいか。ロマンチックなお婆さんの歷史に、あの絲の音のからまる夜がふたゝび來るであらうか。

なつかしき哀音のゆくへよ。

他の多くの作とは全く色調が異ふ、現代の生活に、ずつと近づいて世間を觀てゐる、立脚地も餘程藝術的である、文章を茶の湯、生花と同一視してゐるお經樣式とは遙に根本を異にしてゐる、それが好くなるか好くならぬかは未來の懸案である（醉茗）

充分に都會の空氣を吸收した人でなければ、この作は出來ない。一度讀んだときにはさまで感興を惹かなかつたが讀みかへして見ると深い〱味が滲出して來るのを感じる、文字、色彩、內容の凡ての調子がキツカリと合つて居るのが、見ても心持がよい（白羊）

○早春の朝（地）

西多摩　山の女

昨日の雨と谷間の雪とが今朝は夢のやうな青い靄となつて、野山を包んでゐる、そこここで頰白や何かの小鳥が鳴く、鶯もぢき鳴く！など思ふと、東の山の上から漲るやうな春らしい光線が、自分の頭の上を通り越して西の山々をまつかに染めた、洗つたやうな沈丁花の葉が羽子の形に紅い蕾を圍んで、一齊に舞ひ上りさうに生氣がある。同じ綠の葉をぬらしながら、山茶花のもう腐つた瓣や、蕊が、蟲のぬけがらのやうに殘つてゐる。去年の秋の色を忍ぶのと對照して、ふと去年の春、この沈丁花のかげに立つて、寫眞を撮つた時の自分と、今の鏡で知る自分とのあまり變らぬことに心づいた。ああ變りたくつても美しくは變らなかつた三度撮れば九枚ちやんと文庫の底に葬られてある寫眞ほどあはれなものはあるまい、それでも去年と少し異つた心持で早春を迎へたことを思つたら、恰度紫がかつてゐる沈丁花が、桃色にでも咲くやうな心地がした。

篠の筧だれを劍いで汲む度に柿の葉の浮んだのも、昔のやうな氣がするきれいな淺井戸の水が、手にも口にも額にも心地よい冷さを味はせた。幾年この水を呑んで生きてゐる事か、又は夏生ぬるい水道の水を使ひながら、懷しくこの井戸を思ひ出す日が、すぐにも來るのか知れないと思つて、雨戸の二枚開け殘してある草屋根の重々しい家をつくづくと眺めた。あの中に自分の着て寢たものが未だ溫いまゝ、叔母さんの寢てゐるそばに殘つてゐるのだに、まるでよその國へ來て宿に困つてゐるやうな賴りない思ひがした。

私は幼い頃から住所が一定しなかつた、十二三の時から來年の今頃はどこにゐるのかといふ疑を起しては世の淋しさを味はつた。私の過去は殆ど話にならぬほど暗い、今も暗い、後も暗いか知れないけれど、明る

かれよと思ふだけが命である、暗い過去ですら思ひ出す時には懐しいものを、私は皆様の幼時の追想を聞くと羨ましくつてたまらない。

微かながらも獨創の力ある人の書いたものは何處か新しい感じがする、筆が流暢に動かないのは缺點だけれど、力の籠つてゐるのは好い長所だ（評者）

私は此人の文が好きだ別に著しい個性の現れがあるわけでもないが何處かに一種、人を惹きつける潜力のあるのは爭はれぬ。上辷りのする衒耀的の輕薄なのよりは、筆は晦澁でも心持のふくよかな方が嬉しい（白羊）

○春のかなしみ（八）

はやぶさ

花絶えず散れり。ひらめきつゝ、かゞやきつゝ。柔き光充てる朝の校庭に風はしづかに枝々の淡き色をさましゆく。あゝその風はてゝにも誘ふるゝなり、かすかにうち顫ふ音樂室の窓のガラス、花に似たる幾人かのリボンのいろはうつれど室内にてもれる空氣のうつとうしさ。

「はにふのやどもわがやど……」

色よきあまたの唇より洩れ出る若き肉聲は太きピアノの帥きに壓されて悶えつゝ低くただよふ。つれなき低音よ。

いたましからず。や、内と外とその不調和の中にしてなほもふるひやまぬガラス戸、みつめつゝ〳〵そこに窓際なる淋しき一人のひとみはうるみきたれり。



土手の春　本郷　服部てる子

おなじよりどころなき胸のかなしみに――。

（花ちる日音樂室にて）

自分の嫌ひな物はヤスデとゲヂ〳〵、口語詩と短文である、なぜかだは理屈はない。但しこの人の文はまるで別物だ、佞すと言はれたつていゝ例によつて三才の一に推すことを憚からぬ。（夜雨）

佳作

○すみだ川

筆子

暮雲に閉ぢられた川の面は、紺碧色して小刻みに波がよせる、暗い上流にはちらほらと燈火が見え出した

私はお酒樓の欄干に凭つたまゝ言葉もなく義姉と並んだ、

二階は公園歸りの客でたて込んで、いづれも疲れた樣な顔で、せわしなく箸を動かして居る、立働く女中の疊さはりや誂へ物を帳場へ通す甲高な聲、塵や埃が立迷つて居やうと思ふ廣間は、電燈花やかに輝りて居る、母はつゝましやかに獨酌の盃をかたむけるのに、少し放れて私等は立つた。

義姉は紫の片袖をそつと欄干に置く、濃いつやゝかな高島田、清げな白薔薇の簪を差した姿が、つよく私の胸を刺戟した、今日は母の好みで私も同じ姿したのが、空の月にも耻しくて、一人片蔭に身をすぼめた。

船の火と堤の燈とが水面に映つて散つて、いかにもそれが眞玉を毀して粉砕した樣だと義姉は云ふ。

吾妻橋際の棧橋に停留した川蒸氣はいやに底淋しい汽笛をならす、竹屋の渡しの方から來たのはシユツ、シユツと月下に水泡を飛ばせて横付けた。

好い景色ねと義姉は囁く、けれど私は隅田の夜色に對しては、もう少し異なつた情調を呼びたかつた。

待乳沈んで梢乘りこむ今戸橋……小唄に舞臺にわが想ひ見るすみだ川は、美しい戀や詩にふさはしい處、江戸趣味といふのか何といふのか、もう少しいつとりと若い女に心みる樣な景を期待して居た今夜の私にはいさゝか物足りなかつた、でも遠い過古の文化文政時代の風に憧憬て現實を自覺しない私がどうかして居るのだ、此頃は妙につまらない空想に耽つて仕方がない。

早く櫻が咲くと可う御座いますね、兄樣にお舟を漕いで頂いてお花見しませう、と義姉が云ふのをいゝかげんに、えゝ面白いでせうねと答へると、あゝ樂しみだわと艶麗に笑ふ。義姉は我家の人となつた新らしい生活に、滿足なる喜びをたゝへて、明るい美しい夢を見ているやさしい女らしい方、私は暗い寂れた夢ばかり見ている女なのだもの、羨ましい義姉にはあたゝかい血がもえて居やう、人を思ひすてた冷たい私は奈何せ……羨望が遂ひ憎惡となつて、心から忘れやうとした古い記憶が再現して別れ去つた人を切に思つた。

母が御飯が來たと呼ぶ、私はいま暫らく此處に居た

い混雑した席へ返つて、大勢の中で食事をするは厭な事だ、加之にかう飾り立てた姿が面はゆくてならないさ、參りませうと義姉はうながす、それでも私はまだまだ――ぢつと水を見詰めて居る――。不圖私の手はぎゆつと握られた、どうなすつたの、よ、香水の匂ひがまともに放つて、私の指先から身内にぬくみを感じた刹那に、輕い痙攣が起つた。
すみだ川は小霧が籠て瓏としつて春のやうな風が吹く……。

美しいおねいさんと姿くらべをして、戀を捨てた寂しき自分と、歡喜に心充てる嫂とを思つて、淡き嫉妬をおこすといふのである、鬼一匹位にはあたらうか、こはいはこはいけれど、文章は一分のすきも無い。（夜雨）
主觀と客觀がはなれぐで、何處かに隙のある文章だと思ふ（醉茗）

○隣家

牛込　平塚白百合

水のやうな汁液のたまつた桐の株の新らしい切り口を見ながらあかるくなつた書齋の窓によつた。水色の絹絲のまつはる感じのする秋風は庭のコスモスにさゝやいて、コバルトに深く澄んだ空には水々しい光輝のある白雲がちらばつてゐた。

さゝやかな垣でしの隣家は古くからフランスの尼樣が住んでゐられた。

コスモスは、澤山秋雨を吸つた苔さびた煉瓦の家をめぐつて、玄關の壁から二階の窓まで蔦が一分のすき間もなく葉をかさねてしげつてゐる。

芝生を一面に這はせた廣い屋敷はコンモリした常盤木が一株／＼グリーンシヤドーをつくつて、春はその間に菫が紫に咲く。

私が尼樣を知つたのは恐らく生れると直ぐだつたかもしれぬ、カードを一ぱい小箱にもらひためて友達の間にほこつたのはふり分け髮の時分だつた。教へられた短詩をクリスマスデーに、輝くやうな壇に立つて恐怖にみちた胸をときめかせて涙ぐみながら暗誦したのも十一位の時だつた、緑色のハリ窓に近い柑子の木から大きい實をもいで私のエプロンのカクシに兩手に一つ／＼とにぎらせて下すつた。

私が其頃不思儀に思つたのは尼樣は何時でも黑衣の外決して着なかつた事である、その疑がとけた時は忘れな草を裾の劍先にさして下すつた、バルコンに並んだ花の一つ／＼にふくまれた私の胸のそこにふれるやうにくどい程妙なアクセントで話された。

いつもブロンドのフサ／＼した髮がくづれさうに襟元に結ばれた石膏細工のやうな白い透き通る顏して、靜かに瞳は對座の人にそゝがれる。表情は冷やかなと

思はせる懐かしがたい崇高な處がひそんでゐた。此谷の花壇に据ゑたれたくさりの先きの十字架が、夕日にてりかへすたそがれ、張りのある白い布の兩側を上げた帽子の下にかくれた瞳は落日をのぞんで美しく輝いた。

別れ日の前夜は悲しいうたをうたつた。私許りではなく尼樣も唇がふるへて、いくたりかあつまつた尼樣達の細いこゑがかなしいメロデアをすべつた。「三年たつたら」かたく〳〵指をくんでおつしやつた尼樣はフランスの野の家で病んで。

ノートルダムにやつと行たとあの猛獸の屋上に飾つてある寺院の畵はがきを一月前に下すつた。そうしておぼつかない片假名でなつかしい日本の少女へと一字一字別々にはなれた倒れさうな字でそへがきがしてあつた。

杳けき海路を日本に再び來られるのももう程なからう。

昨日コックはもう尼樣のおかへりの近いのをうれしさうに話しに來た。

私はむかへる日のよろこびを思つて心の中に、凡ての人の上に、なほやめる尼樣の上に深い神の惠をいのつた。

手のとゞきさうなコスモスの花の上に小さい蜂がひくいうなりで聲を立てゝ目にもとまらない程すばしつこく、つばさを動かしてゐる。

お隣家の芝生の上にはふとつたコックの妻がバケツから洗ひものを出して乾してゐる。

かるいめまひを起させさうな美しい暖かな日だ。微風が窓かけをなぶつて、芭蕉の廣葉が青い葉づれの音をたてた。

『即興詩人』にでもある人々のやうでいかにもよんで心もちはよいけれどうたつた祈つたと、相もかはらず驅け通しに驅けてゐて、ちつとも低徊が無い、自分はいつでも、あなたに惡まれ口ばかりきくやうたが、も少し落ちついてほしいと思ふ。あなたはこれまで餘りに多くの雜誌へでられた、荒まざるはむしろ不思議であつた。如何(夜雨)

佛蘭西の尼、——草花の咲いて居る芝生、——晴れた日——美しい少女、何といふ懷しい字だらう、私は此スケッチを讀んで、何だか自分も、小さい赤い表紙のリーブルや油繪の貼りつけたカイエを持つて幼い子の群に交はつて居る樣な氣がした。如何にも落ちつきのない浮いた調子も見えるがそれを此人にせめるのは都會の若い女に華やかな薄い着物を着るなといふのと同じではあるまいか(白羊)

○春のよろこび

近江　鈴蘭

霞は淡く山や野を罩め、流石に春だなあと思はせる去年こぼれた花の種が、土の下で奈何なつてゐるだらう？屹度小さく象牙の如うな芽を出してゐるであらうと斯う考へると最う堪まらなくなつて私は日南の花畑に愛人に逢ひにでも行く如うな明るい嬉しい氣になつ

て行つて見た。そして一等隅の所の霜避けを取つてみたら、嬉しい！小指よりも小さい細い眞紅な芍藥の芽がッポッポと、筍の如うに――といふと大袈裟だけどもマア然う云つた風に、霜よけをとつて呉れるのを待つてました。蔽はれてゐて乾燥びた風にも吹かれなかつた故か、初春の溫和な光を滿面に受けてゐる紅い芽は、何とも言ひやうない霑ひとつゝましやかな光澤とを持つてゐる。風はサッとも吹かない――嬰兒の唇よりも可愛い初心つこい此芽が幽かに笑つた……と思つた時、私は凡ての苦しみを忘却して笑つて居た今日一日だけで良いから斯うして微笑んでゐたいなア……と思ひつゝ恐る〳〵窃と芽に觸れて見た――柔かさうな芽を傷けまいと思つて、芍藥の芽は思つたよりも硬つた、大きな花を咲かさなければならぬと思つて優しく柔かさうに見せてゐる



新緑　越後　村田けん子

中にも、かうして硬い張り切つた何物にも犯されまいと云ふ氣を持つてゐるのだ、お前は偉らいのネー。
仰げば大地をてらす太陽の光線は、此の大きからぬ花畑の隅に生息してゐる小さい芽と、其れを見守つてゐる若い私とを、さも暖かさうに、抱擁して呉れてゐる。

自分が天然に興味を持つて居る所爲もあるでせうが、斯う云ふ文章に接すると、是も非もなく嬉しい氣持になる、また此文章も幾許かの注意と、感興を以て書かれてあることも疑はない(酔茗)
草の芽が出てるかと思つて霜除をとつて覗いて見る時の情緒の動きを書いたものは、これまでに幾度も見たが、これは同じ心持ながら非常に美しく流暢に書けて居る。力のこもつた作である(白羊)

○火燵にゐて

羽前　深山木

がうがうと御廟屋の杉の鳴るのも遠くなつて、窓に吹きつける粉雪の音もしなくなつた。
赤い絹絲の萎えた尺ばかりなはしがざらざらした壁の面にひきまつはつてゐる。いつどうしてあんなところについたのだらう、取らうとも思はないが、指でつまむとき、惡墨をする心持がしさうだ、冬になるといつも火燵のかゝるこの四疊半のぐるりの剝げ落ちた壁は私の幼時の心にゑがいた畵であつた。右の端に二人の女が歩いてゐる。下の方のおほかた剝げたところはオルレアンの小女が火刑に處される光景の圖とばかり見てゐた。ヂヤンダークは柱に縛られて、群集は下にたかつてゐる——壁ばかりではなかつた。裏板の木目顏の汚染さへもことごとく何かの形に見なした畵であつたのだ。私はいまゝでこれらを忘れてゐたやうな氣がする。
　この古いおもひでに沈むでゐる間も、あの佗しい微音は絶えず双の耳におしよせてゐる。他の人には聞えないだらうか、遠い冥府の鐘の音が幽かに幽かに、ひびいてくるやうな、耳鳴りでもないようだし、私はこの空間の暗く靜かなときの、何かではあるまいかと思はれる。眠られぬ夜などじつと、この微音に耳を澄してゐると、何とはなしに二人の葬られる暗い地の下が思はれて、涙ぐまるゝことさへある。六つか七つの頃であつた。雪のふる日、爐には火を焚くこともなく病ひ勝な母と、炬燵に晝の留守居をしてゐる時、煤けた高い屋根裏の天井から落ちてくるやうなこの微音がたまらなく淋しくて、うたゝねの母を起したのなど忘られない。あゝこの佗しい微音はいまも聞える。

無理に神秘めかしたのがいやである、雪にはいろんな「ものがたり」の伴ふことは東西揆を一にするけれど、あの佗しい微音つて、何の音やらひとり合點にわびしがられては少々迷惑する(にくまれ記者)
自分はこの人を愛する側であるが、成程此文章は餘り好くない、わざとらしい、絹糸のところだけは詩のやうな感想であつたが、他は誇張に失しておる、而かも表白がそれに伴はないから失敗した、君の才はあくまで包んで置く故に價値がある、三省あれ(他の一記者)
成程此作は狹いかも知れぬが、平生の君は異彩があつた、一大飛躍を待つ。(酔茗)

○Y様に

はる子

Y樣！

大變、御不沙汰いたしました、年が變つて二月、裏日本の野にはあるまじき暖かさに菜の花がめぐんでゐますが渡鳥は悲しいわびしい春になきつれて二階の窓下のもちの實を喰べに來ます深山にはまだ雪が深いのでせう？月波の紫も、雲がくれてつなかしい、色はみえませんでせう。

母君、病みますと？幸うすき御身——　さま、みか月の灰暗くも柔かななつかしい光それにもたぐへつべき母君の愛の中から脱せられて如何に悲しい生を終られるでせう？

美しい、義妹の君の手に帶をしめられる時、先生の思ひは何處にとびませう七本櫻、七人の少女の行方？私はそれを思ひます、鳥海山の雪は二度三度とけたでせうに、るり子の君のあでなるまなざしは永久に月波の下にみる事をえないとは！女とは僞をいふもの、女に誠があつたら七世を恨む吾涙のやり場がない——かきむしらるゝ程、殘念に思ひながらも攻擊の矢一矢射むける事の出來ない事實を私も一つならず耳にしてゐます、しかし先生のやうにあゝ一口に貶してしまはれるのは餘りに思ひやりがないといふのではないでせうか中には自己の意志で僞りの言葉をはき異なる愛を求めてまはる人もありませう——それをと深くきいたなら、無理もないとうなづかれるふしがありませうに。よわき性を受けて生れ出た女——支那道德を元として敎へられ育てられて更によわかるべきにされた女には家をすて、父祖の名をすて母の涙をふり切つて自己の思ふまゝに走るといふ事は出來ません、若き血しほの湧くまゝに、熱ある戀の言葉を言ひ、燃えるやうな、愛をもとめて、吾なき時にも夜半、一人さめて、思なげなる父母の寢顏をみた時、吾罪を思ひ悔の涙を流さぬものがありませうか？如何に、自覺した人でも幾百年の遺傳的道德心をすてゝ眞の自己生活に入るといふ事は、よほど難い事だらうと存じます五人女にあるやさしい少女等の戀——それはとうてい今の婦人に望む事は不可能でせう、お七にせよお夏にせよ深く醉へるはさめたるに等し——と誰かゞ言つた、左樣ぢやないでせうか。

醉ふ事もさめる事も出來ない今の婦人は過度時代にあるとでもいふでせうか、兎に角、時代を思はず周圍を思はずいたづらに、つみを一人にきせるのは酷にすぎやしませんでせうか、私は女なるが故に、女の味方をします——

「女なるが故に味方します」恐れ入ります。それは仰しやる通り背く女にも道理は有らう、媚を七人の男に呈する女にも、立派な道義心が有るように——、彼等には皆口實があつた。弱しと言ふか、それなら初から馬は馬づれ、お鍋は權助と夫婦になるきでゝ、賢い人は賢い人と一しよになつて、年々歲々良妻賢母の

罪を産むがいゝ。『五人女』にあるようなやさしい女は今の世に疎いと言ふ以上何を女に加へよう、貞操を唯一の寶とした時代は葬り去られたのだ、私は誰の爲に哭していゝかわからぬ。

むかしは志留志名岐斎飛賭毋須琉珂由布佐連婆他人之手摩木豆損奈牟子由惠衍と悲しみたれど、今は「おのれまづ人の妻にと賣られながらなほ河竹の女が說くや」とあざけるまでにかはりはてし心を守つてなほ人の世に生くるのである、君は新婚の衣を葬りのきぬにたくへて泣いた一人ではないか、今さらに昨非をやさとりたる。『父の名を思ひ、母の涙を顧る』は誓約以前のことである、誓約は絕對なり、日月いまだ地に墜ちざるを知らば女よ恥辱を知れ(Y)

◯涙を流して

紳保千代野

「悲しいかな、すべてを彼の女は知つて居ます、裏切りした敵はかへつて味方に居る、貴女は其者を恨んで下さい」

あゝ此最後の玉章を抱いて、思はずつゝぷした、あゝゆるして下さい〳〵、悄いとも思召すでしやう、恨んでも被居るでしやう、廣瀨川の流にそうて足場の惡い坂道を、車にゆられてとある家を訪問したのは、木の葉のしきりに散る夕ぐれ病院のかへりだつた。

香代様？私貴女を恨みますわ貴女までが……なぜ彼んな事お仰つた、私を深みへ落し入れたのは香代様の一言——あゝ彼の女のどこがにくゝて罪に落そうとしたのだらう——！私の心は狂つて居たのだ、狂つて居たのだもう今はゆるしてくれる人がなくともかまはぬ私は自分の罪をざんげします。

其翌々日、病院に行くといつて家を出た私の車は、方角ちがひに走つて〇〇〇と筆太の看板を見て車を止めさした、ガタンとドアを開けば、むつとするストーブの暖み、居並ぶ人の顏さゝやかな應接間から送り出されてほつとした時、はすでに私は死人の樣だつたあゝ何のために若干の金を拂つたのかわからぬ、ゆるして下さい、私は僞ることを知らなかつたのが惡るかつた。

「くわしい事は〇〇の御手紙によつて知りました、私は今貴女に申上る言の葉を知りませぬ、あゝたれを恨みませう、只信仰うすき者は哀れで御座います」

此手紙を受取つた時、頭腦はふら〳〵として外へと出た、門ぎはの桐の葉がばさりと落ちて、往來の方へにげる樣に走つて行く、それを追うて、やがて私は足の向くまゝにあてどもなく步いた。氷つた道に月はすごい光を投げて居た。突然かつと目を射る電燈の光に氣がついて、四方を見まはし、あゝこゝは教會だと思つたまゝ、心はいつかにも暗のうちにとけ入つて終つた。わからない私にはすべてがわからないのです、自分は彼の時いはれた責任を思ひ違へたのが惡るかつた友誼のない女と云はれたことも忘れはしないけれど、すべてを自覺した時はもうおそかつたのだ。彼の女のまとふた憂の衣を拂ふと力をつくしたけれど、つひに私の力には及ばなかつたのだもの……今は周圍に迫る

恨みの刄、怒りのそ矢に狂つた〳〵心の底を貫かれて死すべき運命をながらへて居るのだ、自分はなに故自から求めて、こんなに苦しんで居るのだらう、决して人を呪ふとも思はなかつた、泣かさうとは思はなかつた、けれど終に私の精神は通らず人を泣かせ、又自分も泣くべくさだまつた。あゝ罪深き子はどうして今迄此きよい敎會の前に立つて居る事が出來たらう。頰は冷え果て、手は感覺を失なつて居る。風もなく只靜寂として何の音もない、天地に遠く〳〵流れの音が胸の底をそゝる樣にきこえる、私は廣瀨川の流に泪を流して罪人となつたのだ、あゝ私には生涯忘れ得ぬ流の音だ。

局外者には何を書いてゐるのか分らぬ、部分的に文字の力あることは認めるけれど――(記者)

○しみ渡り

雅樂

珍らしい凍み雪で、とび歩るいてもちつともぬからないので、ぐる〳〵屋敷まはりをして居るうち、ふと、大川端へ柳とりにゆかうと思ひついて、其まゝ鋏も持たずに出かけた。

村をはなれて、大川端まで、ひろ〴〵と白い平らかな我がゆくてを眺めながら、コソ〳〵と面白い樣な音をたてゝ歩るいた。夏になると村の子供が毎日、眞黑くなつて水あびる名も無い小川は雪に埋もれて少しくぼんで居るばかり、耳をすませたけれど、底を水が流れて居やうとはおもはれなかつた。

しばらく行つてふとふり返つてみると、村は松や杉の木ばかりかと思はれる程こんもりと藍色になつて、ところどころにこげ色の樣な家がちら〳〵みえてた、私の家はと考へたけれど、どの邊か見當さへもつかなかつた。大川の水はすんで居た。ゴーゴーと音たてゝ流れと流れとが打つかり合つてはつき進んでゆくさまは、昔も今も變らないけれど――青い水と、兩岸の只白い雪と、遠くの村と、獨りの私はさびしく恐い樣な氣がした。夏の日の雨ふり前、それからどんより曇つて、東山が殊更近くみえる秋の午後など、川底を洗ふ樣なあざやかな櫂の音を日毎にきかれるに、今は流れにまかせて下りゆく小船さへない。堤の上に立つて、瀨の早いまなかを目まひのする程みつめながら、こゝより一里を下らずして此の川の信濃川に合つする樣を思ふた。

更に流れ流れて水淺き新潟の海に注ぐ樣を思ふてみた――蒼い海の中へ注いでからも、はつきりと幅ひろく薄黑いよどみをつくつて流れて、沖に至るに從つてぼかした樣に海水との境がわからなくなつてる樣が目に浮ぶ……

遂に水の流れぬ日は無いに、一度も此川の底をみた

事のない事を思ふと私はいつも、或る大きな力づよい想ひと、それから何となく悲しい想ひとが交々胸にみつ。柳は冬枯れの桑の枝の樣にさびしく、あちこちに立つて居た、少さい時よく友だちと、こうして涼み渡りしながらこゝへ來た頃は、兩岸に自然の柵の樣に茂つて居たのが、いつのまにかこんなにすくなくなつて終つた。

其すくない一枝一枝を探ねまはつたけれど、どれもどれも未だうす赤い皮を被つて居て、好きな樣な厭な樣なあの銀色の實のあらはれた枝は一本もなかつた。歸り來る私の背中がふくらむ樣に感じる、自分の細長いかげが前にうごいてゆく、兩手をひろげると短かい袖が振り袖の樣に長くうつつて少しうごかすと、大きくひら〳〵するので何となくうれしくて、袂を肩にかけてみたり兩袖を胸にたゝんでみたり、たわいない事に興づいて──少女であつた昔を夢みる樣な氣もちであるいた。

此君も今一步進むと、確に妙手の域に入るのだが、まだ心もちに湿ひが乏しい、なか〳〵考は持つてゐるらしいが、狹く、窮屈なのが缺點であらう（醉茗）
しまひの方がいゝと思つた、初めの方はダラ〳〵として居て、物象も平凡なら思索も平凡だ（白羊）

○冬の朝

伊豫　高橋政子

紅をぼかした樣な層雲が幾線となく東に集つて日の出前の空は實に美しい、ほうと熱い汚い氣を吐いて冷い空氣を吸ひ込んだ、井戸の表面からは、もうーと溫かさうな水蒸氣が昇つてゐる、釣瓶の棕梠繩を持つと手が切れる樣に冷い、釣瓶には厚い氷が張りつめてゐる、水を汲むとポカンと丸い形のまゝ、浮上る子供の時はよくこれを甘さうに食べたものだ、今は接がつて見る氣もしない、透明な氷の表面の白い泡を見つめてる、主家の方でギィ〳〵と繼母樣の水を汲んでいらつしやる樣な音が靜な四邊にしみつく樣に聞へてる、夜繼母樣と二人で火鉢を圍んでると、車の璽力でギィギィと自然に水汲む音が寂しい室內に響く事がある、私は其音がたまらぬ程なつかしい、夏の曉方夜具の中に居るとお山行き（石槌登山者）の行者が吹く法螺の音が、古人の音樂を聞く樣に餘音を殘して遠く消えて行く、それも私のなつかしい音の一である、冬の朝響く水汲の音は、只冷い感じをさするばかりだ、少しは溫味のあつた釣瓶の水も外氣の爲に冷たくなつてゐるパサリと地面にうつすとばしりが桑畑の白い霜に散つた、春も未だ來てゐないのだなと思ひながら、堀の邊の白梅を見ると蕾が固く閉ぢてる。

水汲んで顏を洗ふて、手拭でごし〳〵すると、ほてほてして溫くなる、朽葉や藻のしみついた上を步むとカン〳〵と胸を刺す樣に何だか悲しい、雨だれの水の氷つた上に齒磨粉が美しく散つてゐた。

臺所へ上ると、薪がパツ〳〵と燃えて、湯がたぎつてる、俎の上に香の物が淡泊な食慾をそゝる樣な香をはなつ、座敷の雨戸を開けると北隅の柊に眠つていたらしい雀が、パツと飛んだ、松や、樫の常綠樹と、櫻や、楓の落葉樹の間から南天が獨り熱をもつた樣な濃厚な色をして何物かを暗示してる樣にのぞいてる、躑躅の本に木賊が二本生ひ出てる。

此庭の紅梅も微笑む迄には未だ一週間ばかりはついゐるであろう。南向きの戶を開ける、霽れ渡つた大友山の頂を見たばかり葉もない灰色の木蓮も山茶花も見ないで、淸い透明な大氣の中に吸ひ込まれる樣に立つた、廊下の板の冷氣が素足に鋭く應へる、身も心もつめたくなつて思ひきり大きく呼吸をした空氣の中に美しいあるものが流れてる、畫けもせぬ云へもせぬ見えもせぬものだ。



寒行　　後藤あさ子

冷い中に發見したある美しいものだ、其美は神秘な超自然的なものである、私は冬の朝の光りだと寂しい心の中にくりかへした。

周圍は平凡だけれど出來るだけ細かい心を以て觀やうとしたる力を買はん(醉茗)

讀んで了つて少々物足りない樣な氣もするが、所々に才氣のほのめいて見えるが嬉しい。大抵の人が書けば、單純な外皮的の寫生に止つてしまふ所をこれだけにしたのは確に他日の妙手たるべき徴證であると思ふ(白羊)

○北國へ

土佐はざくら

なつかしいと云ふて、戀しいといふて、それでは尙あきたらない感が致します。何と云つていゝか相當の詞は知りません。おそらくは言葉にも筆にもあらはあせないのでせう。お寂びしいでせう、必つと〳〵さう思ふては泣きますの。私はあなたを唯一のわが生命として生きてゐるのです。苦しみに堪えられず泣いては、死の影を追うてほゝゑんだのも幾度あつたか知れませんが、あなたのお心を思へば、尙ながらうべき義務のあるわが生命なることをさとりました。

まぼろしに浮ぶ君が姿儚かつた。私の胸にうつる俤は夢の樣でした。夜ねても、ひる起きても、胸の懊惱に堪へられで泣きました。

あゝなつかしき北の海！雪の國!!

四十餘日夢は儚い影をのこしました。胸の痛みはたへられません、生れて半生、これ程の苦痛を味はつたのは、覺えたのは、げに〳〵はじめてゞす。

尙私は見はてぬ夢にあこがれてか、俤に泣く寂しい姿は深い印象となりました。

……母に談じてあとはひとり、ひそかに伏して泣きました。御免下さいと泣いては寂しい影を追ひ、わが寂寥のひゞきをかぞへました。

幾日も涙で洗はれた私の胸は、今はもう强ひがたい心をもつたのです。二つに一つ、私は私の心に恥ぢず聖く通さうと考へた。眞面目に考へ樣とする丈尙私は深く苦しみます。世間並には考へられません。

折角美しう汚れなく生きた、わが聖き生命を何として葬られませうぞ、眞情の尊さと、强ひプライドとが私の心になかつたなら、斯うまで苦しまずに歎げかずに、一時の悲しみとして生きられやうものを、けれど聖きに育つた私の魂はゆるされませぬ。

かくしても掩ひても、苦痛と恥は包まれない。私は眞面目な考を持つて生き樣と思つて居ります。例へ人は何と云ひませうとも。

人にあこがれてゐる心を、ぶつつけに書いたもので、芳醇なる酒を盛つた盃でもさゝれたやうです、此盃は深いか淺いか分らぬ　けれど（醉茗）

うつくしく、華やかな、そして人の感情を唆るやうな文字が活動寫眞のやうに目まぐるしく出て來るのが面白い（白羊）

○春六題

佐分華影

障子に映つた木の枝が搖れる、鶯！、今年の初耳、開けやうか、否、去年も一昨年も其前も來た鶯ではないか、蝶の眠りも醒まさないやうに靜かに開ける、あ

あ鳴いて居る、飛ぶ毎に梅の花が散る。
鶯は突然向ふの松の木へ去つた、はつと思ふと、私はいつか庭下駄をはいて散る花を受けて居た。

梅の木の下に筵をひいて七ッ位の可愛らしい子が二人居る、赤いをの草履は四ッ並んで暖かい光は乳色の顔をぽッと赤くして、彩色してある繪本を見て居る。美くしい目、可愛いゝ影、横に結んであつた赤いリボンが解けたので、一人の子が結んでやるのだが、中々に結べない。

二人は立ち上がつて梅の花をとろうとした、あゝ天使よ、靜かな春の日は友禪の着物を照して居る。

昨夜の雨が晴れて色濃き葉に眞珠を宿して凮ある毎にハラ〳〵と落ちるのが日にてつて、ダイヤが散る樣に惜しまれる、一たん封じた手紙を又開けて「今朝なつかしい櫻のかたいつぼみを見つけました、嬉しくてもー二十日ですね、胸の血潮が躍ります……」と書き添へた、春――春――雲さへ空さへ月の色さへかわつたぢやないか、白壁にぢつと凭れた。

うす暗い天井を靜止見詰めて居ると泪が目一杯になつて蒲團の上にボタリと落る、シヤン〳〵チンコロリンと夜の寂寞を破つて絲調べを街燈の下でやつて居る樣子、胡弓、手琴、私は胸を抱いて俯した、泪にぬれた毛布が又ぬれて頬に冷い、三四人の胡弓手琴持つ人、彈きながら途を行く男と女。

若き春の光はふわりとひろげてある紅絹にさして、壁も母樣も皆赤い。 私は紅に映じて火鉢によつた、手元にあつた鋏みをとつて爪をきる、一本、二本、ハッと思ふ間に火の中へ切られた爪の片はヂヂ……と燃えた「まーお前狂人になると云ふよ」と母樣は仰有る、え狂人結構です、私は狂人になつたら……もー他の爪は切らずに布を取る。

俯いて歩いた、仰いでも見た、横も見た、懷かしさに後も振りかへつた、けど私は矢張り私であつた、野原又山にも海にもならず、けわしい野原であつた「貴女てちらへ被來い美くしい花園へ」え花園いまわしいトゲのかくれてる花園でせう、私は行きません、私一人でいゝのです、そして けわしい野原を通りぬけます日は暮れる。
又明日も、明後日も。

孰れと拔いては言へないが、六篇ともそれ〴〵、短いうちにも味がある(記者)

よしの山やがて出でじと思ふ身を
花散りなばと人や待つらむ　　西行法師

明暗（三）

三ヶ島葭子

○

てのひらは詮なし何の酒注ぐや盃となる口ならなくに

わが道の雪拂ふとは知らずして心を汚ず人と憎みし

岩根をもつらぬくごとき音ずれどあけくれ弱く曲りゆく水

こころよくわきいづるかなわが涙君がみ口や吸ひいだしけん

み心のまろき暈被て嘆けるも半月に似てわが足らぬゆゑ

あめつちはましろに凍れ雪も降れわれは何をか抱かん火のごと

満ちやすき悲しみの壺君來てはかたむけたまふ心地よさかな

きりぎしの土死の如くくづれては埋めぬわれに似たるしら花

○

横瀬ひさ

ふるさとは苗代胡頽子の實のあかみなつかしうれし雲のかがやく

二匹してふすまのかげに啼くねずよわが眠きすてしおびなひきそね

月寒の牧場に跳る王のうまひかせんものを君あし起たば

奧庫のくわんおんびらきの扉の面にネイサンバカのらくがきを見る

北毛野の南は總のくにかけて名のうたはれし母が二十歳よ

詩

河井酔茗選

○海の面（天）

和泉　金田代志子

晝の海の面の靜けさよ。
丁度茛毛色の芝生に柔かき風のそよげる樣に、
五月の空に浮んだ小猫の胸毛の如き小雲の動きの樣に、
月光の中でかすかに匂ふて居る月見草の樣に、
今の自分の胸中の樣に、
風無き晝の海の面の靜けさよ。
今日の此の靜かなる海の面も、
淋しげに雨の泣き落る朝は、
風嘆く日は、
太陽の憂げに沈み行く夕は、
波は高搖つて磯に泣き叫び、
重き勞れに悲しげの潮の香は漂ひ、
痛ましくひそかにもすゝり泣く。

あゝ今日の安らけき想に、
なぎ渡りたる海の面、
日ごと夜ごとの波のみち干、
其れにも似たる若き日の、
想にあふれ——又沈む、我が胸中よ

充實してゐる作だ、幾多の峠を越えてなければ、此れ丈けらくに充實した作は出來ない（酔）

記憶

記憶よ——。
我が黒髪の底に、深く沈んで居る記憶よ、
憂はしい夕、
病み衰えた自分の心を、
なほも痛める悲しい記憶よ……。

クリームの溶けたやうな空に、
幽かな丼オロンの音色の漂ふとき、
灰色の雨が、
色褪せた落葉にすゝり泣く時、
蒼ざめた夕月の影が、
淡い夢を見る芙蓉の花に匂ふとき、
昨日のひそかな悲しみと、
今は忘れむとする君の面影と、
過ぎし日の痛ましさと……。

さら〳〵と髪が亂れ、
鉛を付けたやうに頭の重いときに、
ひそやかに浮かび出で、
勞れた心を、ひた〳〵に苦しめる、
——悲しい記憶——よ。

あゝ、汝が、
此の髪の陰にひそむで居て、
丁度、雅兒が愛する人形を抱き締めるやうに、

日と夜とに集る雜念を、
たくはへて居るから、
我の愛する『忘却』も去つて了ふ。

もし汝が私からはなれてあらば、
今日迄のすべての痛ましい雜念も、
こと〴〵く『忘却』の爲に捨てられて
明日の新らしい喜びにも、悲しみにも、
流れの岸の空色の花に、
波がこと〴〵く口接して、
こと〴〵く忘れ去つて行くやうに、
只「一時」をあさり行くものを――。

フランネルの手ざはりにも、
夕日の消えて行く白い花の匂にも、
しのびやかに黑髮の影より浮かび出て、
衰へた自分の心を
強く惱ましめる、悲しい記憶よ――。

作詩の態度は愈よ好い、只今後は何處までも人より上に出れば成功する、個性が際立つて認められるやうになればそれで好いのだ（評）

○土のかをり（地）

花子

かへりみる、
歡樂の手に囚はれし往時の、
土の香も今は虚し、
光は闇に吸はれ、
暖きものは冷めたり。

わが執着の袂さへ、
破れし魂のくるしみを掩ひ得ず、
せめて輝きと、歡喜と、
都大路に求めんと、
ゆけども〳〵
ひとり凋落の涙ぞ湧きぬ、
敗殘の心のもつれ、
いづこにか、香はしき、
土を踏まむ。

わが肉體のゆたかなるを、
わが衣は柔かに包めり、
されど――人は、
かへりみもせぬ、觸れもせぬ、
猶はしたなく逐はんとする、
わが心の荒涼。

帶に手はさみ、うつむきて、
涙にしめる土の上を、
嘲笑の巷を行くに、
包めど顫ふわが魂よ、
わが嘆かひに踏む足の、
小指にふれて、ころ〳〵と、
逐はれしごとくころびゆく、
あな、あはれ、
落ちなんとして、溝の小草に、
とゞまる小石。

若き少女が夢の香よ、
土の香よ、
抱くともなきわが乳の、
白きは永久に隱されてあり。

此作多少の手加減を加へたれば評せず（評）

○朝明（八）

東京　白鳥正江

咲いた花の夢心地、
靜かな風が流れて待ち
佗びたやうな疲れを覺
え、
白い花の顫へ心。

たゞ一葉、
庭先に捨てられし大根
の葉の霜も今は溶け、
若い女の頬を思ふ葩の
悲しみ。

何處よりか鷄は鳴き、
冬枯れの谷水に響く馬
の嘶き。

あゝ、靜かなる朝明けの空に
灰色の沈默が宿り、
甘い無言の悲しみが顫ふ。



少女の外套　仙臺　吉岡とく

渚の夕

しめやかにたそがるゝわが靈の
窓にためらいつゝ
太陽は微睡み、
ゆるやかな疲れの
小草はをのゝく。

見よ、海邊には漁
夫の淡い回想の―
紅い火影のうるは
しさ、
その火影をすべり
ゆく帆ばしらに長
い條を引いて流る
る光り。

空はただしめやかに暗くなり、
われはただ獨り砂丘に佇みて別
れし君を思ふ、

何處にかキリギリスの、
月光の赤き顫ふ音の寂しさ。
白い花の頽れしごとき渚に
ただ孤り、
さめざめと泣けるひとゝき、
あたりに撒き散らす悲哀のかけら。
あゝ、沈みゆく赤い潮よ、
夢のごとかすかに弱い夜が彷徨つて
悲しい生の力はたよ〱と流れてゆく……。

最近の詩を讀んで、其詩風を玩味してゐる人だといふことは分る。一句一句詮索してゆくと、獨創の力もある、只全體に於て未だ著しい個性が表はれてゐない（評）

○眠り行くグラウンド

港の女

あゝ夕はかなし、
はてしもなき大空と黒き板塀の影の
小さき、
グラウンドと、
冷たき夜の二つの心の
白き追憶に打ちしめる一時、
しどけなきその姿のいとどかなし
――あゝ、
たちまどひし無智なる闇は今、
すやすやと凍れるグラウンドに眠り
柔かなるまどかの夢に――息はかすか、
すゝりなきし冷たき夜の光は、
氷の大空のかげに凍りはてゝ……
あゝ夕はかなし――
見よ――あはれ、
鋼鐵のごとき塀によりそふユーカリ
樹の細長き姿よ、
生なきものゝ影の如く努力なきかなしみ、
あゝ大空よ――グラウンドよ――
凡ての苦惱と歡樂とを忘れしか今は
塀の外をめぐる小川の栗色の歌に、
スヤ〱と眠り行くグラウンドか。

毎も内容のある詩を作らうとする努力に於て人に超えてはゐるが、天分が豐かでないだけ苦しさうにも見えるが、作者はそれほど苦んではゐない、苦んだやうに見せないで、苦んで貰ひたい、それがまだ少い（評）

○二月の雨

金澤むらさき

淋しい音をたてゝ
大路に氷雨する。
長い冬でもりの
滅びを喜ぶ樣に、
同情する樣に、
しとやかに降る。
曉方の夢の匂ふ瞳の色の、
空の濁りから二月の
氷雨まじりの雨が降る――。
悲しい、
されど若きものを誘ふ雨よ。
野には若草の芽が
胸ををどらしてゐる、
白い素手が闇の中から招いてゐる樣

に……。
佗しく、又なべてをそゝる如く
二月の雨はうたふ。

二月の雨といふ印象はあるが、全體の調子が弛んでゐる(評)

○強者の歌

向島　鈴木春子

風よ！渦巻け！冷き暗き大波よ！
巻立てや、唯、天地の間、夢幻の相
して散らばへる森羅萬象を、魚族と
化して、
散れ！　ちれ！　緑よ！　黄よ！
赤よ！恨みなそ、木の葉の靈よ、吾
れはたゞ汝が終の日のなげかひの聲
の顫え、……あゝそのふるえ…　汝
は知らじな……
芽ぐむ日のよろこびの瞳の底によど
みしあるものゝ影、あゝ……、其の
影を……、吾はたゞあはれむ――。
悔よ、悔よ、徒らなる悶え、苦痛
かゝる深き、運命の墓の幾多。
汝等が爲めに掘られつゝありしを思
へ！　巻き返る暗波の底に孤立して
青おほふ、大空の色の鈍きに、幽流
るゝ白光の閃めき、其の絲の如き光
線の射出點に！　大いなる輝強き
その一點に。
たゞひた吸ひに、吸はれんとする、
吾が努力を！汝は知らじな……。
默、默、默、
永劫の緑に默す、吾れ、ときわ木の
表情を土にかへせば、
大いなる哀しみ、悶え、はた慈愛の
強き波うつ、血の歌でゑを、
汝は知らじな……、
風よ！渦巻け！冷き暗き大波よ！
巻立てや、たゞ、天地の間、夢幻の相
してさらばへるもの皆の力試せや！

空中に拳を振り廻してゐるやうで、目標なしにいきり立つてゐる、詩は必ず沈着を要しない、躍つてゐるやうなのも結構だが、陶酔は許されぬ(評)

○虚空の光

笹舟

物理室の戸は立てられた、
暗い――皆の顔は夢の様に暗い中に
動いてゐる、
時々きら〱と異樣に輝く眼、
深い空洞の樣な中にパッと光が這入
つた白い〱光だ、
緊張した樣な光線は向ふの薄紫の壁
に泌み入る樣――
何か求めんとして求め得られなかつ
た樣な、
不安の眼は一齊に壁を見た、
何もない唯虚空の白い光だ、
忽ち色彩の著しい眼を射る樣な原色
がうつつた、薄暗い管の中に、
闇の氣は只むーつと溫く漂ふて白い
光を壓迫せんとしてゐる、
ふと光はさへぎられた、後を見た
ほつれかゝつた黒い髪に七色が眼を

刺す樣に光つてゐる。
又パッと白く輝いた、誰かの頭は闇
に吸ひ込まれてしまつた。
獰猛な闇の中に只一つ白い光は反抗
してゐるのだ。

象徵めいた作だが、少しかたくなりすぎた、官能的に批評すれば、手ざはりが柔くない（評）

○火の肌

岐阜　葛の葉

火が燃ゆる、焔の舌はするとけれど
も
火の肌の美しきこと、なめらかなる
こと、
鳥のくぢやくが羽の色、なめらかに、
絹絲のねりしを太陽に光らすごと、
美しき女の髮いひたてのかゞやき、
嬌羞に滿つ處女が赤き唇のごと、
水油のなめらなる面のごとく、
鏡の面のなめらかに、
春風の人の面にふるゝごと、
舞ふ鳶の羽ばたゝかで空より下る時
の、
母が子をうれしいとしと見守る眼の
樣に、
火の肌は美しきもの麗はしきもの、
櫻の花の肌の如く、
かすかに柔らかい火の肌、
みつめては胸にもいだく心地はすれ
ど、
熱の強きが只悲しけれ。
火の肌はなめらなるもの美しきもの

火の肌といふ考は確に奇拔な思ひつきであつた（評）

○ペットより

岩代　伊麻子

丘にたつた西洋室、
月なき夜ながら澄んだ空にはなげか
はしく星がまばたいてゐる。
硝子窓を透して、かすかな光がベッ
トに横はる私の顔にキラ〳〵輝く。
光の波は音も響もたてず、
眸にあたつては流れかへる。
黄昏の荒に似て、薄暗のたゞせはし
くも縺れ交ふる夜よ。

○夜のかなしみ

大阪　杉山花枝

雪は地平を蔽ひ額あつめた街の屋根
に圓くなつて臥して居る。
暗と光のか弱い足で背を踏まれても
それは知るまいよ。
ね、お前の寢息はかすかだから。
泣きたる後の瞳の樣に、冷めたい冬
の夜、愁ふる如く――。
沈み行く五日の月、あゝ沈みはてぬ、
蒼白き瓦斯の灯のみ、吐息つきて、
路上は更け行く。
何事もなく、靜かに都會は、
明日の日を安らかに、夢みんと。
瓦斯の灯も音なく、一つ〳〵消ゆる

消え殘りたる、大橋上の灯一つ、せわしき晝の、活動を思ひ出して、
又悚ふ――。
都會は靜かに眠りゆく。

○迫りくる夜の帳

藤子

いたく\/しい
消え入りさう
な夕べの日を
呪ひ書たやう
に眞黒い雲の
中に包まれし
空は今にも泣
き出しさうだ
まだ消え殘る
紅の長い袂を
かうして胸に重ねて
じつと夕暮の空を眺めた
どこからかかすかなく\/水の音がきこえる
みゝあれは――
萬象を夜と云ふ恐しい暗黒な世に
誘ひ入る貂窓の聲ではあるまいか萬
象は皆じつと其音にひき入られる樣
に默つて身動きもしないで居る――
私の視線は茫々たる野をこえそして
谷川を渡つて山の中腹まで上つた、
おぼつかない――
若い女が一人黒い木立の間を縫つた
白絲のやうに細い路を曲り曲つて上
つて行くではないか、
彼の女のかげ
は森の中にな
くなつた、
暫らくして彼
女のかげはあ
らはれた、
あの峰の黒い
雲を破つて一
ッ洩れる燈火
をめあてに、
彼はあゝして
急ぐのだ、
けれどもおぼ
つかない!不安だ!!!
丁度云ひ合したやうに、
彼の女の足と夕暮れの色とは一歩一
歩に近よる。



暇村　京橋　コよろ子



詩の言葉（四）

薄暮

血潮したゝる（白秋）

『薄暮の負傷』と云ふ詩が白秋君の作にある、象徴派の風を帶びた詩で、表現が暗示的だから詩の全體は初心者には分らない、併し薄暮の負傷といふ題意と、血潮したゝると云ふ句だけは、何人にも分る。夕暮のうすくらがりに怪我をした感じは、何となく不安な夜の街にでもかゝつたかの如く思はれるものだ。夜の燈火がつくかつかぬかの境の、人々が何となく、あわて、いらだつやうな時に、能くあやまちがある。街に於ても、家の中に於ても、然うして一種の恐怖を伴ふものである。血潮したゝると云ふ一句が、尤も力強く其印象を表示してゐる。

人の世はいつしか
たそがれぬ、花さき
香に滿ちし世も、今
たそがれぬ靜に（有明）

花さき香に滿ちし世と云ふので、晝間の明るい世界を表はしてゐる、それが今たそがれて行くと云ふので、意味は明瞭であるが、句の韻律　即ち五四の調子が面白くついてゐる。

磯邊に立てる荒屋
童女は早く眠りて
女房厨屋に隙や得たる
形よき貝の火盤を
船澪ぐ目路にと輕く据ゑぬ（泣菫）

海岸にある賤の伏屋では、今、夕暮の色が陸より海に、海より陸に襲うて行くので、女房は暮の忙しい手隙を見て、海から見える窓の邊へ火を點けて、海から歸る人の目じるしにしたのである。想案の細かいのと、興味のある言ひ廻しとは、此の一寸したる事がらにも雖なか詩情を與へた。

『ゆふべ』は白みの額をあげて
心ゆるびのくづをれ（泣菫）

これは少しむづかしい、白い額をあげて、ゆるんだ心のくづ折れたやうな夕暮と云ふので夕暮の心持ちを具體化してある、白い額と云ふ文字は、如何にも夕暮らしい、物象が白けてくるのは夕暮の心持であるから。

夕方の喧騷しさ
何處かで女の子が泣いてゐる
吾家の子らしい
否、泣聲が異ふ、他家の子らしい
未だ泣いてゐる
やつぱし、吾家の子か知ら（醉茗）

散文詩として作つたものだから、技巧は極めて自然である。夕方は何處の家でも能く子供が泣く、外で泣いてゐるやうな、內で泣いてゐるやうな、其泣聲が又能く似て居てふと自分の家の子が泣いてゐるのではないかと思つてみる、併し聞いてゐると異ふ、やつぱし他家の子らしいと云ふので、薄暮の情緒の一片である。

疲れた
すべて疲れた
私は小徑の草の上に倒れて
薄暮の褪せてゆく色を眺めた
靈も肉も

倦み疲れた世の末の落葉の音をきく
（柳虹）

寂しい心持が表はしてある、疲勞の心持が表はしてある、口語だけに何の澁滯もない。

いくたびか色かふる黄昏は來り
半圓の空は遠くのがれんとす（露風）

夕暮の大空の印象を僅に二句に言ひ表はしたのは、確にうまい、半圓の空は遠くのがれて行きさうなと云ふのが如何にも斯う夕方の、大空の半ば、色を失ひ、半ば、僅に輝いてゐるさまを能く表はしてゐる。

こゝに影あり迷あり
こゝに夢あり眠あり
こゝに闇あり休息あり
こゝに永きあり遠きあり
こゝに死ありと歌ひつゝ
草木にいてひ野にあゆみ
かなたに落つる日と共に
色なき闇に暮ぞ隠るゝ（藤村）

影、迷ひ、夢、睡眠、闇黑、休息、永遠、死などをもたらして、此の夕霧は、黒い色なき闇に隠れてゆく、草木にいてひ、野に歩みと云ふので、暮色が深ふてゐる趣も思はしめる

薄日の影も衰へて
風冷やかに雲低き
鈍色空の夕まぐれ
はづれの辻の片すみに
ちやるめらの聲吹き起る（敏）

ちやるめらは巷の飴屋が吹く唐人笛である、其聲が夕暮の寂しい町の一角から聞えてきたのである、此の『ちやるめら』の詩は有名な作で、情調の絶佳なる、全篇を通じて薄暮の趣が深ふてゐる。

はやも聽け、鐘鳴りぬ、わが子らよ
御堂にははや夕の歌きこえ
蠟の火もともるらし、艪を抜けよ
もろもろの美果實籠に盛りて
汝が鴿ら畑に下り、しらじらと
歸るらし夕づつのかげを見（白秋）

夕暮の教會と其信徒とを歌つた詩の一節である、白秋君の作にはキリスト教的の言葉が澤山あるけれど、言葉として使つたゞけで、宗教的には見てゐない、詩人として然もあるべきことで、殊に同君の集『邪宗門』を通じて表はれてゐる處は、基督教が初めて九州に渡來した頃の思想である。此一節も然う思つて見ねばならぬ。艪を抜けよは、舟に乗つてゐる人に言つたので、上陸して會堂へ夕の祈りを捧げに行けと云ふのであらう。

うまし接吻……歡語……

さあれ、空には眼に見えぬ血汐したゝり
なにものか負傷ひくるしむ叫びで為
など痛む、あな暮がたの曲の色——
光の沈默。
うまし接吻……歡語……（白秋）

此は『薄暮の印象』と云ふ詩の全部である、借て此詩の内容には、薄暮の歡樂と、薄暮の苦痛との印象を歌つてゐる、眼に見えぬ血汐が滴るといひ、耳に聞えぬ傷者の叫びが聞えると云ひ、苦痛の象徴は、光線の沈默と、音響の暗色に表はれてゐる、而かも然う云ふ苦痛が薄暮の情調であるに拘はらず、一方に於て戀のさゝめ言や、甘き接吻も亦薄暮の印象である、歡樂の感覺と苦痛の感覺と共、著しい薄暮の印象である。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　常陸　初澤さく子

悲しみも誇りも盡きし日ぞつゞくてのむなしさにわれは死ぬらん

○（地賞）　千葉　松崎きよ子

噴水のわきたつ音か若人の胸にはひゞく間なくかなしと

○（人賞）　長野　世良田夕子

處女てふ名は華やぎてありながら寂しく經たるわれのてし方

佳作

○　新潟　田巻てい子

灰色の衣を被げる運命は打ちたるわれを喜びて見る

○　札幌　あけぼの

きさらぎの若草の香をなつかしみともし火を置く野に近き窓

○　山城　木の花

山に咲く夏のつゝじの色に似ぬとばりを透す朝の電燈

○　札幌　佐々原濟子

さく花に細き雨ふる物思ふ涙にも似て細き雨ふる

○　神戸　宮本綠髪子

夕榮の雲去り行けばひろき野に愁ふる如く月ののぼりぬ

○　京都　中野絹子

藤さきて雨やはらかにふる朝の窓に下りくる白鳩の雛

○　大阪　多野なみ子

傘の柄に桃の一枝を持ち添へて小雨をわぶる朝の路かな

○　渡島　宗原美津子

なべて世を戀のすがたと眺めつるその若き日も昨日となりぬ

○　靜岡　神尾たか子

そのあとに月も來りてなげくらん涙にしめる沈丁の花

○　松江　濟き花

君を見し日より心は打染まり小さき花のくれなゐとなる

○　大阪　岡本春子

囚はれて眉美くしき少女子は黒き箱より世をば覗きぬ

○　兵庫　柳川みきの

淋しさを君に語りてさびしさを更におぼえしあはれなる我

○　美作　水田邦子

近き田に雁の啼く夜は哀れなり戀なき身にも寢ねがたきかな

○　羽前　野口菊子

風あらき世に出でひより名無草萌ゆる野末の土とならばや

○　常陸　古島花子

あはれなるわが世の末と歎きけり君にうとまれ親にうとまれ

○　深川　佐久間貞子

なつかしく頬にふるゝ時くろかみのにほひもまじる春の夜の風

○　大阪　岡田雪子

小雨ふりみどり色こき若ぐさにおち椿して美くしきかな

○　越後　泰山木

少女にて一人さびしく生くる身は夢も顧みぬ小町ならねと

○　福岡　赤毛布

あやまちも時にめでたしかんざしを梅の花さくもとに落しぬ

○　備前　ぎせい女

思ふてふ人を忘れて思はるゝ身を憂しとさへ歎く我かな

○　大阪　三輪とし子

花さきぬうすべに椿新妻の頬のにほひとも思ふばかりに

○　秋田　佐々木貞子

わが戀になびくも憎し一むらの灰色雲に似たる疑ひ

○　淡路　柏木よしみ

此頃の我のなげきは君思ふ心の外に身を思ふこと

○　淡路　大住てすみ

とばりより柑子の色の入日しぬ裸モデルのおとろへしはだ

○　愛知　佐分華影

處女われ生をよろこび或時は死をもよろこぶすべて身のため

○　美作　田鶴女

いさゝかの事にもいたく驚きて眼みはるが習となりぬ

○　　備後　梢の月

若き日に冷えし心を知らずして君はなげきぬ雪にひとしと

○　　備前　彌生熊野

ひれふりて泣くらん人もあらぬ身を送るに似たり港江の月

○　　福岡　建部巨久子

かくまでに君を戀ひつゝおとろふるわれは深山の野菊にも似る

○　　神戸　足立春子

北海の氷に坐する心地して昨日も今日も人の文見る

○　　沼津　鈴木文子

梅の香のすこし匂ひを戀人と語る小窓の夕月夜かな

○　　多都子

野の蝶よ黄なるも白も舞ひて來よわが袂をば花と眺めて

○　　靜岡　鈴木武子

この想ひ君の胸に通へりと夢見てさめぬ今朝のよろこび

○　　京都　三宅壽賀子

強きことといはんとすれど女てふわれを思へば涙ながるゝ

○　　薄桃

病める身は笹舟に似てたゞよひて秋の川ゆく笹舟に似る

○　　石川縣　山田松子

戀人は美しき名のぬす人かわが心をばすべてとり行く

○　　南總　みつ子

なつかしき朧月夜を咲く梅のかげふむ道にふかしけるかな

○　　夕の花

花瓦斯にかゞやく巴里を夢見むと念じて寢ねぬ春の夜の人

○　　堺市　大澤慶

君しろきおくつきのもと一むらの小笹にまじり紅椿咲く

○　　山梨縣　僊谷とみ

カアテンの白きに顔を埋めつゝ淋しき冬の町の灯を見る

○　　京都　要司村福子

うなだれて秋の野に咲く百合のごと涙にぬれて物思ふかな

○　　神保千代野

女にはふさはしからぬ事ばかり好むやうにもなりし悲しさ

○　　前橋　みどり

暖き町の灯かげのたゞよいて春雨の夜の道ぞ更けゆく

○　　府下　かれくさ

木立みな長き髪ひくさまに似ぬ月影ふみてわが遊ぶ路

○　　牛込　平塚白百合

うらひすやいとけなき日の思出のゝこれる寺の石だゝみかな

○　　伊勢　露木雅子

戀ふとしも告げつる人にそむきたる我が悲み花かげに泣く

○　　甲斐　忍子

小雨ふる三保の海路に帆をゆるめ船ぞたゞよふ春の夕ぐれ

○　　信濃　岩波むら子

徒らに君が名などを數書きて喜べるなり若き少女は

○　　愛媛縣　もりみつ

そことなくよき香みなぎる野の道に蝶の宿れる赤きひと花

○　　大阪　うすい

去年の春君と語りし花陰のなつかしければ今日も來て寢ぬ

○　　丹波　大槻房枝

君とわが心やうやく冷え行きぬ世の冬過ぎて春の來るまゝ

○　　新舞鶴　菅幸子

春の風吹くとも見えぬ若草の葉末なびきてかげろふのたつ

○　　大阪市　佐川かほる

暮れ殘る山のはづれに家見えて波の上より月のぼりきぬ

○　　長野縣　三村紫

笛の音の月に冴えたる町ゆけば冬の夜ながらなつかしきかな

○　　大阪　田野しか子

うち霞む吳谿の海原ななめにも松の末見ゆ天の橋立
○　福岡　りん子

緋に燃ゆる心の絲のみだれをばそのみ手によりとかむとぞする
○　諏訪　月見草

春雨の軒のしづくを聞きながら夜ふけし窓に歌筆とる
○　廣島　後藤壽美枝

つむ人はよしあらずとも我が胸の小さき花よこのまゝに咲け
○　浮　雲

けふもまた霞の中を行く如き心地いたましし神に逢はねば
○　備中　雨の花

春の暮堤の茶屋に傘かりて人と別るゝ細き雨かな
○　信濃　稍　子

火の燃ゆる淺間を眺め烈しかる心を秘めてをとめとなりぬ
○　淡路　清　子

夕ぐれの遠き空をぞ思ひやる君が旅路の宿やいづこと
○　京都　幽星子

嵐山竹の林のうす月にふくろふ啼きて雪のふりくる
○　信濃　白菊女

人戀ふる身となり秋を淋しともまた悲しとも知り初めしかな
○　秋田縣　佐々木園子

風吹けば野の霞より四つ五つ草はむ馬の露れて立つ
○　飛驒　むら女

紫に蕨の角ぐむ野の川のみぎはに見ゆるむらぎえの雪
○　中島　幸枝

柴の戸を打てば媼の出で來り路を敎ふる春の野のくれ
○　本所　林白愁歌

荷車の輪の狠れしがうつたかき場末の町の黄昏の雨
○　大分縣　小屋露子

曉のわが家近く雁ぞ鳴く花の香まじり霞まじりに
○　茨城縣　今泉磯千鳥

かの男朝夕に來て跪づき少女の我を賜へとぞ云ふ
○　千葉縣　高岡歌子

おもふこと君に先だつ雨降る日花ちる道を一人行くにも
○　常陸　木村那賀子

事よろづ世に勝れたる君なれば疑はるゝもめでたからずや
○　岡山　さつき雨

溫室の戸を走せ入りて初夏の花をば嗅ぎぬ戀に倦む身は
○　金澤　葉末子

美しと母の脊におてよろこびし日をこそ思へ夕榮の雲
○　伊豫　高橋政子

嘲りのなかに生きつつ淋しくも十とせ眼を病む我と知る時
○　大阪　田野靜子

壁を這ふ松の老木にまつはりて藤の花さく初夏の庭
○　渡島　美津子

君待つと森の木かげにたゝずめば我が黑髮も夕露に濡る
○　土佐　はざくら

云ひ知らぬ寂しき心せまるかなをちかたちにある君をしのべば
○　大阪　かつら月

夜ふけたる浪速の街を出て見れば師走の月のさえて高ゆく
○　本郷　布川糸子

背かれし戀なるものをいかなれば斷つこと難き我の心か
○　水戶　久木野花

病む身にも春の日かげはのどかなり窓の木立にうぐひすの啼く
○　竹内　英

みやしろの白きいさごの上に散る薄紅椿を踏むもかしこし
○　城南　伊藤はつ子

破れたる衣を愧ぢず春の夜のうたげの中に君と踊りし
○　茨城　浮舟女

いねかねておもふことある眞夜中に一こゑうれし天つかりがね
○　佐渡　わくらば

さめざめと戀しき者が胸により泣くとながめぬ曉のゆめ
○　近江　田川倭子

和歌

月あかく戸にさし入りて梅の花そこともなく匂ひぬるかな
○　會津　雪月

黒川の月のあかりに笛吹けば昔の戀のしのばるゝかな
○　若松　櫻月

窓をうつ時雨を聞きて我身をも世をも果敢なく思ふ夜半かな
○　會津　雪女

嘆ちつゝふけて月なき秋の夜に獨り淋しく虫の音をきく
○　日本橋　松岡千代子

雨の夜に旅なる君を思ふかな板のやり戸をとざさんとして
○　大阪　岸本美香子

師のもとに文せんとして筆とれば紙に散りきぬ紅梅の花
○　伊豆　渡邊よし子

戀知らぬをとめが袖に散る梅のうすくれなゐの美くしきかな
○　上毛　小澤碩子

星一つうすくれなゐにまたゝきぬ筑波の山の霞む夕ぐれ
○　長野　水野小百合子

靜なる夜の小雨は降り出でぬ戀しき人のさゝやきのごと
○　渡島　岸浦文江子

計り得ぬ君が心と知りながらその言の葉に迷ひぬるかな
○　德島縣　蔦紅

それとなくわがおのづから尋ねゐし君にもあれや忘れがたかり
○　新潟　田中のゑ子

うちなびく柳のかげを眺むれば都大路の心地こそすれ
○　福岡　伊東孝子

花摘みて髪にかざせば思ひ出ぬ櫻のもとに語りつる人
○　千葉縣　石井せき子

山の井に櫻こぼるゝ夕ぐれの霞める水に鳴く蛙かな
○　千葉　叶屋るり子

國遠くともに別れてありとても同じ學びの窓は忘れじ
○　千葉　齋藤清子

花鳥のよき春ながら父母のなき身は獨り淋しさに泣く
○　千葉縣　篠原のぶ子

新しき人の世に逢ひあたらしき少女にまじり歌を詠むかな
○　京都　赤上きく子

はたちをば越ゆるかなしさ秋の野にひとりなやめるこすもすの花
○　大阪　濱ちどり

たまはりしなぞの樣なる消息もさびしき身にはほゝ笑まれつゝ
○　讃岐　雪子

うつくしき夕映を見て靜にもといきずる人何を想ふや
○　長崎　永井主子

朝の雨彌生の窓にそぼふればべにさす指の淡くつめたき
○　岡山縣　入江曉花

さめつれどおびえし胸はとゞろきぬ大蛇となりて君の追ふゆめ
○　岡山縣　赤木芝泉

流れたる酒舞の浪の中に舞ふ女の姿白くいたまし
○　長野　つぼみ

青柳は風に搖らぎぬ我胸も君にゆらぐを覺えつるかな
○　西多摩　妹岡野いち子

おほつちの底なる暗き岩かげに云はゞいふべし我が秘めし胸
○　西多摩　岡野よね子

なつかしき朧月夜を梅しろく散りたる路に遊ぶをかしさ
○　大阪　秋海棠

いとし兒にわかれし母は此ゆふべ如何にきくらむ木枯の音
○　朝鮮　酒匂美子

はらはらと何につけてもなみだのみこぼれし頃をしのぶ月影
○　金澤　むらさき

やはらかき我の心　のいつまでもつゞくを願ひ冬をよろこぶ
○　越後　こむらさき女

神に似る心もあれど大方はけものとなりて苦めるかな
○　麴町　三田村あき

殊更によわき心をもちたれば泣くより外に我爲すべなし
○　深川　山田花子

悲しみの面に作る笑みの如消えがての灯のゆらぐ明方

○　　鐵蕉

故郷の戀しき空よ暮れかしまぎれて暫し母を忘れん

○　　丹波　愛子

文待ちて夜も寢ねかねる身となりぬ君異國に行きましゝより

○　　山口縣　宮原たか子

をちかたに病むと聞くなるわが友に送らまほしき菫はなさく

○　　下谷　島貞子

あさはかに君が心をたのみつる我をば悔いて泣けど甲斐なし

○　　大阪　杉山かし

人のいふ戀とは野なるたんぽゝのたねよりかろきものと知らずや

○　　靜岡　蘚賀

なよなよとこと木にすがるつたふぢの性もつ我のうとましきかな

○　　長門　うき草

あこがれし都をさして旅立つる何か心のかき亂るらん

○　　金澤　山梔

名も知らずところも分かぬ君なれど逢へば親しき心地するかな

○　　陸前　小岩やなぎ

鋤あとの新しき畑若草のそよぐ畔にて雲雀をば聞く

○　　陸前　浮草子

物思ふわが心をものどかにし霞立つなりきさらぎの空

○　　佐賀　さゝ舟

みづみづし我心をばをどらしむ楓の若葉青く明るく

○　　沼津　渡邊とよ子

うらみわび衰へし身は磯にきて今日も岩打つ浪音をきく

○　　福井　明の星

すき間もる風寒き夜に荒海に旅まくらする君をしぞ思ふ

○　　芝區　古和田秋子

菜の花の遠く霞めば利根川に舟うけし日のなつかしきかな

○　　信濃　吉澤辰美

よき衣なしと我をばそしる人戀なきことのあはれなるかな

○　　播磨　みどり

五人の兄に別れてさびしくも十とせあまりを故里にをる

○　　丹後　伊志子

鶯となりて啼かばや春の日はわが憂き身をも花に忘れて

○　　尾張　榊原けい子

ゆくりなく君と行き會ふ束の間は心あやしく跳りぬるかな

○　　福岡　眞久子

木の葉散り時雨ふりきぬ叔父君を墓に送りし日ににたるかな

○　　近江　鈴蘭

叔父君の手馴れの琵琶に映りたる灯かげ美くし春の夜の宴

○　　大分　しぐれ

わが摘みて捧ぐる花もかすかなるほゝゑみ見えぬ君が手にして

○　　會津　桑原ぜん子

待ちし君相見て胸の安まりぬ三年のほどの長かりしかな

○　　京都　國行しづ

しらしらと沫雪ふれる垣のもと南天の實の紅くかたぶく

○　　泉州　金田代志子

雨ほそく花に降るなり只一人物を思へる窓の夕ぐれ

○　　岩手　ひなげし

をりをりに紅き櫻の花散りぬわが病む窓の晝のつれづれ

○　　岩手　つゆ

霧深き並木のなかをゆく馬の鈴の音聞けば旅ごこちする

○　　越後　岩本芳子

谷に沿ひ白梅さける山里に君いますこととさびしからまし

○　　芝區　東野歌子

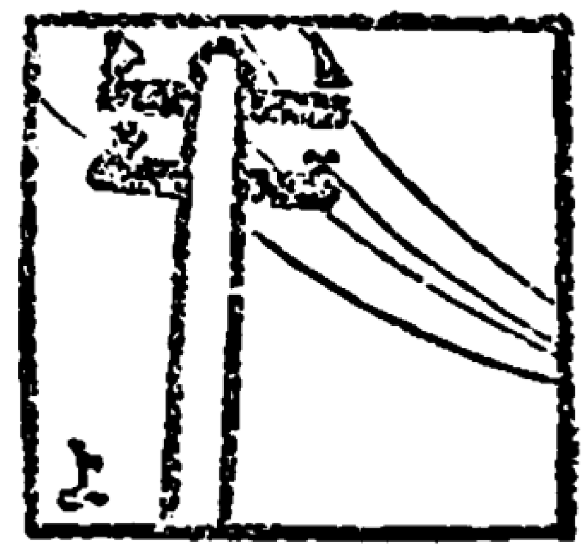
戀しとも憂しともいはで歸りゆく君がうしろを見送りて泣く

○　　京都　竹村楓子

古町の紅賣る家のうつばりにつばめの啼くをふりかへる時

○　　高尾

君が爲一すぢをだに惜みけるわが黒髮を斷つ日きたりぬ



春夜

夜雨

△星ヶ岡誌友會の、一年が近づいた。あの時はあれだけ集つたお孃さん達の中で、初對面でないのは山田くに子一人であつた。細谷京子遠藤妙子の二人は途中まで汽車で迎へられて前の日知つたけれど、どの顔もおなじやうな美人に見えた度の眼鏡を悲むより外は無かつた。桃色の着物でお下にしてたはやぶさを摑まへてゐなんだのが不都合だつて、あとで醉茗がおこつてゐた、先生少しも知らなかつたのだといふ。

はやぶさは相かはらず弱い、一年の三分一近くは學校を休んでゐる、それでも優等點は外さないのだから、逸れなければ未來の造詣ははかることができない、自分の見た作文帳は一ヶ所だつてなほされた點が無い上總の海岸より人に送れる文中、繪葉書を需めて信濃の友と常陸の人とに送るとある上(欄外)に朱で、横瀬夜雨氏に候はずやと男の手して書いてある、受持の先生であらう。夜雨が歌を公にした、處女作ださうだが猛烈だとはやぶさに話してきかしたといふのもこの人らしい。

△歌はもうやめた。自分で拙いのを作るより人によませた方が氣が利いてゐる。『明暗』の序は自分が書いたのだが、團結がくづれずに長く續くか知らん、自分が手を引いたら出なくなりはしまいかと愁ふる。

△三ヶ島葭子は或る運命に泣ける人である、自分が卑怯の命を偸んで生きてるから言ふのでは無いがわれ等は勝たねばならぬ。負惜みでもいゝ戀する女、子を生む女を冷笑せよ、死を思ふ時雲に駈らんと欲する時地に入らんとねがふ時たゞうたを思へこれ君の行くべき道ではあるまいか

△自分が匙を投げたのは「たとへ汝王のきさきと儼さるるともひざまつくべきわれと思ふ勿」の一首を醉茗に抹殺されたせいである、自分の貧しき智識では天晴人を罵りて眉軒れるうたと思つたのが、わけも無くへし潰されたからだ。うたまで捨てゝしまつてこれから何にのがれようか

△美しう透けるうつろの玉ならむ空と海との中の春の夜。「死」より轉じて「生」に歸れるが上にも春は一樣に夜をもたらした、梅咲きし時月朧に桃綻びてかげらう目をつゝむを見る、むかし姉に手傳ひて雛の壇をかざりもした、野に出て蓬も摘んだ。今はわかき人妻とお下げの人より送られし二ケの人形の寂しき机のはしに立つて六曲屛裡灯あかあかと點れるのみ。

△『緣』をよんで見た、はじめて永代美知代の半生の歴史を知つて、心うごくことが大きかつた。嗚呼、彼れ！父に背き母に離れて、泣いてふるさとの水海をあとにせし時、ゆめにも今日あることを思ひはしなんだらうはじめ彼れは足もとに羂の有るのを知らなかつた、さらに彼を待ちてわなく者あるをも知らなかつた。

なまじひに文字を知れるものは禍なるかな、根帶なくして異性と交るものはあはれむべきかなと思はぬことはない、所詮われ人共に何物かの犧牲となつて終うのであらう。

わがはじめて彼を見たのは月きよき八月の夜であつた。月影參差たる三所權現の森の下を車でゆられながら、から堀と土手といかめしき構への木立の中を二重の門をくゞつて珍客を森の家に招じたのであつた。泉水に映る月の影と遠く遠く空より聞え來る祇園ばやしの太皷と、……其時給士した筒袖のしげ子はやうやく年たけて女學校に行くやうになつた。

○

『七本櫻』

嗚呼、君が胸ならで天地に
魂は留らさじ、丸き乳は
人のを指に觸れむやと
出羽の人の契れども

やうやうわかりました、いで羽は今の羽後でせう、このごろはすつかり夢にのつて、手はひとりで弦上を走りますの、こん度お目にかゝつたらうたひながら彈きませうね。(鈴木皷村先生は「お才」もよくのると仰しやつてよ。)

丸き乳は人のを指にふれむや。しかたが無いわね、まゆみ子。

就中泣下誰最多。

『暗きやすらひ』げに若き女王の誇りよ、わがはやぶさの若き姿を見よといひたくなり候。小川せん子の『見るも夢さむるも夢』とおなじく幾久しき品と存候。一月號の振はざりしことは言はずもがななれど、屠蘇白散の記が第一位はあまり輕く候はざりしや。壓巻は章子の『まつかな笑』と存候。但花世さんの『秋空』は別物なり。

あまりのめでたさに流石のドン周、諸孃の群に入りて歌うたはゞやのすき心きざし候へども、折角の蝶を追逃しては園主にすまず、覆面して頭を叩かれてはこれまた痛かるべく候間、やはり女にはなるまじく候。(周一)

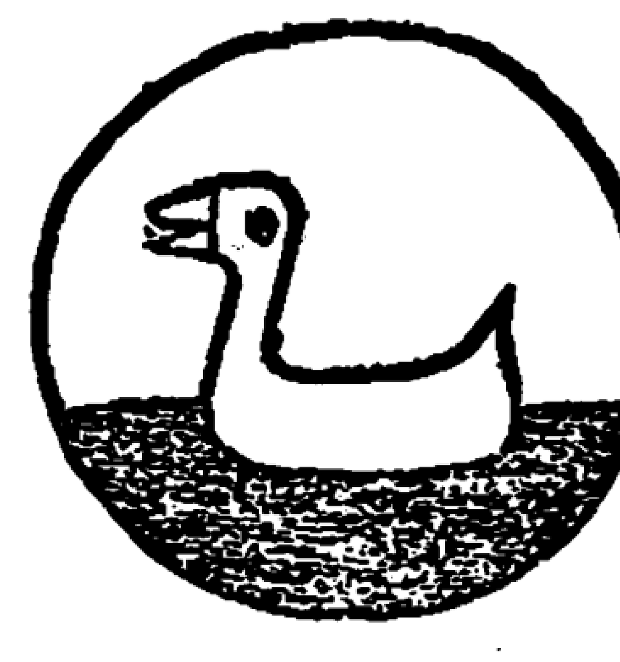
かういふ讀者もおるんだからあぶなくて仕方がない、借問す細君の角を奈何する。

わたしよく夢を見るの、さはると誰でも刺すといふのでいが栗と言はれてますけれど夢を見るのは上手でございます、先だつての晩はね……ホホ止めませうか、でも申上ませうね笑はないでちやうだい、笑つたつて私のことではないからいゝけれど。あのわたし近江のましをさんは母様と喧嘩をなさるだらうとふだん思つてました、なぜつてあんまり旦那様とお中がいゝでせう、あれぢやと思つてゐたらたうとう夢に見て(山梔)

大きにお世話と言はれるだらう。あの熱は當分下りはしまい。

十五日にいやなぎのやし子さん(横山安子、雲井の雁をいふ)がをいでなさいまして、きんじよのむしめたつのかみゆてやろときものをぬいてみじかいまゝ、をさわぎをしていましたのに、やし子さんはあねさまのうちをたづねていらつしやいましてあねさまが私のうちへをくりもうしてきたので、それで私はまがら様(眞柄ひろ子、蒲原早蕨を指す)のをいでとをもて、きものもきかいずにでました、まがらさんでなかつたが、どちらさんからいらつしやいましたときゝましたが、私はしくそこれし(眞く其處だ)とゆてはなしませんでした。でも私あてました、あなたさまのもつてらしやる むらさきの さしんぶつく にあつた、日くれまであしんでいきました。かゝるときまれ(近)やし子さんはぢぶ(自分)のいろところ(居どころ)をはなしません、私わからないでやし子さんのをきにいらないでといゝましたから、どーぞあやまつてください。そでれやし子さんはあかりのつくまであしんでました、つまがすりのかは(合羽)をきて、ぼたんいろのぢきん(頭巾)をかぶていましたから、ちよーど二十一ぐらいにしらみいませんでした。みと(水戸)いもつていたんぎよーのことをよくきゝなりました、山田くに子さんのこともまくきかれましたちよーどまこねさ(大賓())いつたよーな心もつではなしました、やし子さんせんせいにあつたよーでしとゆうてかへりました。しんしよーをもつとたからとをゆび(呼び)にきましよーとゆいました。けふまた雪が八すんほどふりました、みちがわろくてこまり。どーぞ大じに。(おさい。)

雲井の厂の行方は終にさぐるべからず。如何なる里に飾り如何なる家にか宿る、あはれむべきかな。



散文（其二）

編輯局選

○私の生活

京都　三宅壽賀子

平凡なこの單調な生活にあき〴〵してしまつた。

何するのもいやだ、只だつまらない、いつまでもこんな生活をつゞけねばならんのだらうか、私は、あゝ、あゝ、誰だつたか、貴女はもう今から理想のホームを造つていらつしやるのと同じだ、といはれたことがあつた、ずると幾多の女の憧憬している理想のホームとは、こんなものだらうか、私は思つた、ホーム、それはホームにちがひない、けれども理想でもない、只よるべない兄妹が雨露をしのぐばかりにすぎない、スイートホームでもない、理想のホームでもない。

この雨露をしのぐばかりの家に、私等果敢いよるべない捨小舟のやうな兄妹は、互にもえるやうな望のかゞやきを胸にいだいてあるのだ、その、望みを懷きながら、こうしていつまでもいねばならないのだらうか。

若き血のもえている自分は、何物もえずこんなことのためむざ〳〵處女時代をすごしてしまふのではなからうか――否一生家庭にそくばくせられて、こしてくちはてゝしまふのであらうか、あゝ自分は今花やかなもゆるやうな望を抱いているのだ、やはり自分も幾分は自由といふことにあこがれている。

兄は藝術そのもののためにとらはれて居る人だ。

きつと兄も放縱な自由な生活を望んでいるにちがひない、いつも二人で話しする時はきつと「藝術家のそくばくせらるゝほど苦痛な慘めなものはない」といふ。

私はそんな時にいつも何ともいはれぬ感じがする、そして自由々々と胸の奥から叫ぶ、そしてこの家庭を破つてこはして、そして二人とも自由に望む道を進んだらと思ふ、きつと幸福、幸福にちがひない、しかし自分はやつぱりそう思ひながら、尙平凡な無意味な單調な日をくり返して居る。あゝ暗黑――私の望みの先には一點の光明もない。

やるせない悲しみをいだいて、暗い家庭にぢつとしている自分を、不甲斐ない不甲斐ないといふやうなあざけるやうな聲が耳にひびく、あゝ無意味な淋しい暗い生活から、一日も早く脱したいと思ふのです。

少しは何かにかぶれているやうだ、ほんとうは、ほんとうでせうけれど、これだけでは內容がない（記者）

デカダンならデカダンでよい、平凡なら平凡それでもよい、どつちつかずに迷ふのもよい、何れにしろも少し熱情がなくてはダメだ（他の記者）

○公園めぐり

千代田の松

其二　星が岡

御中食する心得で日比谷を出たが、世間馴れぬ同士の若い私等には此家と云つて入り宜い處が無い、天ぷら屋へも上れないし御壽司屋へも入れない、いつそ手輕に御蕎麥屋と云つても、奇麗で大きな家は心がおちるし、氣を吞まれずに此方からのんで掛る樣な家は餘りにきたない、此

度も嫌あの家も駄目出來る儘行くまゝ、生徒の華美で名高い虎の門女學館の赤煉瓦厳めしい前まで來た、最う此の先きには一寸寄る家は無ささうなので、此の邊から横丁へ曲つて、此度こそは目つかつたら最後、其家の何屋たるを問はず、一も二も無く入る事と決定して、奥行の淺い店の三角な牛飯屋の角を左へ曲つた。市區改正をしたのか人通りの少ない割合に路幅が廣い、奥行の淺い無理に列べた様な、揃も揃つて安負請なから木口の新らしい家計りだ。

之れも其中の一軒、家も新築だし構へも大きいけれど幸ひ御客の無さそうなので先づ〳〵天のあたへと、ぬりガラスの入口の戸を開けた。見廻しても一人の客すら無い中の靜けさは、喰べ物商の素貼とも思へぬ。ねむさうに積上げた座布團へ寄りかゝつて居た女中が、首を持上げてものうさふに、入らつしやいましと云ふ、此樣な事では註物も容易には出來まいと思ふ。

しやれた床の間の横には、丸窓が有つて一寸意氣な作りだけれど、子供の指あとだらけな疊つた姿見の目さわりさはその印象をけすのに充分だつた。

此處まで來て仕舞つては再び日比谷へ戻るも大變だから一層星ケ岡へでも行つて見やうと思つて、白けたほこりの路を溜池の方へ歩るいた。

パッ、パッ〳〵と砂煙を立てゝ二頭立ての馬車が通り過ぎた、車上の人は淡紅色の洋裝神々しい十四五位の姫君であつた、十六の菊の御紋はいづれ高貴の御方と恭しく目送した。

ほうづき提灯や萬國旗のつるして有る演伎座の畫看板の前に、兒守の一群が赤犬をいぢめて居た。

左側は御待合と瓦斯燈の出た好ましい作りの家計り。潰島田の意氣なのが左褄取つて門をくゞる、夜はなまめかしい絃歌の聲がもれるであら

る

見上る屏の上の松の葉越にするりと二階の窓の障子が開いて、豐な半身が現はれた。折柄通るでゞ輪の上の朋輩と顔見合せてニッコリ目であいさつする美はしさ。

成らう事なら絶世の美人に生れ變つて斯うした境隅に身を置くのも面白からう、「萬龍の樣に成りたいわねー」と友も云つた。

右手の高い森は星ケ岡、春四月には我が文壇の花の集りの有つた所、其の折は霞の樣に美はしく開いて人の花と艶を競つた櫻も、秋十一月の今は梢寂しく病葉が散つて足元にうづ高い。社殿のあたりは湯島天神樣で山門の邊が芝の増上寺に似通つて居る樣に思つた。豫期した程の印象も無く此處を出て清水谷の方へ歩るいた。

道筋ばかりで、本督の公園の記事が三行とはあつけない、併し道筋は面白かつた(記者)

○再生の驚き

常陸　野に咲く花

片山里の野の姫と初めて石に花咲きて、近い中には人妻と呼ばれる、紫の月波の麓、大寶湖畔に自ら天が成せる詩の國を誇つては居たが、野娘に似氣なき私は空想の高い憧憬の烈しい女でした、紅梅の蕾ふくらかな窓に、五年の永い間兄に見せぬ秘密の箱を開いて、數知れぬ手紙を讀み返し裂きては噛み、噛みては裂きしてゐると、郵便!

横瀬夜雨氏水戸にて死去、只今停車場に氏のむくろを迎ふべく候余は後便にて

二月七日夜　　　　美　喜

あゝ其れを見た時の小さな胸は、、、、、お正月にはきつと來い、寫眞

も靜山見せるとつひ此間の手紙にも書いてあつたのに、一度もお顏を拜さぬ中に、僅か一里を離れた近き里にあり乍ら、あゝ……狂氣の如く私は騷いで居た、ガラ〳〵と車の音、私は亂れたすがたに走り出づれば、車上の人は不思議にも永い間慕うて居た病める詩人、たつた今死んだときいて泣いた計りなのに、私は餘りのことに狐につままれた樣な心地して何等の言葉も出し得ない、おたんなさいましとお止め申しても其儘お歸宅遊ばしました、まあ宜う御座いました、私はそれ計りを繰り返すのみでまるで夢のやうでした、車を見送つて再び窓によつた時只無暗に嬉しくて微笑まずには居られなかつた、幼ない時分よくおばあ樣から聞いた小栗判官のやうな感じがしました、お正月に行くと家風で大久保彦左衛門が昔食つたといふ目こすりなますとか申す御馳走を食べさせると云ふので先生のお宅へは氣味惡るくつてうつかりあがられぬ、蛙の目へ唐からしをかけたものでしきりに目をこすつて居るのをもう見せられただけで胸がつかへて了ふもの私を二十二だつて仰有つたが今度はお分りなさいましたでせう、女でも私、僞を言ひませんの……」

いかにも生きかへつたのは小栗判官に似てゐる、ゐざつて歩くところは勝五郎に似てゐるなど半疊に御免を被る況んや綱手にすがるはつ花さへあらざるをや

二十二だと言つたのは全くやぼだつたお隣の誰かさんよりは凡てに於て優つてゐることもわかつてなるほどうそを仰しやらぬことを保證します、一札仍如件（その人）

○朽ちゆく匂ひ

ちどり

絹笠かざして母につれられた暸眼の十五の春はいと樂しうございました、牡丹ざくらのたわゝにさける宿のおばしまに凭れて望んだ赤城も比叡も、今なほわたしの眼には明晰と見えてはゐますけれど、わたしの袖模樣は、ひと日〳〵とくれなゐの色から遠ざかつてゆくのですもの。

わたしはいつ迄も紅の匂ひの中に生きてゐたうございます。廿歳といふ女のいまはしさよ。誇れる乙女の身の、たまゆらにそれもいかづちの光の中に消えうせやうとするを厭ふさびしさを、誰が解して下さるでせう。

茫燒く煙の中にも、ともすれば何かは知らずあはき物の影を見出さうとする寂しき心、かくしてわたしの身は高きほこらひから次第〳〵に遠ざからうとするのでせうか。ほこりのまさに衰へゆかむとすると女の紅きさびしみよ。母は知らじ父も知らじ。

戀を破つて、知らぬ里に新らしき家の人となられた照代樣は不幸であつた。「流れゆく水に過ぎたる歌は書かじ」と氣强くおつしやつてはゐましたけれど、先日のお手紙にも、筆の先がおすべりなすつたのか、

「知らぬ里に知らぬ旅路に迷ひ來て、母となりにしわが涙かな」と、あるんですもの、そして、

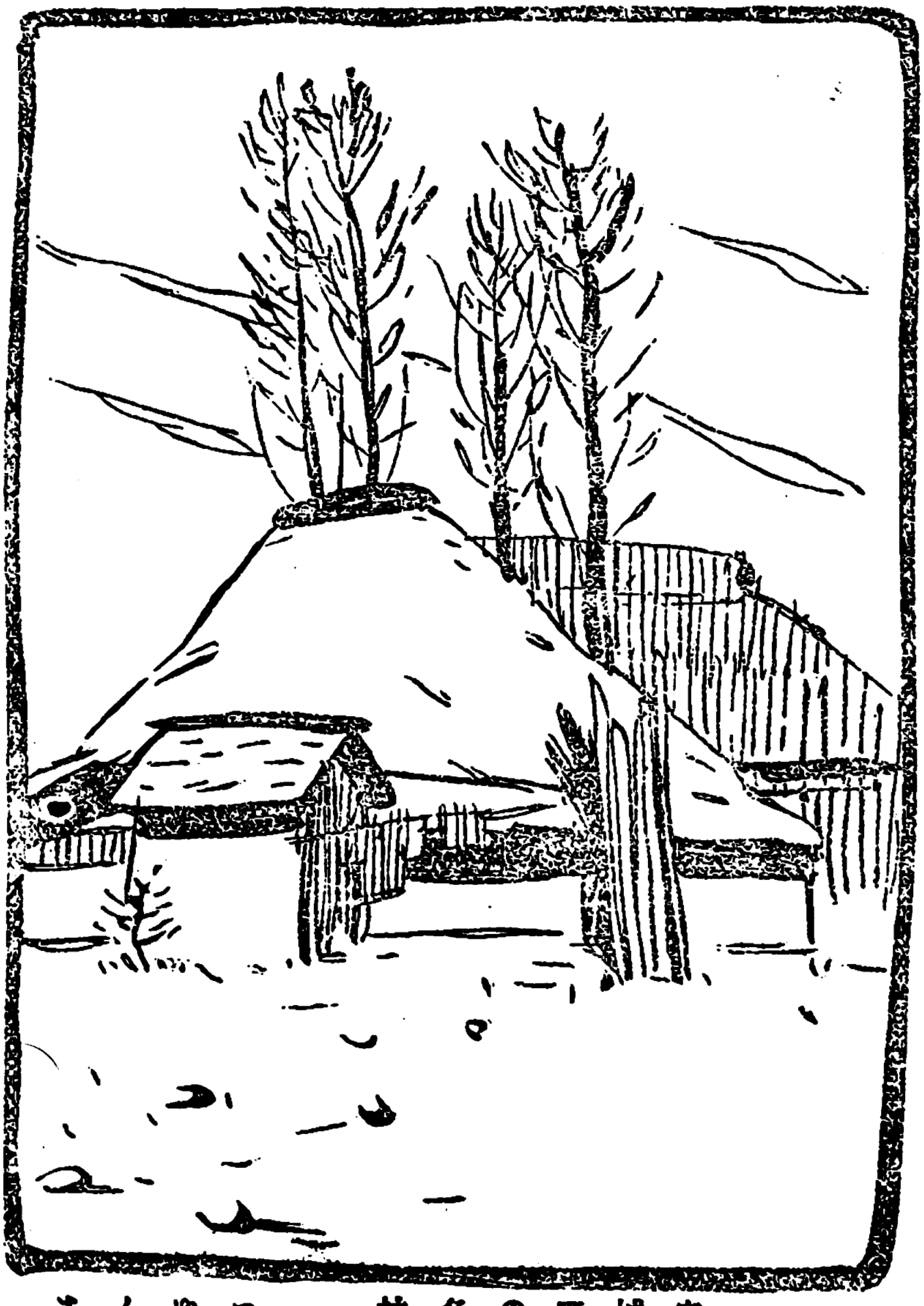
「ちどりさま、せめてはあなた丈けでも、出來る丈け若い血からさめないでゐらつしやいよ　あなたはいつも何物かを求めやうとする寂しい心に惱まされるとおつしやるけれど、わたしにはさう云ふ若い時代は、もう夢の樣にすぎ去つてしまつて、紅い乙女の血と云つては一滴も殘つてゐないんですもの。も一度此頃のあなたの樣に淡い哀愁や歡樂に打たれて見たいと思つても、それも到底駄目なんですもの、わたしはなぜこんなに急いで新らしい家の人となつたのでせう……」とまた何か書きかけては消してある。

照代さんは屹度なやんでゐらつしやるのでせう。そしてわたしよりは

杳かに切實な惱みに取卷かれてゐながらも、それは決して誇りのある惱みではないのでせう。あゝかうして女は老いゆくのでせうか。

せめては今のまゝにでも、いつ迄もかうした孤獨の甘さに生きてゐたいとひたろ殊更にさう想はれます。明けては暮れざるを願ひ、くれては夜の長かれとねがふ心の切なさを、人は咲く花を指折って數へてゐるんですもの。

すぎたる日の懷かしさを戀ふる心の寂しさは、何物にも譬へやうもありません母の乳房にすがりて寢たる夜々の夢はまたあらたなるはわたしの身には早や廿歳と云ふ文字が讀まれるのですもの。炬燵へうたゝねするが淋しゝと言つては、父に抱かれて床の中へうつされた夜もあつたのですけれど。不安の心に堪へかねては、ふけゆく夜の窓にもたれて、靜かに頬を傳ふ涙を拭ひもせず、只わけもなく男子のやうに口笛などを吹きならす夜もあります。



宮城野の冬枯　つゆくさ

今朝また何おもはずあけた押入の小さい文庫の中から、男の名のやうな靜緒さんからの古い手紙が出たのでした。

「……わたしはきのふ島の里へ歸りましたのも一度お目に掛りたいと切に祈つてはゐますけれど、もうとても駄目でございませう。わたしは肺にかゝつてゐるんですもの。冷たい光りの中に生ひ育つたわたしは、こうして冷たい波の底に葬られるのでせう。夜々の枕に人は戀ひても、それは只日蔭の淡い哀れむべきわたしの果敢ない執着に過ぎないんですもの……」として、又、「わたしもあなたにならつて詩を作つて見ましたの

冷やけき、わが胸の野に

まきいでし花のひともと
紅の匂ひぞゆかし。
あたゝかき光りのさゝば
美くしくみのるとすれど
培ふに土はつめたし。
…………………

とかいて終りに、「うまいでせう、笑つて下さい」としてある。

想へば靜緒さんにも懐かしい人はあつたのでせう。わたしは直ぐ返事を書いて出したのでしたけれど、其後靜緒さんからは一度のお便りもなかつた。寄せては返す涯しもなき冷たき波の音に包まれて、亡くなられたのだらうかなどゝ想ふ日などがありましても、すぐそれは打ち消されて、あの美しい靜緒さんは決して亡くなられる筈はないと想ひ返しますの。けれども、美くしい假名がきの文字は、かうして今なほわたしの筐底に秘められてゐますけれど、再び會ふよすがもないのですもの。

あゝ日〱に遠ざかりゆく友の面かげよ、誇りがに撮れる寫眞の裏へ「なつかしき　子樣へ」など書きて送りたりし日の美くしさよ。あゝ遠ざりゆく友！それは紅の匂ひから褪せゆく日のわたしの影を現はしてゐるのぢやありませぬか。

今宵しづかに箏ひく手をやめて、箏柱に落ちかゝれる髮の毛を拾ひもせず、つかれたるまゝに立つて窓をあけると、おぼろにかすみたる夜を月は傘して。

住所も姓名も書いてない、覆面のまゝ評を求めるのは確に無禮である。いたづらされるような氣もしてたまらぬ、三才にも位すべき作なれど六號に組めるはこの故なり。（記者）

○暖かい雨

草花

しと〱と朝から降り續いてゝ、ぱかに暖かい日だ。庭の梅はいつの間にか、蕾が紅くふつくらして來た。「春だ春だと頻りに心が、歎喘す樣に叫ぶのよ」と、妹は云ふた。

俄に足袋跣ま敷なつたので、早速脱いで、深く濕氣を含んだ冷たい椽側を、靜に往來して見た。

堪らなく忙敷い如な、暇な樣な……遂、柱に倚つては茫乎して了う。

「近い内に是非來て下さい、一所に街を歩きませふ」とある葉書が定さんから來た。何か深い意味でも在る如に思へてならないから、早速出掛た。

定樣の家を出ると二人は、再、靜にさゝやく雨を懐かしみながら、舊い栗色の低い家並みの街を行つた。「もう梅が咲き出したら春はしめたものねほんとに……春は好いこと」。這麼事も話しあつて見た。けれどすぐ互に無言つて了つた。私は何者かゞあはいに挾まつてる如な心地がしてならなかつた。二人共、同じ程度に俯向いて、シクシク、と、泥濘をのろく踏んで行くうちに、或老舗な紅店の前へ來懸かつたら、定樣は、「私、一寸」と逃げる如に其店へ駈け込んだ。

「若しやと思つたら……」などゝ、考へ乍ら、思はず茫乎と佇んでゐた眉の無い主婦らしい人が、薄つぺらな口調で「これはほん其い品で……」などゝ、幾個も〱、中の青光るチョクを勸へす。

樋をすべる水が、折々、ドドー、ド、ド、と、けたゝましく叫ぶので定さんの低い聲は、私には聞き取れなかつた。

其店を出るとすぐ、「お待ち遠樣」と目禮をしたまゝ、きまりが惡いと

いつた如に、少し先へ歩るく。私はわざとのろく歩るきながら「もうちきに月摸をとるんでせふ」と云つて見た。定様は聞えないふりをしてさつさと歩るく。「待つて頂戴」と小走ると、云ひ知らぬ羞恥を含んだ微笑をたゝへて振り反つた。

雨の音は益々寂れて、加茂川縁りへ出たとき、重い灰色の虚空を破つて、比叡山の頂が靜に現はれた。

晶子の歌を散文にしたやうな處がある、文章は苦しさうに、息もきれ〳〵であるが、新しい味いを持つてゐる、もつと書きなれると好い(記者)

○春の日

田村波津子

「アラ鶯が……はつ子さんは、どちらの耳できいて?初音って左耳できくと其の年は運が好いのですつてよ」「おや私は両方できいたわ、だつて私の耳は左だつて右だつてよう〳〵聞えるもの」「アラいやなはつ子さんよ」「じや貴女は」「無論私は左耳よ、あの紅梅に鶯が止まつたから鳴くのだとね思つて左耳をむけて居たのよ」と直面目「それじやなにもならないわ」ホホ……君子さんはレース針を運ばせながら、辯解してる兄がノツリ〳〵出て來て「何をくだらないこと……言つてるの、それより僕が花守を讀んできかせよう」と頁をくつて、私の一番好きな處を讀んで下さる、君子さんは思ひ出した樣に「大寶でしたね夜雨先生のプレースは」「笠間から七八里ね」「先生のお屋敷はさぞ詩的なのでせうね?」「垣間見たいわ」「水戸のスクールに居た時、夜雨先生とはリレイションだとおしやつた方あつたわね」「何んでも三四年後でしたわ」「そうでしたね」「しかし私等がもし先生の宅の樣な詩的なハウスに住まつても詩なんか、出來ませんね」「初子さんのやうな者はどんな詩的な仙境に行つたたつて駄目だよ夜雨先生はゼネアスもあり修養もあるのだからね」「アラ、ゼネアスつて何?」「それ位しらないで、散文を作らふとか、歌や詩をよむなんて隨分セルフラブしてるね」反抗はむら〳〵起つたが、どうせあらそつてもだめだと思つて、だまつてしまつて、鶯は枝から枝にとびうつては、美しい聲で春の歡樂をうたつて居る。

夜雨さんのお宅だからつて別に詩的なわけもない、あたりまへの家ですよ、(記者)

○お稽古屋

うすい

此所は○○校のお宅ですの、中の間では今お學のお稽古最中、店の間では私等九人お稽古の順番のまわつて來るまで遊んで待つて居りますのさすがやかましくは申しませんが、石家の宿がへて重い重いにあそんでをります、オジャミをしてる人もありますし、又火鉢をかこんでイヅクシをしてる人もあります、私達はこちらのすみで濱樣と君代樣と二人で女學校の話しをしながら一生懸命に編物をしてをります、と、たしぬけに君代さまが、

「あの文樣、立花先生ね、あたしのクラスではたこ先生と云ひますのよ」

「え、たこだつてホホホ……」

「でもさうよ、頭がクルットはげてるものね。それから秋山先生はカンテキですのよ、よくおこんなさるから」

「オヤ〳〵カンテキ先生だつて……」

と濱さまがとんきような聲を出したので、火鉢のそばでイヅクシしてた人も、オヂヤミしてた人も、一度にふり返つてどつと笑つた、濱樣自身

もお可笑かつたと見えて、袂で顔をかくして笑つてらつしやる、と音もなく間の襖が開いて美くしうお化粧した、春子さまが、

『皆さまお待ちどう様！』

と片頬の笑みでおつしやる。今まで私の横へ坐つて編物している手先をぢいツと見てた、十才ぐらいの髪をおもひつきに結ふて、紅い鹿の子をかけた色の白い娘が、『お先きへ……』と云つて、そばにおいてあつた紫モスリンのバチつゝみを持つて中の間へ行つた。

『お師匠さん今日は！』

と云つた言葉がはつきり聞へた。

『文子様今の人ね、新町のお茶屋の娘ですつてね』

と今までイヅクシをしてた、光江さんがかうおつしやる

『あら、さう、だうりで髪の結ひ方がね——、變だと思つたの』

と云ふ、モー此の次ぎが私の番なので、編物を袂へ入れて、中の間で彈いてらしやる三絃の音に耳を借す、七草の合の手、私も小聲でつひて唄ふ「ちゝとはゝとが下駒はいてす——ぺつた」

『あら文ちゃん何をいつてなさるの？お可笑な人……』

と濱さんにポンとひざ頭をたゝかれた。

『でも聞いて御覽、あのチチチ、チチチ、と云ふとこか「祖父と祖母とが下駒はいてす——ぺつた」と聞へるぢやありませんか』

と云ふたら、

『ほんとにね——』

とそばから光江さんが感心する。

あーツと君代さんが、ながいあくびをした。

『あなた誰方のつぎ？』

ときいたら

『えー、あたし神山さんの次ぎよ、モー三人もまたなくちや』

とあみかけの花瓶敷をポンと向ふへ投げて、たいくつさうに又あくびをした。

中の間では三絃の音がやんで「さよなら」と云ふ可愛らしい聲が聞えた。

と

『お次ぎはどなた』

と、ふといお師匠さんの聲がしたので私は、

『皆さまお先きへ』

と云ふて小さい蒔繪の瓜箱を持つてお師匠さんの前へ坐つた。

寫生文式の處に妙を得てゐる（記者）

○雪晴れ

秋野の女

眩暈のするほど降り荐つて居た雪は。今朝に成つてカラリと晴れた。萬象は小袖綿を薄く掩た如に清く美しい。空は一面際涯もなく紫紺色に澄み切つて。神のいます天國も透いて見えよう。小さい胸は向上心に溢れて若い血潮に沸いて來る。吁

妹の死は斯麼日でなかつたらうか。乳兒の乳房に細い白い手をかけて乳首を啣んだまゝ、スヤ〳〵と眠るやうに。妹も——三つ歳下の可愛い妹も安らかに死の手に導かられたのではあるまいか。母が粥に砂糖を混ぜに厨所へ立つたその二分時と經過せぬ僅の間であつた。かへつて來た「芳枝や、芳枝や」と平素の靜かな物の言様より。優しく仰有つたけれど「芳え」は何ともいはぬので。母は耳朶に口を當てて。芳枝や、芳枝やア」と高い聲で。狂氣の如に名を呼びながら。呼吸を伺はれた。空氣は沈滯したまゝ、更に呼吸を感じなかつた。其時母は始めて我が子の死を知り

布團を刎ね退け。「芳枝や死んで呉れたか……芳枝や」と揺り醒まさうと狼狽し喘いだ。……
絹夜具の冷たさよりも生より死に推移して行く刻々に増す骸の冷たさ暗い暗い室の空氣に冷え行く若き「芳ちやん」の肉骸。果して怎麽感じてあつたらう。雪ふる中に身を横たへてわれから埋れた時と同じであらう。
病室には母一人の時であつたといふが却て母にしたら幸福であつたに違ひない死を病むが兒に知つて。母は母の體の温みを削ぎ愛娘に分ちつゝ魂の溶くるほどせめても愛を與へたといふ。母の涙は更に更に「芳ちやん」の美しい屍骸に注がれたのである。嗚。
「芳江」は幸福の間に天國に逝つたのだ。
粉雪がサラ／＼と風に舞つて私の熱した頬に觸れた。私は夢から醒めたやうに遠き越路の空を眺めやりて老いし母を想つた。
雪の三國を馬追ひ越えりや
可愛我が娘か彼の音
耳朶に淡い夢の如に聞へる。
原文のまゝなのは三行と並んではゐない、満紙加朱の痕を止めてやつと復活せしめた筆蹟の美事なるにも似ず句讀さへ知らないのだから駄目だ(記者)



途上　本郷　花岡千代子

○味柑

備中　小見山春子

何となく夕暮の氣が漂ふてゐる午後の四時頃
妾は風呂の小窓から見て居た
十一になる正一がこそこそと蜜柑畑へ這入つて行つた霜除けにした荒莚の下にはワシントンネーブルが食慾をさそふ樣な色をして居る
正一は足音に氣を付け乍ら、自分の脊よりも高い樹の側まで寄つて邊りを見廻したが誰も見て居る者がないので伸び上つて一番低い枝のを一つ取つてそつと袂へ入れた、そして又キヨロキヨロ邊りを見廻し乍ら急いで入口にある夏蜜柑の下迄出た

すると向ふから誰か來るので彼れは驚いて樹の後へ隱れたがそれには氣附ぬらしい

七ツ位の女の子が大きな包を提げて來た

これも眼は黄色の果物に注がれて居る

彼れは不安な目付でヂツと女の子を見詰て居たが、それが自分が隱れて居る場所へ近ずくと堪えられなくなつてワツと云つて飛出した

女の子は手の物を取落す程吃驚してタジタジと二三歩後退る

ウワツ!!!吃驚しやがつて!!!

彼は手を拍つて笑つたがそれは取つて附けた樣な聲だつた。

型にはまつた文なり、備中小田郡の邊の兒どもがびつくりしやがつてといふような東京子であらうとは想像以外である(記者)

○妹の日記

近江　中川つる子

I月M日、晴、今日はいゝお天氣、學校はお休みなのです、庭に來た見たことも無い大きな土色の蛙がギロギロと目を光らして、今にも飛びつきさうな顔して居ましたので吃驚しておさんに云つて行きますと、おさんは笑つて『あれはお孃さん蟇ですよう妾の里には、また〳〵大きな丁度お孃さんの覗みた樣なのがおますよ』と、云ひながら『しツ、しツ』と追ひますと、ピョイ〳〵飛ぶのです、其の飛ぶ間の遠いこと、妾どんな事したつてあの樣には飛べなくつてよ。

I月N日、夕方親鳩が急に悲しさうな聲で鳴き立てた。不思議に思つて見に行くと、巣の中には此間生れた許りの雛が一羽死んで居る「まア可哀さうに」と妹は早涙聲である。

妹は「鳩は女夫卵を生むつていふから、何は醜くてもかうして夫を失つた雌は嘸悲しいでしやうね——大きくなつても一生やもめで暮すでせうか—」

死んだのは雄だと獨斷してしまつた、そして明日は墓を立てゝやると云つて居る。

蛙の眞似が出來ないつて慨嘆するのも阿呆臭いが、鳩の死を悲むはどの女が「めをと卵」だの「やもめ」だのとえらいことを言つたものだ(にくまれ記者)

○呪はれし女

茨城　浮船女

幾度かためらひつゝ、やう〳〵思ひ切つて此文を認めました。T樣、昨日からのこのいたつき、冷たい病床に呻吟する身をよも御存じはありますまい。あゝT樣、極端でなければ異性の交りは出來ないものでせうか、私は悲しうございます。血も涙もないといはれた私は矢張り血もない涙もない處女で終りたうございます。

放浪の旅にあつた秋の月、折々上げたレターの中の、燃ゆるばかりの楓の葉に何の意味が存在しませう。封筒のパンジーだつて何の暗示でもないものを……。ですのに——ですのに?あなたは何と仰しやつて、私も男と生れて活きた社會に奮鬪してみたかつたと申しました時に……。僕は女と生れて世のあらゆる男をあくまで欺いて——そして快としたかつたつて——「極光」の純子を……

あゝ純子——純子、世の女は皆あゝだと仰しやつた。それではあまりに女性を輕蔑したお言葉ではありませんか、むりから交りを願ひましたのは、私の罪ぢやありませうけれど……私は口惜しうございます。

けれど忘れがたいかの日、歡樂に醉はされてゐた神無月の日の事は、

只もう嬉しさに、世もなく人もなく前後の分別を忘れて、迷つて居る心には身のさちを、神に感謝したのであつた。が考へて見れば永久に交りは願はれなかつたものを――でもあんまり果敢ない別れではないか？

はかない夢、幼ない空想から覺めた今、君のお心から私といふものを去つて頂きたいのです。それは決して望む所ではないのですけれども。お怒りは知つて居ますが、やがては死ぬ身の、弱い少女をせめないで下さい。只一言――只一言でよろしうございます、風のたよりになりと恨まぬといふお言葉を、承れば瞑しまする。よくにはお眼にかゝつてお話したいのですけれど、心の弱い私はお顔を想像したばかりで、もう身内が戰いて云ひがひなくもたゞ涙が溢れます。

さらば御自愛遊ばせよ。

一昨日の晩の、あの恨みこもつたお眼を想つてぞつとした。あゝもう永久にお目にかゝりたくない。あのやさしい表情に富んだT様として私の心に畫いておきたい、いつまでも――いつまでも――。

古河は若杉濱子を生めるの地、君つぎて立ちたれど甚しいかな逕庭の大いなることや(記者)

○うらぶれの影

下谷　島貞子

靜寂な道の風はないで冷い夜の空に堪ず輝く月は何程身に泌みたらうか處女の身の廻りを繞うて自然の現は冬と云ふタイムに攪亂された。

神經の感覺が只恐ろしく思はせたある人――幽玄な過去の回顧に若い胸を鎖して、正洞院の高い石のかこひの側を素足で歩くやうに、極めて弱い足どりに歩く儘に妾の影は動いて居る。行く先に連なつた石がこひの森に冬の青葉が夜は黒く見える。徑に敷かれた砂利は只白く霜に凍えて居るのを、妾に遠望させる。熱烈な心――プライド多き人生は妾の十七といふ年をのぞませて呉れたのに。――あゝ妾は今まで何も仕なかつた。神經が淋い社會を無視して居た、其れ程に自分は大膽で在つたらうか。――

山谷の幽邃を辿る樣に、人の口笛を聞くマルセーユの歌を謳うて雨の降る海邊を歩く人を想像して見た綾湖畔にチロルの靈者を寫しだしたある夜、いつ迄も其の人の懷かしい口笛を聞きたかつたかくして溜つて居た熱血は淋しい夜の息と共に流れた。

渺乎として孤立した自分の影は、今は凝として妾が凡ての心を包んであゝ何をして居たらう。ある年は妾を無心の裡に葬つた、その女は茫漠とした冬の空氣を吸ふてあかしやの蜜の如美くしい戀の香に漂う場裡の女の群に妾も浸りたかつた。でも――星影燦として蒼天はあたへられた女の眞理を濁されなかつた。妾がソールを破壞したら。――胸底に漲ぎつた幽思な冥想はそうしなければ消えないだらう。

生きた女性である。紅い唇の色〃瑤はせ動かない。處女の溫情をすてゝ薄い姿を遺す女には生れなかつた。暗い冷い死の斷涯に沈む幻影はまだ妾の息をうばうには早い。――

人の口笛。また其れを聞いて歩く、徑はつきた吹かれようと思はない冬の風は薄い歎かなものを漂はして行く。あゝ。――その人の口笛はしたいにかすれて響く。徑の分け目にアーク燈がついて居る。死んで逝く人が息を堪えて居る樣に三つの道に模糊と褒光を放つて。――此の光が華美な奴の群が居る樣で。――その白熱燈に付いた精が密かに暗示を送られた樣に。妾の足は進みにくかつたもの。

蜜を吸ふ花の匂を嗅ぐ女の群に行く妾ではないのだ。運命にへだてられて其の儀姿は人生の春を極めて優婉に暮さうおゝ永遠の生命、不死！

不死ー

あゝ神よ。感謝す。此の愛に答ふべく満腔の熱心と忍耐をもて働かし給へ。濁がれた白熱燈の光はいと強く妾が氣力を吸ひ込む樣に浴びせる夜の風は又衰へた――行く道を選んで冬の夜の冷さを好逃して長く續いた正洞院の石がこひを眺める。――その內に人の死は空しく埋められてあるんだ。その石に妾が敗殘の影が。――

宛字も原のまゝ、意味の通せぬ條も原のまゝ、手がつけられない文章の例として揭げた、正洞院の石垣にうつる影は此人が思つたのか見たのか、誰かゞ中に死んでもゐるのか、一切わからず。教へればモノになりさうな人なれど、おそらく自覺する機も無くて終ふのであらう。(Y)

○車にて

神戸　宮本綠髮子

夜楠公樣へお參りする、寒いのに步くのも御苦勞と思ひ母樣と××の家迄車で行く、東門からは步かなくとも人に押されて獨り手に神殿の前へいつた、見えなければこそ、晝だつたら此埃の中にとても居られた物でない。御賽錢箱の兩側に提灯が二つつきさしてある。誰が遠くからおひねりを投げたのがローマに結んだ頰に厭つて程激しくあたつた、誰や無茶したらいかんし、痛うおまつしやろとは連の丸髷、

曲者と思ひつゝちらと顏を見た、お化け――二人共○檢の藝者だ、年に一度の丸髷……母樣と別れない樣に人ごみを拔けて正門に出る、新式の電車が音もなくレールの上を輕くすべつて行くのはいゝけれど相生橋上の單線の爲めに電車の行列して待つてるのは如何にも不樣だ、目の前を親子と云ふ體のお化けが行く

黒紋付のお母樣風とうやくしく肩上のついた着物に高島田の娘風、賣つた女が賣れる女のまねして、厭な氣がする、冷たい夜風に吹かれたせいか自分の喉は又ヒイく音樂を始め出した、幼き日よりの病せきに苦しむ子を抱いて母樣は一睡もなさらずにスッポンの血を口にしたのも――あゝ幾たびであつたらう。

靜かな切り通しを車でうゝつに搖れて歸る

藝者！をさう嘲るものではありません、賣らるゝに時の違ひこそあれ、女は皆おなじ運命に落つるのである、ずましたつて何になる(Y)

○故鄕を後に嫁ぐに望みて

益子

其後はどう御暮らし遊ばしますか、御忘れ下さらないのなら、ちと御音づれなすつて頂戴な、お恨みして居りますわ、時に佳子樣ぜひ御話し申たい事出きましたので、何はさて筆とりました、實は今度こそいよく決りましたの、もう嫁く日は近づきました「貴女嬉れしいでせう」「えゝ嬉れしいですとも」なんて、もう平氣で云つてのけて居るもの、、さすがに胸は、波打ちますのよ、はなやかに……。けれどね、何だか日一日と迫るにつけ、見るもの聞くもの感慨はつきません、今亦のぞむ、霞棚引く比叡の峯、懷かし美はしの姿、お婆アさまのおせなに、ねんくよし乍ら眺めた姿夢のような印象の今なほ殘つて います 思ひ出おほいあの姿、變らぬ今のこの姿、なほ永遠に同じきまゝにありませう、けれどこのなつかしむ心の冷ゆる時の、若しや有りはしますまいか……遠く去りては年月經るにつれ……あゝ懷かし我心、名殘り惜しまれてなりませぬ、春に先つあふ鶯の、早くも谷を立ち出でゝ、松の林にうつるとも、昔の古巢を省よ――あれとこかで優しい聲が聞こえます、その昔校庭の

それよりも、さらに〱強く胸にしみ渡ります。又思へば可愛き弟の姉さんどこへもどこへも、行つてはいや……とついてまわるいぢらしさ、心強くもふり捨てゝ妾はいつてしまいませうか……あゝ無情にも……もういつそゆかないで母なきこの家に優しき妹寂びしき父いたいけの弟と共に、慈母の瞳と仰ぎ慕ふ比叡の峯、愛宕の山、右と左に親しみつゝただ平和に生きて、いつまでも暮らしませうか……けれど、それかといつて、もう〱、妾だつて、味も香もなき生活、木枯しの後のやうなこの家庭に、あゝいつまで……全く倦んでしまつたもの、心のまゝなる華やかなるライフ　蕃はしい、矢つ張り蕃はしいどうしても……さはさり乍ら、さてこうなればまた後に心は引れます。毎日こんな矛盾な想ばかりを繰り返し〱してゐます。

仕度なんかはもう大方調ひましたの自分のものばかり縫つてうれしいやうなつい心はうき〱しますわ。

遠いといはゞいへ僅か百里やそこら汽車にのれば直ぐですわね、また帰りますわ暑中休暇には屹度よ、貴女も其時には御帰りなさいな、懐かしい舊都の風光變らぬ心で眺めませう、○○さまのやうに友をさへふりむかないような事、妾にはどれほど境遇は變らうとも斷じてありませんわ信じて頂だいね、

なほ〱申たき事もあまた殘つてますがけふはこれにて。取りとめもない事ばかり長々と、御判讀なすつて頂だいね、またさし上るつもりですが、これにて、川田益が終りかもしれません、ではおしき筆止めます、さようなら御身御大切に。



午後十一時　芝　久佐ふね子

疲れた人と云ふやうな影があつて、花やかな心持が少い、今少し積極的ならんことを望ましい（記者）

○女かみゆひ

多都子

雪見町から北に折れた小道を行くと瓦斯燈に女髪結細貝と書いた小粋な一軒家がある女主は至つて心の優しいおしのさんといふ三十八の後家さんでお初と呼ぶのは先夫の忘れ片身で花恥かしい十七であつぱれな女髪結にならうとて只一人で上京した氣丈者である。

お初さんは顔だてこそ小町式でないけれどさてどことなくきついそして世事にたけた方だつたけれど十二三まではお稽古にいつてても「忍ぶ戀路つて人の名だらうね」なんて無邪氣なこと言つて居たそれが今年の一月に二三年前からおしのさんの留守に秘密でパテンを縫つて貯へた十

圓といふ金をおしのさんに出して「どうか東京でうでを磨いてかんばんの女髮結になりたい」と無理に願つてとう〳〵上京してしまつた今はあちらでも有名な師匠のもとで「お前たちは早く亭主を持つ氣になつちやや出世が出來ないよ新橋のおあひさんのやうに女一人のうでで苦學生の五人や十人背負つて立つやうな心掛けで働かなくちやためだからね」的の敎訓のもとに日々精勵してるさうだ先達つておしのさんがこんな手紙を見せたつけ「お母さん御無沙汰致して居りましたがお壯健でせうね私もいよ〳〵江戶子になるつもりで一心に働らいて居ります近頃は仕事もだいぶ慣れ師匠のおかげで〇〇公しやく樣や〇〇子爵などそれはそれは賢家に居ては夢にも見られぬ立派な方方へ出入ができます特に大森〇〇公爵樣からは御ひいきをかけてお前にすいてもらうと大層心地がよいからいつもうちに來るのはお前ときめておゝき」つてうれしいお言葉をいたゞきましたお母樣も喜んで下さいそして土臭い田舍を引き上げて早くこちらにお出でなさい

私はこの手紙を讀み終つた時身をそいでも吾が子のために貯金して末をたのしんでるおしのさんと決心のかたいお初さんとが常になくこのましかつた

これは事實として觀る處に面白みがあるのでせう(記者)

○塔に昇りて

大阪市　杉山花枝

午後四時、今日も私は五階塔に昇つた、何故こんな處がそんなに懷つかしいのでせう。

黒煙みなぎる中の榮華の巷、百幾萬の人が毎日生存をあらそつてる文明の都會をたゞ一眼、僅かな眸の下に見下す時私は自から頬に上るほゝ笑みを禁じ得ないのです。東西南北、思ふがまゝに目をやる。

つい向ひのかなり廣い宜き地に建物が建つのか四五日前から石を運ぶ木を運ぶ、人が集まる、昨日はトタン張りの屋根の職人が小屋の樣な物も建つた。

今日見ると十數人の大工、木挽が來て居る、木挽は大きな鋸を重もさうにもしないで太い木を斜に立てゝひいてる、何だか妙なふしの譯の分らない歌を、歌つて一生懸命、鋸を押す時はずつと腰をのばし手許に引く時は腰をかがめ、面白いスタイルだと思て見る。大工の方は木挽が挽いた木をカンナでけづり墨でシルシをつけて穴を開けたりなぞして居る大工がシユー、シユウ、とカンナでけづつて行くと、カンナの上から押し出された樣になつて木の皮が出て來る、パツと拂ふと大工の手や足へ一ぱいに落ち散るカンナ屑、巾の細い長い丈長の樣なのもある、薄い廣い白紙の樣なのもある、小さい大きい、あたり一面シラガの山、木挽の鋸を引く度にハラ〳〵とこぼれ散る鋸屑と共ににぶい黄な色彩を放つて居る。

モシ〳〵龜よ――、可愛い聲がおぼつかなく聞こゑて來るのでふと下の通りを見下すと學校歸りの小供が三伍、尋常一年生か二年生位いたらう、何の罪も無い物語りを續けて行く。あの小供の中には未來の大臣もあらう、又天晴れ將軍となるのもあらう、そして又あの向ひの空き地で働いて居る大工、木挽に成るのもありませう、けれどあの小供等は自分等の將來がさまでへだてがあらう――とは決して思つて居ないでせう。

只お互に桃太郎さんの樣に强く、龜さんの樣にたゆまぬ人と成らうと皆同じ理想で居るだらう、と思つて見る。ワイ〳〵、何か高調子に言ひ合つて紡績歸りの、職工の群れが通つた。重もさうな荷をかついだ八百屋の小僧、飫やに氣取つた紳士、うつむいて考へ〳〵行く若奥樣。吹き

から次ぎと異つた人が通つて行くのを、私は譯も無く、なつかしい物に思つて、來る人〳〵を見迎へては、見送つた。何だか仕舞には自分の織人でも來る樣な氣持ちで、一人も見のがさず見て居る。三軒屋の紡績からボーッ、と一聲、何百人の勞働者が生活に勞かれた、うめき聲を一時に發した樣な、汽笛が響き渡る。

茅海の浦に沈みかゝつた夕陽が、パツと射て向ひの空き地の職場のカンナ屑と鋸屑が光つた。

午後五時――。

折角、五重の塔のやうな高い處へ昇りながら、高い心持も、大きいものも發見しなかつたのは殘念でした(記者)

○寂しい日に

苔の花

日本原野で騎兵の大演習があると云ふ、今日は千人許も通つた、確か十五の時だつた、家の前を馬に乗つた人が一日續いた事がある、兵士を見るのが始めての私は小さい胸を抑へて夢ではないかと思つた、裏の池のほとりにも鎭守の森にも勇ましい軍馬の嘶きが聞えた、宅は大隊本部とか云つた、豪い人ばかりには違ひないけれど尊い父樣を主人主人などと聲高に呼びつけるのが堪らなく憎かつた、怖がつて逃げる袂を捉へて綻を縫へといふ、中へ入れば襖をしめられるかと敷居の上にそつと座つた、孃さんはいくつかねといふ、はつとしてお下げの頭をかしげると別品だがまだ駄目駄目と目で笑ふ、恥かしさと恐ろしさが一緒になつて目がくらむ、手が戰く、膝の上のシャツを其儘走つて母の袂にかくれたのも覺えて居る、大學に遊んでゐる人が軍人になると云つた、軍人なんていやとつい口がすべつたら何故と問ふ、默つて居れば肩をゆすぶり手を捉へて云へとせまる、軍に行くものと微笑めば僕は行かないよ醫者だからと云ふいやな事つた、お醫者さんの兵隊さんなんて見たくもないつて逃げたら眞赤になつて美いさんのお世話にはならぬといつた、春やむかし四年ぶりで始めて逢ふた人は大尉とか云つた、ちつとは昔の事をも思ひ出しなさいますかとさりげなく、ちつとも、と答へて向ふは平氣、それぢやもうお歸りにはなりませんねと笑へば、先ず十年位はと誇り顔に云ふ。月やあらぬ。

幼き日に兵士の宿をした時のことを想ひ出すところ甚だよし(記者)

○母を思ひて

朝鮮龍山　酒匂美子

冷氣を含んだ風が額の後毛をなぶり、今し方洗つた白のハンカチを吹き飛ばしたので、ぽか〳〵と暖かい夕日の差込む我室の窓に引つかけて内地の母樣へ手紙を書いた昨日出したぢやないかつて、父樣は御笑ひになつたけれども、私は毎日ひまさへあれば出し度いのだもの、いゝ出すわ、出さなければ何んだか母樣を人に取られる樣な、又見捨てられる樣で氣が氣でないから、馬鹿な、そんな事が有るものかと何者にか笑はれる、しかし或人は云ひました、身近く居る女は可愛くて遠く別れている子は可愛中にもへだてがあつて、忘れるともなく忘れる、あゝ何んと云ふ慘酷な言葉なんでしやう、私は死の宣告より未だ悲しい、私の母樣に限って決して〳〵其樣な冷やゝかなんではない。とは申すものゝ先日の樣に、美子さんは母樣ないのつてね、あらさうだから父樣と二人きり來てるんですと、なんて友の同情ある言葉を耳にした私は云ひしれぬ淋しさをおぼえた、皆母樣が渡鮮遊ばさないからなのだ、母樣は何故いらつしやらないのだらう、出來ないとは知りつゝも、御母樣に御目に掛り度

うございます、私は毎日此頃古里戀しさに、只一人漢江河畔にさまようて思ふさま泣きます、母樣何卒、猛虎うそぶく頃朝鮮に、淋しく暮して居る子あること忘れ給はず、たまにはゆめになりと見て下さいまし、それが私の御願ひでございます。折柄パツと點つた頭上の電燈に、ハツと我に返つた、折しも四時半を報ずる工場の汽笛に和して、はるかに仁川に入港した氣船の氣笛が、かすかにボーと、ひゞく、あゝあの船に乘つて歸り度い。

朝鮮も今は吾邦の内とは云へ、遠く隔つて居れば、此悲みも尤もである(記者)

○別れの曲

靜岡縣　壽　賀

北の腰高の窓をいつぱい開ける。廣々とした田に春から秋まで赤いたすきかひく〳〵しく白い手拭姉樣かぶりの里小女があそこ此處に見えたのが今日此の頃は一人も居ない一二寸のびた麥が薄青いばかり、堤のすゝきは枯れ〳〵に殘つて居る。遠くの山は淡くかすんでどんより曇つた、丁度春の花ぐもりの樣な日だ。

メリンス友禪の小供被布を裁縫室で敎へ子の歸つたあと獨りでじつとして縫つて居る、それでなくてさへ裁縫室には不向な光線の少ない此の室ことに曇り日と來てはうすぐらくていやにいんきな事言ひ樣がない。「……師の君よしやへだつとも――」唱歌室から靜かな調べがひゞいて來た美登さんだらう、御送別の歌だ私も今年の三四月あたり可愛い子供にあの歌で送られるのではなからうか。忘れもせぬ去年の四月七日東庭の一重櫻がさう〳〵二三輪咲き初めた時だつた、花のかげに小川の流れを何の氣なしに見つめて居ると、

「いよ〳〵今日はお別れですね」

となつかしい友の聲がした、ふりかへると昨日榮轉の辭令を受取つた君は服を改めて立つて居る。何ともいへぬ思ひが胸一ぱいになつた。

私が此の學校に來てから三度櫻がさいた其度になつかしい友は一人づつ去つた四度目の花も今に咲く今度は今度は誰れだらう、若し自分だつたら――あゝ「しーのぶーとすーれど」――またあの唱歌を、――美登さんもやつぱりあの頃が忍ばれるだらう、「忍ぶとすれどかにかくにせきくる涙――」のあたり日頃强い君もポケツトに手巾をさぐつてうなだれた。それは今日の樣なうすぐもりの日だつた。

式が終ると四百に餘る兒等をつれて村はづれの永い橋まで送た。いつまで送つても名殘りはないけれどいざ別れやうとして幾度御きげんやうをくりかへしたらう期して居た事だけれどいざとなると別れは悲しい。

不意に列をはなれてふり返つた高等の男生二三名君が受持の生徒だ列をはなれたをいましめる勇氣もなく共にふり返ると今家のかげにならうとする所で君もふりかへつてじつと見て居る手巾ふると君もステキをさし上げた樣だつたか君の影は見えずなつた。

あれからもう一年いつのまにたつたらう「紅葉に花に折をりの便りは絕えず――」といつて別れたけれど雨にも風にも音信はなかつた年賀狀も只だ一片の葉書人は皆こんなだらうか。

人になじめぬ私には一度打とけた君を永久に忘られない。美登さんと二人此處に裁縫して居ると此の窓によつていつもいろ〳〵話して下さつた、美登さんは君の敎へる、同じ年配の私、二人ともはじめて立つた敎への庭、あやまちは身一つに引き受けて、かげになりひなたになり、助けて下さつた君、どうして忘られやう、君は兄と同年性質も似通つて居る君ちき言氣が荒くなるので美登さんと二人で、どんなにそれを、うれ

えたらう、君去つて後も二人よると、きつと君のうはさをした、あゝ美登さんさへも私一人をおいて來ん三月には去るといふ、別れはどんなに悲しからう別れても永久に交はる忘れはせぬ、と言つては居るけれどおそくか早くは去年去つた君の樣に「今ははや音信もせぬ――」といふ人の數にもれずならう

「――便りは絕えずたびねかし」美登さんはまたあれをやつて居る

同僚の轉勤を一大事のやうに思つて泣いたり悲んだりしてるうちはいゝ文章の書けよう筈がない、さとれ〳〵世は今春である(Y)

○U子さまに

なでしこ

U子樣、お手紙有難うほんとに妾御無沙汰致しました、御恨みは御尤ですがどうか赦して頂戴ね。貴女のお手紙を見ると以前が思出されて成りませんの、幾年經たとも知れぬ下鴨の森の中、踏めば消えさうな若芝の萌えた上に坐つて、無邪氣な口で未來を語つたのも貴女。友禪洗ふ加茂川のちよろ〳〵流れの間に、僅に葉を出した蓮を摘んで、お團子を作つて貰ふと悦んだ事も有りましたね。朱の柱に碧い瓦の大極殿や、動物園へ入つて小猿の春の日の長ける迄も知らずに、遲く歸つて叱られた夕も有り。霞の面帕を冠ぶつた樣な淸水寺へ詣ると云ふて轉ぶと三年の中に死ぬと云ふ俗說の有る三年阪で、手を引いて恐ろしがつて上つた日もありました。あゝ追懷しますと夢の樣ね、暫くお目にかゝらない內に、大阪へお嫁入りになつたと聞いて、若い若い主婦振りを見せて頂かうと思ふて居る內、一昨年のあの大火、續に狂ふ人の血の燃ゆる樣な勢に、貴女のお宅も全燒の悲慘な運命、其後事情で新明の家を離れて今の寄生木の儚ない御生活を思出すと同情の涙に暮れますの。妾の生活は實際平凡で相變らず宅に淋しう雜誌や朋友の手紙をば、唯一の慰藉として居りますのよ。あゝ老た冬は力無く荒むだ山に退いて、季節丈は春が又參りましたね。四



お客様　金澤　西本芳子

月頃に一度入らしては如何ですか、浪花の櫻の宮の散漫的なお花見や、造幣局の錦繪の様な濃豔な櫻も宜しいでせうが、古典的なお室嵯峨の花見や、桂川の流れに小舸を浮めて、散々花の間を縫ふて温泉あたりまで上り、又は小督の局の遺跡や野宮の舊跡、偖は祇王寺などへも行つて昔の夢を偲び、夜は祇園の夜櫻に満市の人が熱狂するのを見て、お互に心を樂しもうでは有りませんか。

餘寒が酷う御座いますから御身大切に、左様なら。春雨煙る日、瓦斯の灯青き下にて、T子

上手すぎる、も少し人の惡い所をまぜる事(Y)

○人の結婚日記

紫白女

M氏は某省の腰辨猴猿と肝癪で非常識な事話にならぬそれで妻君も今度で三度目友人からは又妻君に逃げられる様なら絶交だと迄云はれた今日は、其結婚式、M氏の家が狹いので私の座敷を貸す事になつた午後五時輿入と云ふので四時過ぎから香をたき待てどもく音もなくM氏先着茶　間で雜談中M氏のフロック姿を無視して「君すつかり風采を上げたな先生の頂戴たね其ネキタイは君のか」と半ば笑ふが如く尋ぬれば「イヱ何是も先刻奥様から拜領したのですよ」と大眞面目「ウム君は幸福ちや忘れない様にしつかり家庭を作れよ」と大兵肥滿の體をゆすり上げて笑はるゝをかしさなれど此音樂の中自ら友情か籠て居る七時になつても嫁君が見えぬM氏は遂に待ち切れず鳥渡門迄ゝ部やを出て行かれると同時に「お見えになりました」と女中が知らせて來た、何氣なく玄關の隔てをしめた行くとフト嫁君の立姿が我目にふれて心の絲に通じるホ、、、と笑ひ度くなるあはてゝ茶の間に歸ればK氏は俯目になつて歯を食ひしめ顔を赤くして居られる漸く押へたをかしさが一時に込み上げて笑ひ出せば父君も「見えたかくT式が」と被仰る「イエくなかく」と云ふ折柄入り來給ひし母君「何くどんなお顔」と被仰る何と答へんをかしさにたゞくしやくと目鼻よせて見せ參りければ皆々得堪へずクスクス笑ふ處へM氏仲人と來られたに笑ひを飲み込み向き直る結納とて末廣樽熨目錄を差出されたそれに御婿殿方のは手土産なりとカステラやビスケットの小箱ふるつた物なりそれでも末廣一對づゝ添へたるがしほらし。母君と時刻を見計らふて挨拶に出る嫁君はと見れば黑と白の三重ね迄はよけれどよく錦繪で見る如く長襦袢を膝の半迄出して褄を左右に思ひ切り開き座られたるつとかき合せ度思ふた座中の話は總べてお國自慢に満されて十一時お開きになつた

輕浮(Y)

○幻

越後　島田てと子

雪ちらはらと降る夕、かるた會に晩くなつたので歸りはもう夜に入り此夜はことに淡雪にほの暗たちこめて、店の電燈や瓦斯燈まで、朧ろに美しく光つて居る。往來の人や織車が、幻のように顯れては、幻の様にほの暗き雪霞の中に消えて、其姿も其影も俱に夢とうずれ行き。今宵遇ふ人は皆何にか樂しい思ひに憧れて居る様な氣がして我も夢心地に足許のみ見て歩いて居た。春日町の邊りに來たと思ふた時。ふと前を見ると高髷の頭を稍やうつむき加減に行くうら若い姿が目についた、白い頸に火影が美しくさして、華やかな友仙の帶を高くしめた姿が云ふ計り無く嫻妍で步む度びに帶上の薄紅搬の緋縮か艷に仄めく様をじつと見て居る内、とある横町の邊へ幻の様に消えて仕舞つた――

彼の夜より後は一度もあの、美しい人の姿も見た事はないけれども・記憶にはありくと殘て幾度となく思ひ出す顔さへ知らない只幻の様に見た……

それはなぜたらう、着物が素氣ででもあつたのですか(Y)



初作

編輯局選

○誕生日（地賞）

東京府荏原郡目黒村下目黒九五五　榎本文江

花咲く春は四月も半ばゝ十三日、朧なる櫻月夜の天も地も、にほはしく霞む時、幸あれと多くの人々に迎へられて私は生れたのであつた。

夕方お湯から上ると、母様が、「今日はお化粧をおしよ」と仰しやる。「何うして」と伺ふと、まだ姿見の前に、タオルでふいてゐる私を上から見下すやうにして「お前のお誕生日なのだから、綺麗にしてごらんな」と、にっこりなさる。「さうね」と、こなたもうなづいてほゝゑみながら、りゝーをぽつちり掌へベルッ水で溶いで、ゑりから顔へむらなく刷く、髪は母様が結ひ直して下すつたマーガレットにリボンはひろいクリームいろ、姿見の前に立つて見たら、赤い半襟と、紫友禪の被布と、リボンの色とのうつりがよかつた。

夕飯は、庭の櫻の大木の下に、椽臺を並べて、父様と母様と共に盃を取つた。母様が、お志の赤飯、出世前はぜひつけるものだと云ふお頭付きのお魚も、お皿へつけて下すつた。父様は、微醉の頬に輕く笑をたゝへて、「美しうなつた」とほめて下さる。「お化粧するとやさしくなつてほんとにいゝよ」と母様もおうれしさう。

見上げる梢は、今が眞盛りの櫻の色、ほのかに香つて、咲きも遅れず散りも初めず、暮れそむる夕の中に、一きはあざやけくにほふ。和やかにたそがるゝ空の果て遠く霞立つ氣勢に、紫の雲棚引いて、重くひいてくる鐘の音も、しづかに温い。「あゝいゝ夕ぐれね」と立ち上つて空を仰いだ時、何とは知らずうれしさが胸にあふれるのであつた。

庭の櫻の大木の下に、父や母と團欒を共にして誕生日を祝ふと云ふそれだけ聞いても感興が湧くのに、文章が好く出來てゐるから、なほ際立つて深い感に打たれる（評）

○或る日

名古屋　すゞ子

今日は此頃にないあつたかい恰度三月頃の樣な日である、あまりよい御天氣なので机にむかつて居る事もいやになつたので妹をつれて姉の宅まで遊びに行かうと思つて家を出た、道をあるひて居る人は皆あつたかひのでのび〳〵としてあるいて居る樣に見へる、自分も其の一人かも知れん姉の家に行つたら恰度姉の御友達が御出でになつて居た、幸と思て早速に話しの仲間入をする、妹は姉の子供と一所にうらの畠の方へ出ていつた。

姉様達がほんとうに學生時代ほど愉快なたのしい時はない母様や父様の御側にゐてたゞ學校へさへ行けばいいのだものとほんとうに學生時代程安氣な時はないと御いひになるので私がそれでも仲々と苦勞があるのよと言へば姉様達てばはあちやんなんかの苦勞はしれてゝよ試驗の時のことか成績發表の時の好いか惡いか位を心配するにきまつてゐると御しやるので私がこれでもそんな事位ではないまだ〳〵仲々あるのよといつたら姉様達が大わらひをなすつたほんとうに人妻となるとどんなに苦勞

がある か知らんと思へばおそろしい様である
あまりに話しに實が入つて時のたつのも知らなんだ、外を見れば日は大分西の方にかたむいて居たのでまた母様にしかられるといけないから御いとまして歸つた、ほんとうに今日たのしかつたこと
如何にも苦勞さうに書けて居る(評)

○雨の夜

堺市　篠　子

淋しい雨の夜であります。夜もはや十一時過ぎた頃でせう。世間は森として居りますがまだどこかに晝のさわがしさが殘つて居る様に思はれます。前の井戸のトタン屋根には、雨のはね返される音が聞えます。長い事雨が降らなかつたから、雨と云ふ思ひは薄く煙の様に頭に殘つてありましたから、何だかなつかしいやうな氣がします。ほの青い庭には白薔薇の花の頭重たげに、うなだれて居ります。でも他の木の葉はいきいきと雨を思ひきり吸つて居る様に思はれます。今私は君にさし上げる靴下を編んで居ります。一しきり音を立てて過つた電車のあとは、又靜です。あゝ又雨がはげしくなつて來たのでせう、ザアーと窓うつ音がはげしく聞えます。其の中に時々皆の寢息がかすかに聞えます、寢息がみゝには入る度にぞつとして、何だか恐しい者でも後からおそつて來る様に思はれて、私は思はず身慄をしました。
今一いき(評)

○兄さんと御一所に

土佐　かげ法師

いゝ着物なんか、と言ふもの〻、着て見ると殊更惡い氣もしない、鏡

の前に立つて見つ、居て見つ思はずニツコリ「やあ之は立派……希くは春もう二寸」いやな兄様、あらそんなに成つたらお多福が猶目立つわ、口惜しまぎれにへらず口言たものゝ心で泣た、私を此様に生で異た母様が恨しい、門で祖母様が「これ春、下駄をはいたらこう内輪に歩くものたよつて、でもね、外輪の女は骨盤が開くからお產が易いと云ひますよ、「では行て參ります」「孫さんよろしくたのみます」春姉様によろしく、急で兄様の後について行く、道端に遊んでゐた子供がヤア、ハイカラー皆でてがつてやれ、一二三、あつぱいこつぱい姉さん、後からみゝずがはひ上る、たなんて私はり飛してやりたかつた、車夫が、奥様お安く參りませう……一寸兄様のお顔を見た、聞えぬか平氣の平左、電車に乘る、皆の視線が、一時に此方に集たがすぐ又散つた、私の向に、顔ばかり白い物をはつて、ヒビたらけで柿の根よろしく、と言た様な大きな手を、小い袖口から、ニユーと出した田舍のベツピンさんが二人、十八世紀の紋織東コートを着て、お行儀よく澄してゐる、自分では隨分ハイカツタ者たらう、噫私も來年は都に行く、あちらの人の目にはやつぱり此娘さんの様に寫るのかと悲觀した、本町お下りの方は……あつしまつた、一町後戻りかつて、急ぎ飛下る兄様・私も大急で……女子部の前を通る、今盛にテニスをしてゐる生徒さん、白粉禁制たとか、皆生地其まゝ、一人としてすき通る様な色のはない、○○先生が土佐の女は色が黑いなー、つて言はれた事を思出した……いつの間にか淋しい町に出てゐる、此所たよ姉様所つて冠門の前に直立不動した兄様の眞面目さ、お可笑くてつひ「力彌さんのお宅はもうこゝかへ」とやると「わしや、ふこじりで恥しいたらうつて、ホヽヽヽまさかねえ……
四國にも斯う云ふおてんばさんが出るから、女學校も大抵なことぢやない(評)

○春の夕

横溝たま子

燒書の切ばちをイナツクアーデンの十二頁に挾むで本立に入れた、そして机の下に落てる辭書のGの所を拾つて其所に締めるのでもなく、いいかげんな所に突込むで、硯箱の上に載せて、自分は疲れきつた眼を漸く机から離した、春の日は向ふの工場の彼に落ちて、紫紅色の光は硝子戸を射て、西洋間の窓から流れ込む壁に懸けられた歐米美人クイナーと其下の小さい額なる在米中の藤子の君の寫眞のみ浮いて見える、外は薄黑いベールに蔽はれた樣に只ぼんやりと。

いつか自分の心は其壁上の藤子の君へと走つた、彼の君去年のたしか如月三日と思つた、日本波止場を發したのは自分は花束を持つて送つたそして、アーネーではないが船の小さなピンクの巾の見へなくなるまであの棧橋の欄干にもたれて、人目もかまわず泣いた、親しい中であつた然し運命の神は此二人の絲の糸をどう絕つたものか、近頃は梨の礫である、此春彼の君は十八の花なる君を迎へたのだ、自分よりは二つ姉であるが、心はいつも無邪氣であつた――あゝ然し悲しいのは彼の君の繼母義兄……

○逃げ口上

佐波わくらば

「叔母さん随分だわ、お蔭で通り名が鑵詰娘、いくら私だつて少くは空氣にふれますわ」いらつしやる度毎に御恨み申した私、よくは覺えて居ないがたしか二月の中頃どんより曇つて頭がおさへつけられる樣な氣がする日、今日こそと只一人畔道をぼく〳〵と歩きながらきく〳〵ともなしに耳を傾けると夢の音!「淡路島通ふ千鳥……」のすゞしい御聲さつと美音さんだわ、

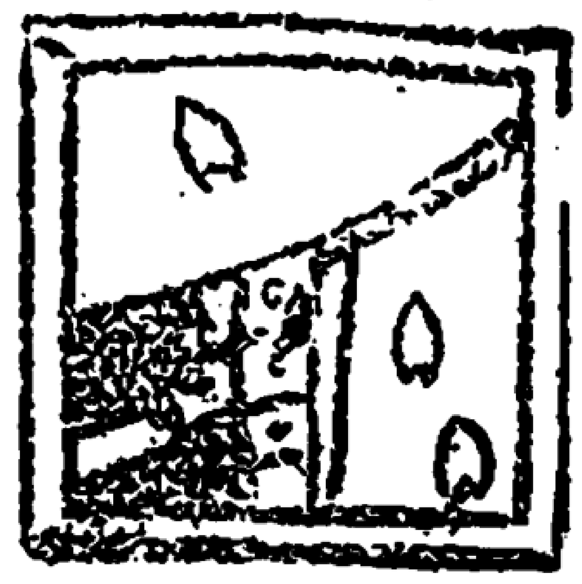
あゝ千鳥、七日の月の影淡く松が枝にかゝれる病む姉樣と離室であはせたつけ、あれから七十五日たつ今日姉樣はもう黃泉の世に……いつになつたらあんな樂しい合奏が出來よう、寒い風が一しきりふいて鵯鳥一聲高く……ハツと我に歸ると頰にはあつい涙が……

「ホホ、ホイ」十四五の男の子が牛をひいて來る、いつの間にやら私は廣小路へ出て居た、右へ曲ると藥山醫學士の御宅門前にお婆さん一人、訝しく思つて見て居ると一錢銅貨をなげて手を合せた、銅貨はカチリと音をさせて植込の中へかくれた「氣狂ひ」忽ち頭の中でかう叫んだ、足はしらず〳〵の中にお婆さんに近づいて結んだ私の口びるは開れた、

「お婆さんどうなさるの?」見かはす眼と眼、氣狂ひではないらしい、さては問違ひかと氣の毒になつて「お寺ぢやないのよ、藥山樣つて御醫者樣よ」大波小波打ちよせた御婆樣の顏に忽ちサツと紅が走つたが、すぐ元に返つて、「私この御醫者樣で風がなほりましたので……」まさか、石の門がまへに奧まで切り石しきつめて田舍には一寸めづらしい建物、玄關にかゝつてる表札の讀めないお婆樣はきつと御寺とまちがへたのだらう、それにしても近頃奇拔な御婆樣の逃口上よと私は笑をかみしめて別れた。

はつ蝶の夫婦づれして來たりけり
菜の花の中を淺間のけむりかな
蝶とまれも一度とまれさかづきに
小便を致しながらも啼くかはづ
鶯も添て五文の茶代かな
山燒の明りに下る夜舟かな

一茶



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）
戀衣重たき春となりにけり　上總　篠崎和子

○（地賞）
白梅の髪燻べたき匂哉　兵庫　笹舟

○（人賞）
流れ行く如き島あり夕がすみ　三田　白菊女

佳作

水仙の庭寒山につゞきけり　千葉　美溪子
餅燒て君が門出を餞けん　福島　三田さでと
筒井筒深きむつみや雛の友　西多摩　岡野よね子
牧守が眠がる麓や揚雲雀　芝區　古和田徑子
駒止めし武者の笑顏や山櫻　淡島　田山清子
板塀の樂書よまん春の月　淡路　宗原美津子
紙漉場とて日あたりぬ梅の花　愛知　けい子
梅雨はれて衣乾す程の日向かな　大阪　岡本春子
ぼんぼりの淡き灯影や桃の花　山城　木の花
鶯の初音ききたり森の中　美作　水田邦子

寒月に横笛の音もしたりけり　札幌　佐々原清子
例返る仁王の腕や玉あられ　福井　明星
紅梅や宮腹座す比丘尼寺　京都市　中野絹子
植えかへし梅の一木や二日月　大阪　秋海棠
朝雨霽れて緋桃の雫かな　備中　小見山春子
丸木橋還ふて渡るや朧月　愛媛縣　高井壽
夕榮や五色の雲も春の京　新潟縣　岩井常子
春の夜や女に似たる男の子行く　讃岐　雪子
掛茶屋のよしずに淋し春の雨　大阪　岡田雪子
土手一里廻れば遠し梅の村　茨城　浮舟女
廢院の午寝としづ桃の散る　本郷　花岡千代子
御簾上げる少女のすや梅の花　山口縣　野の花
白梅昨夜の雨にひらきけり　神戸　足立春子
玉を磨く手に知る水の温みかな　岡山縣　入江曉花
潮明が岸も柳も春の風　上總　K・S子
うなだれてなまめかしさよ紅さうび　靜岡縣　齋・賀
春の灯の歩けば動く局かな　深川　佐久間貞子
隣りから餅もらひけり桃の花　千葉縣　石井はる子
遠山は霞し彼岸の鐘がなる　千葉縣　石井せき子
野遊びの小袖は寒き日なりけり　千葉縣　齋藤清子
牛部屋のうしろ桃咲き鷄が鳴く　千葉　叶屋るり子
蛾來く濱街道や夕時雨　諏訪　月見草
紅の袖ひるがへる加留多哉　鳥取　櫻草
家一つ灯をともしたり霞の中　備前　させい女
鶺鴒や古池底の田となりて　淡路　山川しがらみ
電燈や青柳の町美しき　淡路　柏木よしみ
雁ゆくや晉我の里人偲ばれて　信濃　岩波むら子
繪皿洗ふ紅の雫や春の水　大阪市　佐川かをる
琴の爪はづして屠蘇のお酌かな　近江　田川優子
夢醒めて夢に入りけりおぼろ月　廣島　後藤壽美子
春雨に永〳〵し夜や旅日記　横濱　望月久江

佛の忌今日は佛の供養哉　横濱市　山崎朱星
彼岸會の施米袋や寺の門　横濱市　山崎絲子
春雨や物嬉しげに木の芽ふく　備中　雨の花
花紺々君とわかるゝ夕べ哉　伊豆　土屋いそ子
春の日や負ふた子立たす石の上　麻布　小倉ふみ子
三人が笑へば梅の佳節かな　信濃　百瀬わか子
白桃に戯とる人の唄榮えぬ　上毛　野の花子
對の髪對の小袖や梅見人　長野　水野小百合子
人の許に旅立つ夜の吹雪かな　信濃　白菊女
大路行く馬上の人や花の風　岡山縣　さゝなみ子
狼の遠ぼえ絶えて霰かな　淺草　ゆふづき
花誘ふ嵐に疾し駒の足　山口縣　大谷靜子
一合の酒に酔ひたり春の辻　甲斐　忍子
嫁に行く人みてありぬ秋の暮　岐阜　葛の葉
窓の下に蛇の目なつかし桃の花　石川縣　山田松子
人しれず御簾まき給ふ春の人　京都市　河野きさ
春雨に酒强ひられし女かな　麹町　牧野嵐水子
春雨や水車のめぐる野の凹　麹町　牧野峡川
老人の綱繕ふや桃の家　山梨縣　鹽谷とみ
眼を病めば灯も悩きに千鳥鳴く　伊豫　高橋踏隣
春淺き窓を洩れけり筬の音　大阪　田野靜子
明神の松風くらし明の春　越後　藤原竹子
小坊主の詩を吟じけり春の宵　深川　山田花子
小式部や篠に小鍋の主人振り　駿河　勝俣和子
梅咲きて機おる人の歌の聲　金澤　藥末子
元日にとるや小袖のしつけ絲　近江　田川きり子
食ふことに傾く冬の心かな　近江國　中川つる子
何事もならでゆく年尚淋し　若松　櫻月
黄昏を訪ふ光氏の頭巾哉　日本橋　松岡千代子
元日や洋々として松の風　越後　森山木
千鳥なく聲も聞きけりわれ病めば　京都　要司村霧子

春の月人形ねかす小唄哉　横濱　吉岡雪江
われも白き蝶と化すらん春の宵　神戸　森本豊子
煩悩の花の都よ鐘が鳴る　廣島　香川玉子
月更けて屋根わたるなり猫の妻　神戸　山口房子
拔て見る古刀の錆や水仙花　大和　湖月
春の雨わがまゝごとも暮れにけり　横濱　臼井ひで子
むさしのに我住み居れば蟲の聲　淺草　夕月子
鉦た叩く男や春の月　麹町　牧野銀杏
長閑さや桜咲く家に將棊して　新潟縣　岩井常子
噛み裂きし戀もありけり春の文　麹町　牧野銀杏子
春風に尻ふりたつる子馬かな　麹町　牧野鳴風
唯月の冴えわたるなり冬木立　千葉　みつ子
ほとり〳〵雨戸の音や雪の暮　千葉縣　松ヶ枝雪子
朝寒や人も通らぬ枕橋　千葉縣　野々宮いは子
椽先に茶を挽く僧や枇杷の花　千葉縣　三橋愛子
秋の月猿橋渡る女あり　三島　村瀬紫子
柿一つ落れ行く秋を惜みけり　鳥取　櫻草
白粉の女の顔に夜ぞ長し　新潟　水澤蝶子
春の月大宮人の長湯かな　越後　伏見英美子
庭講主人が誇る大鼎　越後　藤原竹子
秋の夜の首に冷たし塗枕　三島　曉村
鐵橋に女の影や春の月　大阪市　辻井信子
深川の慮は空し月時雨　越後　藤原鍋女
かき鳴らす琴の亂れや萩の雨　下谷　谷口桂子
蓮帆や利根川下る秋の人　千葉縣　スミレ
華さとき盜師が小窓や白芙蓉　伊豆　土谷壽々子
朝寒や吃る男の顔可笑し　新潟市　吉田歌子
絲萩の雫と申せ傘の人　越後　藤原鍋子九
淋しさは一人立つ野の案山子哉　越後　薔天子
焚きすぎて已れも聲く蚊やり哉　越後　まさを子
絲萩の花には重し今朝の露　越後　月子

評壇

記者云ふ、氣焔は姫御前の身のあまりに露骨ですから、評壇も改正しました、本誌の批評、世間の批評、婦人界の批評、凡て忌憚なき快活なる文字を歡迎します。

▲二三日前に受取つた第一増刊、『婦人ノート』たき火するはたではこりや煙に涙をこぼして笑ひながらもよみました、御臺所でこんろをあふち乍らも讀みました。道を歩くとて人の通らぬ處でなら立ちどまつてまでも。けれどまだ全部よんだんぢやありませぬからめくらの何やら覗き位ですけど、心覺のまにく。表紙といひ、口繪といひ、すつかり人物がはぶいてあつたのが、第一垢拔けがした様な氣がしました、塔の十四景、なんていゝんでせう、聞がちやありませんよほんとにいやみがないわねえ、だいぶんとんだりはねたりしてよみましたが、等級のところみて一寸びつくり、ましを様の第一等はよいとして、松㳺様の第二等は四拾五入かしら、をつとこれは申過ぎ、宿舍に入る友に、また仲々注意周到、實際いゝ御教訓ですこと、滑稽ノートお腹を抱へ出したの皆が、私のよむのをきいて居て、私いつも默讀ですけどこゝと化粧の仕方の處はことさら朗讀してやつたものですから、しゝつ鼻の人や、おでこの人や口の大きい人はつて、Sの姉様はね、華ちやん、とよと私と華ちやんと三人のためにかいてあるぢやないかしら、おほゝゝあはゝゝぢや私こんどから肉類澤山たべない事よ、私熱いお湯なぞ御免するわ、つて隣りへも面目ない位笑ふのでした、どなたでしたつけ、對話に誌友の惡る口書いた方は、貴女も大膽ぢやありませんか、私なぞ伺つてさへ、梛子さんだと他人に話したりしませんでしたに、白山吹さんの苦痛談私も新聞記者はどうのこうのなしに活氣に滿ついゝものだと計り思つて居ましたが、立ち入つてみると左様でせうね、和歌の名古屋の方はおつぎさんぢやありませんか、江森さんのはいゝのが多いし可愛らしい様です(くづのは)

▲『婦人ノート』に出た野の花さんの書かれたことは何處やらで見た氣がいたします、違つたら御免遊ばせ(深山櫻)

▲あまりに反感を抱き易いのが、今の若い婦人の缺點ではありますまいか、私は然う思ひます(H)

▲活動しさうで、しないのは大阪京都の誌友、皆様方何うなさいました(はな江)

▲女子文壇を讀んでる方を見ると、何處か氣高いやうで、外の婦人雜誌を讀んでる方より、未來があるやうに思ひます(よの子)

▲「婦人ノート」は私には方面が違ふようで投さへ出來ませんでした、ですからあまり期待もしませんでしたけれど、想像したより意味も深く面白くもありました。

一番先きに目についたのも若杉さまの「職業の苦痛」あらゆる惡しみにかつて自營の道を踏んでゐらつしやる、職業の苦痛もあることながら私はわが身を反省みてわがいくぢなしを恥ぢました。

磨志緒さまの「二つの生命」題が氣に入りました順境の君が第二の御自分達を待つお心はかうかと思はれて……この前の新婚當時の日記を思ひ出して君達の姿を描て見た。幸なる人よ。

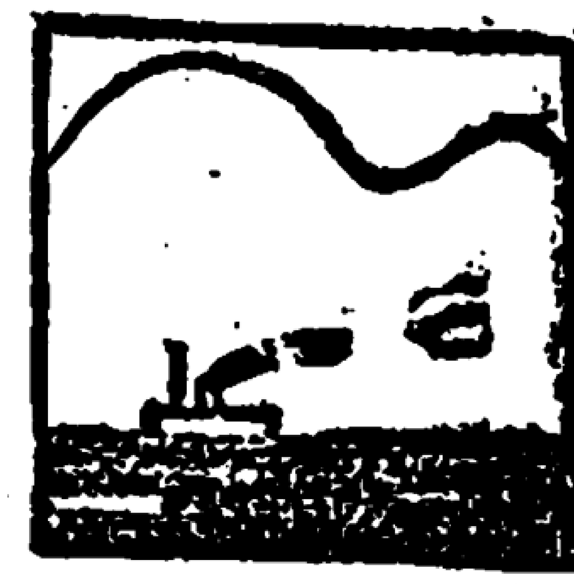
紫花さま、大切の祖母さまなくして御學びなすつた、雄々しきお心になかされますわ、これから針もつ妹達によき教訓一度と言はず二度も三度もよみまして見ます。

京子さまの『裁縫には機嫌がいる』は面白く拜見しました、羽織の衿肩を五分縫ひこんで拔るりの羽おり、私共の様な首の短かい者にはどうしても必要なんですから羽織たけでは困ります是非とも着物の拔衿のお仕立もおきかせ下さい

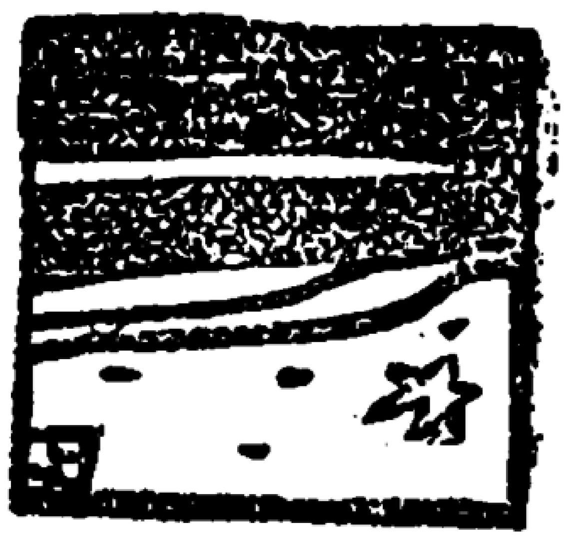
金田様の「詩を作る呼吸」はうれしかつた、二三回よんで考へましたが多くよんで作るもんなんでしたね、「あなたの讀む眼が全く低い、それで詩を作るのだから「現代的女」には感服する(これはほめたのである)」と日外夜雨先生に冷かされたことがあつたがまつたく讀まねばためだとするとまた新らしく責任を感ずる様で詩をかくのがいやになつた。

みどり、若き母、美智子、胡蝶さま方の御作は妻にも母にもなる概念をもたぬ、私にはすみませんがすどうりしてしまつた。

自己本位の考へかもしれぬがまた今のものではお芋の皮むくのもきらひです、さつき様のお芋の料理と御飯炊きにも失敬する、それでも女と云ふ名の下にやらせられますからこの頃は餘程上手になりました大根の千六本だつて、たゞの六本にしか切れなかつたのが、練習の結果十六本位にはきれますわ(谷のをとめ)



雜錄



○地方新聞婦人記者の勤めぶり

六花

△ありがた迷惑の西洋料理

今日は此頃にない好天氣、私等の樣な貧乏記者には持つてこいだ。早く支度して訪問に出掛け樣と平日よりは一時間も早く社へ行くと、例の口惡連中待つてましたと云はぬばかりに、ヤ、ヤ、御用心〳〵、折角のお天氣を宜しく願ひます……どうも今朝は妙に急がれたと思つた。ハヽヽ、何て頭から冷笑されちやつた。眞實新聞記者なんて云ふ者は口から先に生れたと見える。

○○さん電話です、と給仕が階下から呼んでゐる。トン〳〵下りて行くと今朝からこれで三度目ですぜ、何でも聲は男の樣だが、と妙な笑ひ方をして彼方へ行つた。失敬な奴だと思つたが、あんな奴を相手にするも大人氣ないと思つて電話室に這入る。電話は女學校の校長からで、今日午後から西洋料理の實習をやるから參觀に來てくれとの事、又眼の飛び出さうなライスカレーや、齒醫者のお見舞を受ける樣なビフテキを食はされるんだかと思ふと何だか嫌だ。けれども折角通知して呉れたんだから誰か行かずばなるまい、さうさう洋食好きの△△さんを遣らう、彼校の家政科を受け持つて居る先生は女子大學出で教育には隨分經驗もある人ださうだけれども、生徒の御料理と來ては幾ら御世辭にでも結構とは申されない。何時か生徒方の海老茶はいゝが御飯の海老茶はあまり感心しません、て云つたらそれから滅多に日本料理を出さない、偶に出すとしても五もくかおそば、ホヽヽ、學校で手打ちそばも振つてゐるわね……トン

トン階段を昇つて來た紋付羽織袴のお若い硬派記者、今日は面白い事件があるさうですね、と巻煙草を火鉢へ投げ込んで頻りに警察記事や裁判記事を見て何か探して居る。昨日も東京新聞を見なんだが何か變つた事でもないか知らん、と新聞掛けのそばへいくと、○○さんお客様ですよ、差出した小形の名刺は此頃訪問した洋行歸へりの某ミセス、直ぐ行きますから應接室へお通し申して……大分御多忙ですなア、と誰れやら言葉を脊中に應接室にゆけば、大分前に流行した紫紺色天鵞絨の洋服裳長に同じ色の帽子を載せて椅子に掛けていらしつた。淀みのないスラ〳〵した夫人の英語は有名なもの、私も少し英語の素養があつたら……と殘念に思ふ。――御用はと云へば、先日申し上げた談話は少し間違つた點が御座りますので……イエホンの少しですけれども、氣持ちがわるくて、電話で申し上げやうかと思ひましたが運動かたぐ參りましたのです。と三十分計り話してお歸へりになつた。あの夫人の談話は筆記しなければ駄目だ、今度は一語づゝ間違ひのないやうに筆記して來やう。

▲一度は美人と書かれたい

應接室から出會ひ頭にオヤ――ヤアと主筆先生の髭面に出會した。今日は十時から愛國婦人會の例會がある筈だから御苦勞だが行つて戴きたいとのこと、時計を見るともう十一時だ、遲くなつたが命令だから仕方なしに俥を飛ばすと、未だ開會前……習慣かはしらないが規則通りに開會したことは滅多にない。ひどい時になると十時の招待に一時頃になつてノコ〳〵來る人がある、暇な人はそれでいゝかしらんが私等の樣に忙しい者までその御招伴させられては堪つたもんぢやない。世話好きの連中はお茶よお菓子よと騷いでゐる。ガラ〳〵と俥の音がして支部長たる縣知事の夫人が見えると今まで賑かだつた夫人連が申し合せた樣にピタリと口をつぐんでお互に默禮し椅子など勸めてゐる。夫人は大分お化粧にお手間がとれますね――と帶の間から金側がパッチリ、皮肉な笑ひを浮べると、そんな譯ぢや御座いませんが出際に客に押しかけられて……と辯解なさるだけあやしいもんだ。以前は粋者だけあつて、いつお目に掛つても一絲亂れぬ大形の丸髷、野暮に深く挿し込んだ銀の平打ちがチラ〳〵と閃めく、つゞいて左の手のルビーが青白い指と一緒にあたりをてらす。開會したのは彼れ是れ正午すぎ、お恥かしいてと

だが私はお腹が空くやら、時間が遅くなるやらで一先づ先きへ失禮して社へ歸へつて見ると外交の連中が歸へつて來て報告やら雑談やらで大騷ぎ。美人の萬引、美人の發狂と頻りに美人許り持ちだす私の樣な者でも死ねば美人と書かれるかも知れぬ、一生に一度は美人と書かれたいものですねえ……生きてゐるうちに、

と大笑ひでした、

る。世の中に何が忙がしいつて新聞記者位ゐ忙がしい



日　和　越後　若穗園　な　か

原稿は長く書きませうか記事の都合で主筆に伺ふと、今日はマア大分ありますから好い加減に願ひますと云ふ。未だ書き終へないうちに小使か大聲で原稿の催促にくる忙がしい

ものは外にはありますまい。毎日の出來事を落ちなく報道し、少しでも氣を許して居やうものなら、他の新聞に負けてしまふ。碌に見もしないで持つてゆかれると入れ代りに校正を持つてくる、校正は向ふですよ、係りが違ふぢやありませんかと云つても、無理に置いていく、ルビなんか直しきれぬ程間違ひだらけ、おまけに紙が薄くつて紙はビショぬれと來て居るからうんざりする。火鉢の前で干しながら見て居ると、又電話ハイ〳〵私〇〇社の〇〇で御座います。貴方は……マア左樣ですか、それは私の存じませんことで……ハイ話はして見ますけれ共、却々六ヶ敷からうと思ひます――が、兎に角承知いたしました、さやうなら……狹い處にゐると一口噺の樣なことでも直ぐ何だ彼だと批評される。それで婦人に關係したことゝなると私にばかり苦情が來る。編輯局では浪花節通の外交記者、エヘンと一聲咳拂して「雨か霞か將た……」と奈良丸式に唸るとよりは讀むと云ふ方が適切だ。此方では美人の寫眞に眼尻を下げて獨り悦に入つてゐるかと思ふと彼方では口角泡を飛ばして大議論……あの腰辨バカに見識ぶるの、誰れは傲慢だのと、目に角をたてゝ惡口に熱中してゐる人もある。

△殘んの菓子袋

今夜の招待會にいくのは誰れ〳〵です。いつも男記者ばかりだから、今夜は是非女記者を連れて行くと、一人で早呑込みをしてゐる人がある。私だつてお仲間があると何處へでも行くんだけれ共一人ぢや餘り感心しない、折角行つても又他の新聞で惡口されても詰らないし、ジャラ〳〵した藝者なんか相手に文學論でもあるまい、それより炬燵と差し向ひの方がいくら氣が利いてゐるか知れやしない。電話かけ樣と下へ降りて行くと丁度郵便が來た處、私の分はと見れば繪葉書に女子文壇、嬉しい何と言つても文章見るには女子文壇に限ると、電話かけるのも忘れて二階へ馳け上る。ウッカリして見とれてゐるとホヤ〳〵の洋菓子を眼の前へ突き出された、何うしたんですと云ふと新發明ですから批評して下さいと來た、憖な批評は受け持ちだから知らん顏して澄し込んでゐることも出來ない、仕樣事なしにお茶を入れながら皆に分けてやる、一ッ二ッ食べて好い加減な批評をして置く。〇〇さんお手紙、御返事が頂き度いと待てゐます。と同章を持つて來た近頃開業した醫學士夫人から晩餐の招待、暫く考へた

末行くことにきめる。それではお湯へも一寸這入り、お化粧もしなければならぬ、幾ら何でも恁んな黒だらけな手ではと大急ぎで机の周圍を片付けてゐると、下から大きな紙袋が現はれた。何かと思つて開けて見たらマア驚いた、先刻のお菓子を少し殘して置いたが、いつの間にやら綺麗に空にして眞黒い紙クヅを一杯詰め込んである。怒るにも怒られず……

▲工場では原稿く

○○さん、これが貴方の寫眞でせう。……へイと振り向く途端、大嫌な煙草の煙をプッ——と吹ッかけられ、思はずむせ反つた。昨日美人が來たつて擔いだお禮ですよ、ハ、、、八百八丁と異名されてゐる滑稽家の元老が面白さうに笑つてゐる。この人に遇つては誰れでもかなはない、けれ共新聞社なんかにはこんな人が大部分を占めてゐる、私も追々こんなになるんぢやあないかと思ふと何だか心細い。

東京の新聞は千里眼と角力の事ばかり、此頃は一向面白い記事も見當らぬ。××雜誌や日獨郵報の批評が來た、恁な雜誌は私なんか用がない、新らしい小説でもよこしてくれると好いんだけれ共、こんな田舍には滅多に來ない、ア、すつかり忘れてゐた、明日は篤志看護婦會の講話がある筈、午後からは事務官夫人の上京を見送りしなければならぬ。小學校の兒童修進會にも出席しなければならぬ。私一人ではとても忙がしくつて廻りきれやしない、郡部から來た通信も私が頂いて居たと思つたがはてどうしたらう。机の引出を見ても見當らない、お隣の内勤記者に聞くとア、それなら先刻私が持つて來ましたよだつて、人を馬鹿にしてゐる。女學校へいつた△△さんが歸へつて來て、お氣に召した女學生でもあつたと見えて、頻りに生徒や先生の名前を聞いてゐる。お料理はどうでしたと云へば、イヤどうも得體のしれぬ御馳走ばかり並べられて閉口した、僕は又御馳走するつて云ふもんだから酒でも出すんかと思つたら、西洋料理だか日本料理だか判斷の附かないものを無暗と詰込むんですもの、あれぢやあ禮式も何もあつたもんぢやあない、大食會と云ふもんでせうね、と惡口を吐く。工場では原稿々々つて云ふ、まだ締切にならんのかしら、記事が多いと云ふのに恁うしたんだらう。

▲他で脱れぬコートの裏

×さん警察部から電話、オーイと返事より早くトントンと降りてゆく、殺人でもあつたんぢやあないかしら美人の情死なんと來ちやあ溜らんね、拾ひものはこれ丈けですか、○さん相場を聞いて下さい、それで締切になりますから、今日の三面は賑やかだなア、藝者の心中……惜い事をしたなあ、花の盛りをあたらちらす……と妙な節で順序帳を讀んでゐる。婦人發狂！可愛さうだなア、女學生の戀文……こ奴ア奇拔だ、拾ふたんですか……投書、成程、手蹟は女の手だ、失戀でもしたと見えてひどく悲觀してゐる、僕の處へ來れは慰めてやるものを――○○さん、貴女の校正が來ましたよ、何卒お間違ひのないやうに願ひます、本社は一番お粗末ですからなアと小言聞きながら校正してサッサと歸へり支度する。日に何遍となく着たりぬいだりするもんだからコートの裏が摺り切れてウッカリ他家ではぬがれぬ。襟卷で顔をくるりと包み、眼ばかり出してゐても私と云ふことが知れると見え、奧さん達や女學生は妙な顔をしてお辭儀してゆく、私だつて惡いことをするんぢやあなし、人の惡口を言ふんぢやあなしするのに何がそんなに不思議なんだらう、新聞記者と言へば一種特別な待遇をされると共に、敬遠主義をとられる、考へると全くつまらない、社會の爲めに働き、世人の便利をはかつても、些もそれだけ有難いとは思はれず……、こんな事おもひながらゆくと、彼方から威勢よく俥がやつてくる、フト見上げると某辯護士夫人――オヤ――アラ失禮、御免遊ばせ、と行き過ぎた。彼の夫人は旦那樣の働いたお金を湯水のやうに使ひ散らして、大きな面をしてゐる、私はいつもあんな風な奧樣を見る度に其旦那樣がお氣の毒でならぬ、寫眞屋によつて某夫人の寫眞を貰ふて行かう、田舍の新聞は銅版でも出ると大變に評判がよい、兎に角四新聞も發行するうちで婦人記者のゐるのは本社だけなので、家庭向としては大受けだ、奧樣訪問記なんか出ると、訪問された婦人が方々へ電話をかけたり、俥者を驅けさせたり大騷、それで大變歡迎される代り、此方でも好い加減な挨拶をして置かないと時々顔を合はせるので工合が惡い、下らないことを考へてゐるうちに大分おそくなりました、さア急ぎせう。

* * * *

中央都會の婦人記者は、何んな生活をしてゐられるか、能く存じませんが、地方の婦人記者は右のやうな事を毎日繰返してゐるのです。

淺草觀音靈驗記

秋扇

その前は毎月のやうに行つた淺草へも去年の六月、○○伯爵へ上つてらつしやるお都世さんと遊んだ限りルナパークも風の便りに聞いた丈ですの、少し詰とすると、歩合の運算が滅茶苦茶になつ了ふのですもの、眞實に意氣地なしのやうですけれど、算盤も、彈けば繪具皿も持ち出すといふわけなのでせう、複雜とはいふものゝ、そろばん計りの奧樣では殺風景故、偶には繪筆でも握つて、美術思想でも養成しておかなくつちやあ……賢母良妻とはなられませんのですつて、ですから私ての節、ほんとうに眞面目に勉強してますのよでもかうして、讀書に飽きた眼を、硝子の窓から街路を見下します。

土手の芝生はまだ綠に萠え出でませんけれど、さゞ波うつお濠の水が、暖かさうに光るのや、ローマの襟元へ、輕くかけたクレハシヨールの若い女が、低い赤塗りの駒下駄に薄色の裾さばき得意げに行くのをみると、何だかもう人ごみの中を、ウロつきたいやうな氣がして參ります。

憧憬るゝ思のやるせなくといふやうなわけで、午後の一時は、友と二人で電車の中のひとゝなつてゐました。

「淺草？上野？」

「どちらでも。」

「困りますわ、それぢやあ。」

「かまはなくつてよ。」

「そうおつしやつて頂だいなあなたの好い方。」

「ほんとうにどうぞ。」

「ぢや淺草にしませうか。」

「エヽ。」

車掌に雷門、と小さい聲で賴んだのに、聞えたのか、稻に大學のマントが、態と他目して笑つてゐた。

飄然と飛乗りして入つて來たのは、大名縞の着物に高貴織の前掛、腰かける機會に縮緬の裏がハラリと返つたのを急いで直して。藥指の厚い金指環を頻りに氣にしてゐる、何所かの氣取つた手代か若旦那か、一寸掛弱と云つたやうな模型だ。

オペラ館か美音館か世界館、大勝館、あれかこれかと車中の廣告を見比べてゐると、友の內村さんが突

然私の手を強く握つて下をお向きになる。

「何なの？。」

と、自分ながら大きい聲を出したなと思ふと、内村さんは堪らなそうに吹き出して了つた。

ふと頭を上げると、輝くマーキユリーに柏葉の付いた車掌の二人づれ。

玲瓏高き仙嶺の、千秋の雪影きよく……二日間學課はそつちのけで漸く暗誦が出來たと喜んでゐる程の、千津さんですもの、きまりの惡いのは御尤もだ。意地わるく千津さん〳〵と呼んでやると、耳たぼを燃えるやうにしてうつむいてらつしやる。

切り下げにお被布の人の手を引いた島田の女、三四人の兄妹らしい子供をつれた四十恰裕の紳士、新ホームの二人連れ、若い友達同志、一停留場毎に人は増える、須田町のり換へ前後は、鏡のついたボギー車も、もう身動きすら出來ない滿員、ですけれど淺草行きの電車は何となく明るい氣もちがいたしますのね。

雷門で大ていは下車りてしまいました。

中見世を行く。

「歸りに紅梅燒を買つて參りませうね。」

と、千津さんは心の落ちつかない眼つきでいふ。

「さつきのマーキユリーは。」

「あらついやー。」

「非常にお耻しい御樣子でしたのね。」

「だつて……。」

「崇拜なすつてらつしやるからよ。」

「嘘、うそ。」

「ぢやあんなに耳を赤くなさらなくつたつていゝぢやないの？」

「また草ちやんの皮肉が始まつた、紅梅燒ほんとうに好い匂ひね。」

適はなくなつて千津さん、皮肉を香で消してしまふ。

山門をくゞつて觀音樣へお詣りをする、お賽錢丈投げて、ボンヤリ千津さんの手を合せて何かの願望を待つてゐた。

「何のお願ひをなさいましたの」

「けふ一日遊んでも明日英語の書取が出來るやうに。」

だつて、觀音さまの顔に皺がよりはしなかつたかしら。

直ちに音にきくルナパークへ參りました。

汽車にものりましたし、木馬館へも入りました。イイエ馬にはいくらなんでも乘られませんわ、緋の袴に

お振袖をきて、襟のり英姿は立派ですけれど、銘仙のきものにお粗末な、フェースでは雑誌の口絵にはなりませんもの。千津さんが。「もう出ませうよ早く活動寫眞へ行きたいわ。」とせがむので、何丈かの瀧に一瞥を加へ、とは恐しいけれど、今度は世界館へ入りました。千津さんが、ホト、ギス逗子物語がみたいと仰有るので。たつた一つ違ひで十八の千津さんはほんとに無邪氣だ、草を八つも十もの姉様に思つてらつしやるのか。此間、皆様がストーブのまはりで級の人の年齢あらひをなすつたのですつて、草は其會議には列りませんでした、そうしましたら、誰かお草さんは二十三だと仰有つたのですと、驚きました、まつたく。



女中部屋　芝弘子

二階へ上ると今、何かゞ終つた所、パッとついた電燈に、男も、女も居すまひを直す。やがて電燈はきえて樂隊が鳴る、鐵の柵によつて下を見ると、人の頭のみ唯、黒く、黒く動いてゐる、私は、壓されるやうな苦しい感じがしました、今映つてゐるのは二十四孝の筍堀りのところ、千津さんは、早く不如歸になればいゝ、詰らないと云ひながら矢張り凝とみてらつしやる

一場の映畫が終ると、俄になまあたゝかい空氣が、場内に渦捲き上る、人の息と人の息とが縺れ合つて、苦しい壓迫を感ずる、刹那に窓に明るい光線が射したので蘇生した。

口上言ひが隠れたと思ふと、又暗くなつた、動き出す繪と共に多くの人の魂が吸はれて了つた。

內披露

紅薔薇

上衣は藤納戸地に牡丹を大きく裾模樣の、しつくりと白を重ねて、地に曳く袖の振長う。幾度か肩にかけてみたり、平常着の羽織の上からそつと袖を通してみたり……あまりの小供らしさに我知らず微笑まれて、手早くたゝんで先の通り、お誂ひ、若山樣、三越呉服店、と書いてある折紙に包んでこよりひも結んで室の隅におきました。椽へ出て柱に凭る。あゝいま頃、孝樣はどうしてゐらつしやるかしら？

日光まばゆき籬のほとり、雪のやうに輝く梅の眞さかり、美代はまたお隣りで話聲がしてる、母樣がお留守だといゝ氣になつて直ぐこれですもの。

帝大法科の政治科出身、凛々しくもお美い孝樣、世には髭むしや、ジャンコ面のくせに花のやうな奥樣つれてらつしやる方もありますものを、私のやうなものでは、お友達の手前、御紹介下さるにも肩身がせまくゐらつしやるだらうと思ひまして……けれど、それ程おイヤのものならば、初めからおのぞみ下さりはしないわねえ。

若山家の長女と生れた私は、この家をつぐべきが順當なので御座いますけれど、都合があつて妹にゆづるときめましたので、伯父……父方の伯父などは、それに大いに不平をとなへて、母の愛の妹にあついがためのやうに申しますけれど、馬鹿らしい、嫁くと申せばこそこんなお多福の何處がよくてか、强ひてとの懇望もあれ、系累のある責任の重いそのくせ吹けば飛びさうなこんな家へ、何しに姓を捨てゝまで來て下さる方がありませうか。私はこの家をのがれられるがうれしくてなりませぬ。その代り、通ちやん、あなたには、きつと私がいゝ方をお世話しますよ、通ちやん……

私には、死しても他の菩提所の土となるべき其の門出に、再び歸るな、歸らじ、と誓ふべき人もなく、眞面目に御訓戒を下さるやうな方もありません、母樣はたゞ、學士を婿に持つて、來る人毎に御吹聽なので御座います。

孝樣とて今がまだ賣出しの……麓の道をふみわけて向上の山のぼり行くおん身、つまづくか、たふれるか共に行路難多き幾その山川を……。

去年の秋の運動會の時、やつぱり法科のY様と夫人が『若山さんの御結婚式には私等二人が大切な人として座りますよ』つてたはむれられたらA様まで、『直子さんが奥様におなりの時には僕散々云つて上げなければならん』つてお笑い遊ばしたが……Y様もA様も御試驗準備にお多忙いとみえて、この頃ちつとも來て下さらぬ。御卒業の御祝ひには何を上げやう、とそればかり考へてた身が、かへつてこんな事になつて了ひました。幾度か御しらせの筆取りかけては……あゝA様きつとお笑ひでせうね。○○○ぐらゐの妻となつて、永久に自由と純潔とを奪はれてしまふ私の身の上を…



三線山で逢つた兒　ふちばかま

私だとてまさかこんなになつたものを、今更どうしたいとも思ひませんけれど、それでもまだ他からいろいろ緣談などありますと、あたまから斷はらなければならない此身が何となく悲しくて、處女の誇りを失なふた樣な氣がしてなりません群り集ひ來る人々をあれでもない、此でもないと選り好みして居る時代が、一番花やかな樂しいものとつくゞゞ想ひ知りました。お美しい皆樣方は、後日更に更に私よりかより以上に、この感を深く遊ばす時があらうと存じますわ。それはもういくら自分の氣に入つた人とでも、缺點のない方とでも、いざこれが自分の未來を俱にする人ときまれ

ば、誰だつてきつと云ひしれぬ寂しみを感じるにちがひないと私は存じますのよ。あゝもうあと三十日!!!母樣のお膝に甘へた振り下げ髮の昔は知らず、物心ついてより、足らぬ勝ちの家庭に人となり、物かげにひそみ泣きして、何一つ他の家の娘達のやうには育てられなかつた身の、いまかゝる人の花妻と匂はふとはゆめ／＼地下の父樣もおん思ひがけなかつたでありませう。過ぎ來し方をながむれば、何の泪か湧きいづるよ、お許し下さい、私は、眞に親愛なる尊敬すべき、父母をもたれた方は、何よりの御幸福だと存じます。皆樣はお父樣がゐらしつたらさぞおよろこびなさるでせうと云ふて下さいますけれど、私はさうは思ひませんいま頃はあの時分より／＼以上の壓制と束縛とをうけて居るにちがひない、のび／＼とする若芽の先をつみ落されて、私は拗けてひがみました。

私は學校へ一日もまゐりませんでした、家庭で父樣の敎へをうけました。

そして十四の春から遠いとこへ裁縫のけいこに通ひ始めましたが、其頃雨具がないので雨がふると、きつと休みました、みんなから張子の直ちやんと云はれました。

着物なんか欲しくはありませんでしたけれど、差つかへた事が度々でした。遠足だの運動會だの免狀式だの天長節だのつて學校の生徒が美しい袴をひるがへして行く、それが何より羨しう御座いました、たゞ一度でもいゝから袴をはいてみたくてなりませんでした。そんな思ひをするのがイヤで我から友達をさけて居ました、自然他に慰藉を／＼と、もとめて行たのに、あまり熱心だとて私は、私は、雜誌や新聞をよむ事さへきんじられて了つた。

今でもどうしても父樣をなつかしむ心のないのが、空おそろしう御座いますわ、おさへにおさへられてゐたのが……父樣がお逝きなされてから……私は文藝に走つたのでした、十六の秋處女作が懸賞に當選して、それから私の書いたものは不思議にもお金と代へられました、私の性格は一變しました。

ブラウドが女の命と云はれても仕方がなかつたのです、知りもせぬ人からは毎日のやうに求交狀が舞ひこむ。わづかな手づるをもとめては直子さん／＼とより集ふ大學生なんかを友と呼んで、おもへばほしいまゝなふるまひ、公然と信書の往復、よくお下宿へまでお訪ねして……約婚だの、ラバアだのと云はれた事もあ

りましたが、私は平氣でした。自信が強ければ氣も高くて、誘惑の征矢など冷笑のうちにうけ流しました。私、顔は取どころなく生れましたが、たゞ髮だけは神樣が美しうして下さいました、わざとすねて束髮には結げず、A樣なんか今年で四年目の御交際ですけれど、いつでも〳〵高髷でばかりお目にかゝります。そして俯いては物いふのが私のくせなので、囚はれたやうな女、想像はあたらぬもの、なんて評判された事もありました。

幼時から私をかはり者〳〵と目してた伯母叔父達はまるで人なみの通用はせぬ人間とでも思ふて居たらしく、それがいつのまにやら高島田つやゝかな紋羽二重の肩つきしなやかな少女となつたのをみて、今更のやうにおだて上げたり、機嫌を取り出し、嫁に婿にとのうるさい話もすゝめられましたけれど、私は耳にもかけませんでした。

今度孝樣とのお話などは、まるで違つた方面からなので、親類たちには相談？と云ふやうなものゝたゞてれ〳〵だからとお話したに過ぎませんでした。もとより違存を云はれるやうな點のある縁ではなし、よし不服をとなへられたからつて、それに從がふ私でもありませぬ故……。

私は幸運なので御座いますづて。今年は十九の厄年ですけれど……事なく過ぎてくれゝばいゝ。

孝樣はお酒がちつとも飲けない……の、男のくせに意氣地のない方ね。

日比谷で式をあげて、〇〇〇に披露のうたげ、ホネームーン、麻布の新居、新生涯、法學士夫人？

私は果してその任に堪へ得る資格があるでせうか！縫子樣、愛子樣、身分に過ぎた方達と御別懇に願ふて居ましたが、縫さまも今年から工學士夫人、彼進むか、我おくるゝか、あゝ今後はたゞ努力あるのみ、不肖ながらも誠心誠意、家の爲め我が君の爲め……孝樣!!! どうぞ御心安うおぼし召して下さいませ。

しづかな春風が庭をめぐつて、梅の花びらがひらひらとこぼれた。

> 女子は其生涯を追想して、間斷なき流水の如き印象を得ずして唯個々の點の忘れ難きものあるのみ、個々の點とは女子が有する同類の唯一種類、即ち性慾及び生殖と關係するものに外ならざるなり。例へば戀人と求婚者、婚姻の夜小兒と其人形、舞踏會に於て得たる花、花環の多少、大小代價、己れを題としたる詩歌、己れが長歎したる男子の容貌等なり。殊に人をして輕蔑且憐愍の感に堪へざらしむるは、女子が一生の中に得たる一切の諛辭を記憶して、遺す所なきに在り
> ワイニンゲル

人の噂も七十五日

囚へ損つた三面記事

崖の花

私は自分の批評を聞く時程、うれしい又やるせない事はない。

私程自らを責むるに忠實な者はないと迄思つてゐる、けれども私の前に集つて來るものは、お世辭と嘲笑と冷罵の聲のみで、不幸にして正しい自らの批評を聞く事が出來ない。

自分といふ者を客觀し、批判しやうとしても、尚尚深い迷ひに陷つて行く許りである。善人であると思へるし、又惡人であるとも思へる、否々、善惡を分つ事さへ出來ない程に、私は急激に變つてゆく。

某日私は仕事を了へて、例の暗い冷い室に歸つて來ると、机の上に一通の手紙があつた、餘り近しくない人からのである。

中には新聞の切り拔きと、囚はれざる女は遂に新聞に囚はれたりといふ嘲笑的な文字が、僅かに記されてあつた。

一段許りの三面記事で、業々しく自分の事が書き立てゝある、けれども私は何とも思へなかつた、笑つたら宜いのか怒つたら宜いのか、それさへ解らない、自分の事だから、も少し何とか感じさうなものぢやないかと、促して見た。

かゝる場合、矢ッ張すましてゐるのが、常識といふものであらうか、とそんな事も考へて見た。丁度晩餐を終つた所へたあさんが來て、あなた、新聞見て？と、どんな大事件かを報ずるやうに仰有る。二人は火鉢を圍んで、それからそれへと話し合つてゐる所へ來たのはKさんであつた。

『今日の××新聞御覽になりましたか』と問はれる前から、その行相で知つてゐた。

Kさんは私とたあさんとを見て、入口の所に躊躇してゐる、其の表情で、驚愕と憤怒とを讀む事が出來た、記事よりも何よりも、潔白なKさんに何と答へたものだろうと、私の心はふためいた。

たあさんが便所に立つたあとで、二人の間に斯んな會話があつた。

『それが皆事實だとお思ひになつて？』と、周章た心は種々に考へた末、Kさんに對して斯んな事を云つた

『勿論僕は信じやしませんが、××氏云々は事實なのですか？』

『いゝえ、だから私は××氏に對しても申譯ないと思ひますの』

『ではあゝいふ風な事を、戯れになり誰かに語つた、お覺えがありますか』

『いゝえありませんわ』

『僕は今日停車場で見て、病中神經を痛めてゐらつしやろうと思つて、急いで來ました。』

『ほんとに彼の記事を信じてはゐらつしやらない？、唯私を信じて下さい、信じてさへ下されば、萬人が何と言はうとも心にかけも致しません、恐く他人とは沒交渉です。』

餘りに巧く云ひ過ぎると思つた、けれどもそれが事實ぢやないかと、叫ぶものもあつた。

Kさんは『あ、然うですか。』と四角張つて答へたけれども、和ぎの色が見る〳〵面に現れた。

あゝ私はどれだけK樣に感謝したら宜いのか解らない、自分の姿の幾變遷に愛想をつかさるゝ事もなく救はんとして見守つて下すつたのは、おそらく此の君のみであつた。私が文藝の毒に醉ふ時、此の君は敵であつた、『文藝を罵る人』と云つて自分は忌むだ、然し今日まで潔い自らとしての自信を失はなかつたのは……、此の君あるが爲である。

誰にでもキスさせる女——とやうに罵られた事もあつた、又誰しも然う信じてゐた。

けれども自分は道德以外に、ある貞操を固守し了せた事を信じてゐる。人は其理に自分を荒んだ女——と云ひたがる、失戀の子だともいふ、それを聞く度に私は憤慨して止まない、波瀾に富んだ前半生を、どうしても潔いとは云ひ得ない、けれど自分の此のすべてを誰に捧げた事がある？。

甘い養母の許に、割合に嚴格な監督を受けて、生ひ育つた、そして戀といふ程の戀を眞面目にする暇すらなかつた。

然しその後に蹉跌がなかつたでもない、が、自分の失敗は自分から發言しなければ、父も母も誰も知らない思ひ返して見れば、人を戀しないから自分は潔白だと威張るのは大いなる愚かも知れぬ、それだけ眞面目な心に乏しい半生を過して來たと思ふと、恥かしい事であると思ふ、又多少の悔恨がある。虚榮の夢を追ふ爲に、K樣に行つたとも云はれよう、然し事實は決して

然うぢやない、姿こそ雄々しい人であれ、K樣は弱者である。祖先が與へた家名を背景にしなければ、世に立つて行かれさうもない人である。
けれども今自分は凡てを抛つて我に來れ、と命令してゐるではないか、自分には責任がある、よし、南海の一小島に、敗殘の身を横たへるとも、世路の戰ひはこれからである。

戀といふはもの足らぬこと、みちぬれば幕のをはりの寂しらを知る
ひと度は戀せよさらば知りたまはむ寂しみの味かなしみの色
あゝ思ふ、ひろきみ空と、海原と、水平線と、大いにしへと
浪の音聞かばや海のはてを見む戀のあめつちわれらのみいく
いつく〱も拗ねしこゝろをなだめらるキスの甘きがにくらしきかな
唇を閉ぢておもふは許すべし、地をくつがへす大くはだても
投げ出しゝ命にとりてなによりも寂しきことのおそろしきかな

さびしき笑ひ

夢の女

障子にさした春の日影の段々うすれゆくを見てゐた子供の聲や、物のうりでゐが電車の響にもつれ合つて騒がしい町も、慌しげに暮れやうとする。黒く煤けた屋根の續く町の彼方に新しく建てられた學校の白壁にも弱々しい光りは落ちて居る、ニコライの塔を圍んだ立木は疎に透いて天の青きものぞかれる。
日曜には歌留多しますから、と迎ひにわざ〱いらしつた美耶樣、夕ほし樣も靜江樣も御見えになりますからと云つてらした。その夜、かうもあらうか、あゝもと空にゑがいた姿とは異れど、丈高き君を靜江樣と見たけれども夢であつたのだ。日曜には故ありて美耶樣をも見ることは出來なかつた。
「御手紙が參りました。聲はすれど面は見えず、しとやかに、障子の開く音のみして、舞ひ込むやうに白い四角な封筒が疊に落ちた。
北の湖畔より、
冬の休暇に誠一樣も御歸りになりました。聞かせて

くれる人もあるので、その日は私にもわかつて居ましたけれど、コートに姿をつゝみ、頭巾に髪はかくさうとも、喜多方の停車場に人知れず迎へるといふてともいまは許されなくなりました。窓から、あの方の御ざしきの赤い灯も見えます。逢つてもしかたがないけれど、私は一度逢つてみたい父にも母にも背いた心、そむいて人に移した心私は涙が流れます。親にも離された身は、



[illegible]　芝　田中きよ子

本たうに心ぼそいけれど、人によつてつなぐこともでぎぬいのちを何のために依うして生きてゐるのでせうねえ、いくぢがないと思ふけれど、しかし……。休すぎて人は都會に、かへつたでせう。にじみ易いインキのみだれがき。知るはひとりの君のみと泣いた。あゝ火を噴く山のふもとにそこなはれた胸を抱いて逃れゆけど、北の湖畔は君が永住の地ではなかつたのだ。

とうとわかれてしまひました、東京へ行つて逢つて來たのです。

とぎれ〳〵に云つて悲しい瞳を伏せた人をいまも思ふ私を思つて、と別れの際に指から拔いて渡したといふ指輪のルビーの紅はそのまゝに輝いて、いまもその人が机の奧に秘められて居やうけれど。

永久とちかへる言葉を、ボールドの文字を消すよりも容易く葬り去るのは男にも多いのだ。

戀する時とかなしみと、いづれか長きいづれみじかき、私はなまじつか戀を知つたのは不幸だつた。はじめから孤獨と覺悟して居たならば、と友は云つた。私はその言葉を悲しく胸に印してゐる。

しみ〴〵と泣くことのできたのは去年までです。

けふは這麼人も來た。

水々しい大丸髷に緋のてがらが燃えて居る、きれいにお化粧したかほを美しいとは思ふけれど。

あなた三崎座へいらつしやいませんか。私御伴したいのですけれど、今日あすはいけませんの。

と斷つてしまつた。此人と一日を芝居見物に費すほどのんきな心ではないのだ。

お正月に何をこしらへて御もらひなすつて？と

おひろさんはきく。

いゝえ何も。とわらつていふと、

あらまさか、うそでせう。何か着物？お羽織？、そうですか、結構ですわね、一枚でも着物ができるとほんとに嬉しいものね、三越へでも今度いらつしやいませんか。

つて私、

わたしはあんまり着物ほしいとも思ひませんの、ですから見立は下手ですわ。

といつてやりました。

お晝のおかずは何が出來ますの、と無遠慮な問にも此ごろはかほも赤らめなくなりました。私が東京へ來たてに漬物のつけ方、御飯の炊き方、お火のおこしかたまで此人に敎へてもらつた。心切な人とは思つてゐるけれど、けれどやつぱり女だなあとけふも思つた。

六日には一色先生の追悼會が開かれるといふ。あなたもいらしては、と夢殿守の君は云ふ。すこし都合がわるうございますから、とは云つたけれど、あしたに入りて夕べに都を去るといふ、月波の下はみちのとほさも知らねど、常陸の師の君も連りたまふ蓆といふに。

夜、幾百通にか餘る手紙をみんな燒くつもりで出してみた、湖畔の友より、學校のオルガンの側で冷笑を絶交狀に替へてわかれた濟子さんより、みな、むかしの清き半生の名殘である。火に投げいれて、立ち上る煙を見る時、おのづからなる冷笑は頰にうかぶであらうけれどたゞひとり、たゞひとり、謝さねばならない人がある橫濱の節樣、あなたにも私はそむきました、しかし御宥し下さい、私は人の誓を信じても、永久の二字を信ずることはできなくなりました、年たけて人に嫁すべし、されど君より外に戀しき人はあらじ、と仰つたおことば、私はわすれはいたしません。それは十六の秋でした。やがて十八、とつぎ車に花かざる日も近づいて來ますに、いつまでもとは仰つたけれど、私はあなたの友といふにすぎないのですもの。

湖畔の友と此友と三人、根岸の桃散る濱に遊んだ一日あゝあはれ清き十六の紀念のゆめとなりました。

いかにせんみやこのはるもをしけれと
なれしあつまのはなやちるらむ

ゆや

月あかり

長曾我部菊子

冬の沒日は格別に人の心をそそるやうに、弱々しい明るさを、雲から雲に流して、ぢりぢりと沈んで行くやうであつた。其れがいかにもうら淋しいものだつた種々の勤務を終へて後に、ガラスの戶を開いて、此の樣な沒日の色合や、雲の姿などを眺めて、女の事故流石に淡い溫味のある言葉を交して、何と云ふ事もなく、四方山話をする事は無いではなかつた。

同僚の一人は、まだ處女の我儘と云つた氣分の放れて居らぬ色の白い女で、一番、年の若い方であつた。一人は、心の打開いたわだかまりの無い人柄で、その上、二十六になる今もまだ親の娘であるところから、淋しい慰めがたい憂の色が、其の顏のどこと云ふ事もなく、わびしく漂うてゐるのであつた。

私を合して三人きりの女敎師である、古い冷い感情の土窟と云つたやうなこの學校の中では、この三人の心をつないでゐる薄い熱が珍らしいもののやうに私にはいつも考へられた。

私は、小學校の內部に暗いうとましい野卑な一種のうづまきがあつて、其の暗い色は、男敎師、女敎師といふものの面々の眼の色にぴつたり沈んで、見るから陰鬱な光をぎらぎらさせてゐる事を思うた。

けれども私はこんどと云ふこんどこそは、小學校というものを、一種の工場であると云うことを明白に誰にでも告げたくてたまらないやうな氣持になつた。むさくろしい狹い古い冷い工場——いえ、もつとおし切つてたとへて見たい！と私はいつも心に呟いたのであつた。

敎育そのものは神聖であらう！けれども、私は、私の得來つた實感から、いかに敎師と云うものの、腰辨當にさもしい一日の心を運ぶ工女、職工の群にたがうところがあらうかと思うた。

私は、私がこのやうに、あるひは、かたよつてゐるとそしられる筈の不滿と懊惱とを抱いて、いつも、生命の友とする、ノオトのページページに、ああどうかして、せひにも、此の境遇のがれなければならぬ、のがれやうのがれやう、逃れてさうして、是非にも、どうにかしなければならぬと、幾度か、それを書いて、苦しい呻の時のなぐさめにしたことであらうか。私はそれを、つくづくと思ひ起した。さうして、眼のふちに、ぽつと淚を浮ばして、沒日を、いつもの癖で、ぼんやりとして、あてもない心をあてもなし、さまよはして眺め入つてゐた。

沒り際の日は紅くて大きくも見えた。光線はさう、けばけばしくはないけれども、おちついた華さを西の空にみなぎらして、長い丘の上に、國境の遠い山々を薄紫にうかして見せた。

かうした夕暮は、たいてい靜寂といふ事の何處にも味はれるものであるが、ここでは、そのやうな床しい事は望み得られるものではなかつた。

職人が見ぐるしい顏色をして、不調和な姿に、一步一步、つかれをきざんで歸つて行く、其の後から、工場のド、ド、ド、ドといふ濁つたとゞろきは追ひかけるやうにひびいて、空にひろがつて行く。

もくもくと黑蛇のうねくるやうな煤煙は、幾條となくたちならんで、夕榮のこがねの光を、くすべるのである、煤煙のとぐろをまく、行末を見てゐると、情なくなつてくる。なぜ情なく淚ぐまれるかといへば、かうした暗憺たる工業地には、どうしても、私の、たちゆく、一寸の地もないと思うたからである。

教務上の打合せにも教師の間には見苦し獸的な心ぶりは、かくす由もなかつた。反目と嫉視といふ事が、あまりに露骨に打出されるのを見、不深切と云ふ態度は、朝から、晝から打つづいて、圓滿にあつた私の心はさんざんに、打てぼたれたのである。

私が此の樣な感情を抱いて、毎日毎日、冷い教務室で冷酷な壁の色、ひからびた机の色を見つめるにたへられなくなつた時、すずめられるともなく、我れからともなしに退職してしまう事に發表してしまつた時、心は、はじめて淸爽であつた。

職をひいて後何をしやうと云うめあてがあるか。それはない。たゞ、穿き辛い紫の袴をはかなくて、着物の裾を長くして、しとやかに――もし私にさうする事が出來るならば、女と云ふ女の人のくらしてゐる女の部屋を覗いて見たい。とさう思う一圖に心をはりつめてゐたのであつた。

あのやうに色はだんだんうすれて、夕映はあせてゆく沈んでしかも華な色は私の一番好ましいものであるとかう考へながら、身をがつくりと、打もたせて、私は、運動場のむかう……丘の木の上の夕暮の光を眺めて居た。すると、Aといふ色の白い其の人は、手を、そつと私の肩にかけて、心配な眼付に同情をこめて、

「おやめになるつて、あなた、そんなに、しつかりとあなたから、お云ひなさつたの？」

「私からつてこともなくてね、校長からと云ふもなくつてね。變に、さぐられるから、不快な氣持になつて、突差にかうなちまつたんです。」

「そして、これから、どうなさるおつもりでゐらつしやるの？」

二人は、此時、しみじみと眼を見合してゐた。私の心には、女は眞に、天眞の同情といふものがある、と思うた此時此の人の眼の色、かほの動きは、私の永く忘れられるものではないのであつた。

Tといふ老孃の淋しい彼の人は、机を離れて、二人のうしろに立つて、低くかう云つた。

「どこへいらつしやるおつもりですの。」

「又學校にお出なさる？」

二人の女は、こもごも、かうたづねて案じてくれた而して、かう云つた。

「ほんたうにお氣をおつけ遊ばせよ！」

「どんなにか、あなたを見て、はらはらしてゐませう。」

「二人はいつもさう申してゐましてよ。遠くね、お國

をはなれてゐらつしやる以上は、一から十までお氣をおくばりなすつてね、あまりおつきつめなさるとようござんせぬよ。」
「この學校であなたに、同情してゐる人は、女の私どもは、心からですけれども、S先生が時折、お氣の毒だとおつしやつてゐられるきり。」
「それはもう、皆、自分ばかりと思ふ冷い連中ばかりですものね。」
「ああ、私も、つまらなくなつてしまうた!!」
と投げるやうにたれかから云うた。そして、三人はもう靜に、だまつて、黄昏のくらくなる野から町にともつた電燈の火を眺めた。
私は此時、はらりはらりと冷い涙が、わりなく流れてゐた。さうして、私の心はふるへて亂れて、どうして、抑へていいかわからないのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

十日は立つた。
私は道をあるいてゐた。
ちようど、其夜は月あかりの美しい、地と、天と、冬枯の木の黒い影と、淋しい家と、四つばかり目に見えてゐた。
私は、母にと認めた手紙をもつて、……もとよりその手紙には、悲しい文字は一つも交つてはゐなかつた。
月はちようど七日ばかりのふくらみであつた。
まだこの路を通るのははじめてなのである、はじめてといつてもいゝ!、白日見た路とは、全く、樣子をたがえてゐた。
凍つた地は、下駄の齒とともに、からからと鳴つた。
私のかげが、かつきりと形をそめる……歩きながら、私の自分の胸をふんで足をうつした。
風がわたる、軒燈の出てゐる家の屋敷のすみで、笹のすれる音がした。ゾッと寒かつた。
東京の郊外といつても北の方は、うつとうしい氣持がする、低い、暗い、胸のつまる感じがする。
こゝは西で、しかも、木も草も水も、土も懷かしい印象を私にあたへた新開地である。木の香のする新築の家が、月あかりに際立つて見える。
手紙を見れば母がよろこぶだらう、よろこぶに相違ないと思ふ、私は暗いみちから出たのだもの。
私は、ポストのある家の前に立ち止つた、物を考へながら忘れてゐた月を、今更のやうに見上げた。
月は白く冴えて、空を、すべつてゐる。

化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉

問 私は首筋に白ナマズが出來て居りまして誠に見にくうございますから種々の藥を用ひましたが一向に癒りませんが、如何したら癒りますでせうか(茨城の愛讀者)

答 ナマズは至つて難症です、これを癒やすには、先づ加里石鹼を塗布するか、水銀軟膏若くは苦利沙羅並五、〇とワセリン二五、〇を混和したものを塗布するがこれが從來皮膚病醫の慣用しつゝある處の方劑ですが要するに一時性のもので、美容上最も良効なる方法としては硫酸バリットと朱と赭石とグリセリンとを混合したものを皿に入れ、アルコールランプにかけて泡沫の出るまで熱し、その色周圍の健全な皮膚よりも稍や少しく白く見ゆる如くに混和して、一方其ナマズの上をよく清拭し、その上を消毒した針で細かに刺し、右の方劑をヘラで塗擦するのです、若し一回で不可なかつたら數回反覆すべく、且つ白ナマズは通常の皮膚面より多少か陷凹んで居るものであるが、貴孃のも左樣であつたらパラフィンの注射をして適宜隆起させねばなりません。

問 鼻部に皮脂腺が多くて、拭取るやうに浮山脂肪が分泌致しますがこれを止める方法はございますまいか(牛込の一愛讀者)

答 一時性の療法としては亞留加里性石鹼精がよいかと思ひます、それは綠石鹼一〇〇、〇を五〇、〇のアルコールに十四時間溶かして置いて、後漉してラーヘンデル精五、〇を加へて製します、若し根本的に療さうとするには、イヒチオール若くはチオノール一〇、〇を蒸餾水一〇、〇に和して一日二回或は三回十滴乃至二十滴づゝ内服なさるのです。

問 私は生來身體がボテ〳〵と肥太つて居りますので始終心配して居りますが、何卒痩せる方法がございますなら御知らせ下さいまし(大阪にて心配女)

答 あります、が、その方法は中々複雜で、茲に五行

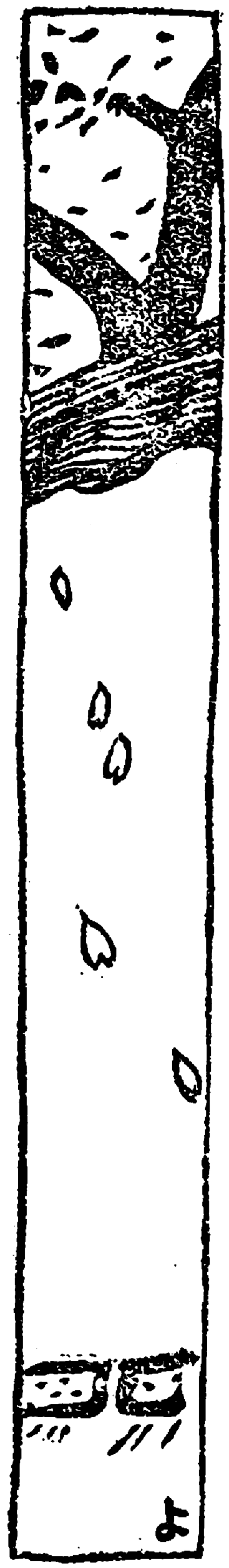
や十行で滿足なる御返事は出來ませんから、讀賣新聞社の發行にかゝる田村化三郎氏の「肥える法瘦せる法」といふ著書を御覽なさい。

問　私は生れつき頭髮にクセがありまして、どちらかといへば縮れて居る方なので、今までいろ〳〵と手あてを致して見ましたが、どうも効能がないやうに存ぜられます、如何致しますれば直りませうか、廣告にある縮毛直しなどいふものは實際効能がざいますものでせうか（田舍の愛讀女）

答　クセ毛なら美男桂と甘草根とを水にて二時間煮た汁でモメば直りますけれど、縮毛は目下の處絕無で、現に私は、或方面よりの依賴で、只今化粧究究所に於いて實驗硏究中でありますが、タヲカントゴムとイスランド苔とが多少効能あるやうに思はれます。

問　毛生液の爲めに脫毛した眉毛は其儘に放つて置きましても元もとの樣に再生しますでせうか、沃度丁幾に四倍のベンヂールの混合液は眉毛に少しも害がないでせうか、拔けるやうなことは確かにございますまいか、又調劑は藥店で致しますでせうか、聞けば殖毛術とかいふのが東京の某處で行はれてる由ですが、これは眉毛にも出來ますでせうか、又安全なものでございませうか（函館の春子）

答　如何なる毛生藥を御使用なさつて脫毛したのか解りません故、確答は出來兼ねますが、脫毛しても毛母毛根の存する限り再び發生せぬことはありません、實はこれに就いて、或貴婦人が私の許に尋ねて見えられて、某美容院とやらから高い代價を拂つて求めた毛生液を塗布した所、生毛する所が日每に七八本づゝ眉毛が脫落して、今では一本〳〵數へられる程の薄さになつたが、何とか生毛する方法はないかとの質問でしたが、その所謂毛生液なるものを分析して見ましたら抱水コロラール劑と解りました、それで其脫毛の跡を調べましたら正に毛母まで枯死せしめんとしつゝあつたので、私はサリチル酸〇、五、タンノプロミン、芫菁丁幾各一、〇、イヒチオール二、〇を牛脳三〇、〇に煉り合したものを塗用せしめ、今では漸やく元の如くに生へました、尤も抱水クロラールも或場合には毛生藥として使用することもありますけれど、分量が少しでも多過ぎたり又は其人の毛質によつては、却つて障害を來すことがあり、殊に眉毛などには寧ろ禁忌すべきものと思ひます、沃度丁幾とベンヂインの混合液は去る心配は決してありません、無論藥舖で調製して吳れるでせうか、劇藥ですから醫師の證明を要します。殖毛術とは聞いたことがありません、殖皮術ならありますが、それで毛生するか何うか覺束ない



読友くらぶ

書物の交換

○ 土佐香美郡山田町　鍵山てる子

▲持つてゐる書物「うづまき」「小鳥の巣」「世界見物」以上切拔。青山青雲、青々集、自然と人生、新體詩作法、露、渚、花袋集、二、やどり木（蘆花）己が罪その面影、片戀、三四郎、文章世界四十三年一月より、八月まで秀才文壇同月より同月まで其の他女學世界本誌。筆のしづく一、二、三、

△讀みたい書物、春 破戒、新片町より、あめりか物語、夢二畫集との巻でも、一葉全集、落日、別離近作十五篇、放浪、春泥集、去年の創作

○ 大阪府泉北郡鶴田村大字菱木　冠木光枝

▲持つてゐる書物『美文作法』『文學攻究法』『少年歌話』『百人一首註釋』『和歌麗の塵』『作歌自在』『應用和文學』『和漢譯文法』『詞の玉の緒』『作文自在』『紙屋助左衛門』『青年小說』。

△讀みたき書物『家庭之友』第六巻一、二、三號『家庭園藝の栞』『水彩畫入門』『吾輩は猫である』『讀でろも』『素人藥物學』『いたづら小僧日記』『夜船閑話』『養生訓』『女學生訓』。右の内家庭之友は是非一度讀みたいのです、お持ち合せの方は何卒お讓り下さいませ切にお願致します、何にてもお望みの書物をお送り致します。

○ 兵庫縣朝來郡梁瀨　朝倉ふさ子

▲讀みたい書物 博文館發行の日本漫遊案内、車窓の名勝觀、作文活法、文章組立法。

△持つてゐる書物 私の益軒十訓、文章新辭典新書簡文、紀念號等と交換して下さい又女子文壇賓業少年藝文等澤山有りますから御望の方は寫眞掛ヒジツキ等で御申込み下さい。

○ 廣島縣備後比婆郡庄原町　倉田眞佐子

▲持つてゐる書物 黄菊白菊、琵琶歌青山白雲、青蘆集、我輩は猫である、筆子、夏子、新學士、初姿、戀と戀、錙、賣花娘、火の柱、田舍源氏、戀慕流し、女學生、女波男波、美丈夫、青春怨、二人女王。

△讀みたい書物 少女の秘密日記、獨歩集、凋落、天打つ浪、コブシ、夢二畫集、女夫浪、みだれ髮、捨石、月しろ、新夫人、呪れたる女、懺悔、本誌今の婦人、晴小袖、追懷、風葉集、月に立つ影、右お互に貸借致し度存じますお望みの方は一應お送書下さいませ家庭がきびしゆう御座いますから御婦人の方のみに御願ひいたします着次第に御指定の書物發送いたします

○ 岡山にて　花咲く宿

▲皆樣の内に藤村詩集、詩ハイネを御持ちの方はしばらくの間御貸與下さいませんか、それとも御不用なれば、御希望の品と交換してもよろしいのです、私は高等女學校の二年の頃から讀みたいと思つて居るのです、御貸し下さる御親切の方は紙上で御知らせ下さい。

○ 愛知縣碧海郡六ツ美村坂左右　大竹勇次郎方　靜子

▲持つて居る書物 英語自修書、人生の激戰、フランクリン、婦人世界、美文の泉、算術教科書、成功雜誌、文藝倶樂部、新年號、早稻田講演其他

△讀みたい書物 何んでもよろしい

○ 三重縣桑名郡古美村大字古野二四六　足立百合子

▲持つてゐる書物「筆子二冊」「夏子二冊」「田鶴子」「金色夜叉」「女學生氣質」

△讀みたい書物「孝女白菊」「花夜叉」「わすれ貝」「水中美人」「少女の煩悶」「人の罪」「己が罪」

○ 京都市綾小路烏丸西入大森方　ひでを

▲持つてゐる書物「夢二畫集」春の巻、夏の巻、秋の巻、花の巻 旅の巻、「スケッチ畫集」「自然と人生」「乙女の秘密日記」其他種々

△讀みたい書物「金色夜叉終編」「寄生木」「みづゑ」本年一月號、

○ 兵庫縣川邊郡長尾村口谷阪上留造方　翠子

▲持つてゐる書物　金色夜叉、思ひ出の記、多情多恨、ハイカラ令嬢、不如歸、夏子、百合子、虞美人草、魔風戀風、田舍教師等不用に付何冊でも御貸しいたしますから寫眞を添へて御申込下さい

△見たいもの　赤草書の習字手本何でもよろしいから交換して下さつてもかまひません。

○ 鳥取縣東伯郡八橋町　藤田せつ子

▲持つてゐる書物「小公子」「松風村雨」「心の影」「ピワ歌」「想夫憐」「三人探偵」「今の婦人」、其他諸雜誌澤山あります

△讀みたき書物「落日」「浮沈」「追恨」「夢二畫集」花の巻「ヤドリ木」「コブシ」「めぐる泡」「野菊の墓」「小華族」「天うつ浪」「婦人畫報」「皇族畫報」其他諸雜誌の御交換を願ひます

○ 山形市七日町新道溝尾方　森谷とみ

▲讀みたい書物　女子文壇、五巻二號及び十四號、昨年増刊地方の婦人、文章世界一昨年増刊秋風號、昨年増刊梅花號、早稻田文學昨年二月及び七月號

持つて居るのはどくつまらないものばかり故、右の物(口繪附きたるまゝ)御ゆづり下されたし

○ 備前兒島郡八濱町歌見　片山かつ子

△讀みたい書物「伯爵夫人」「同胞三人」「眉山全集」「寄生木」「紅塵」「青春」「濱子」「浪子」

右御貸し下された方には繪葉書を添へて御返しいたします尚先着三名には私の見悄い寫眞を添へます

○ 大阪市西區本田町一丁目四十七番地佐藤方　千鳥

▲持つてゐる書物　小説金色夜叉(五冊)日の出島(全十二冊)、不如歸、初すがた、戀と戀、千山萬水、座右の銘等

△讀みたい書物　晶子女史の黒髮、春草、佐保姫、夢の華、常夏、夢二畫集、

右換讀を望む

○ 愛知縣豐橋市湊町　鈴木浚子

▲持つてる書物　私は近松の曾根崎心中を讀みたいのです、魔風戀風でもバイブルでもよろしい、御禮は繪葉書か私の寫眞でいたします

○ 奈良縣磯城郡川西村　中村みちへ

▲持つてゐる書物　脚本金色夜叉、ハイカラ號へ、筆子、少女世界

△讀みたい書物　夢二畫集、ヨヘイ畫集、其他の畫集

○ 新潟縣新津町　石津梅窓子

▲持つてゐる書物　孝女白菊、黄菊白菊、後の孝女白菊、女子文壇昨年三月號より、婦女界同年四月號、婦人の鑑今年一月號より、ございますから皆様の中でヒヂツキ、シヲリ、等の編物御送り下されし方々には何冊でも當地エハガキを添へて必ず御返し致します

○ 大分縣大分郡判田村四四五　田舍娘

▲兵庫の近本、備前の近藤御兩姉の君へ御求めの『一葉全集』藤村の『春』を私所持いたして居ります、十幾人かの御方がお讀みになつた古本ですが、御いとひなくば何時でもお讀み遊せ。

○ 府下北多摩郡拜島村　高崎松子

▲秀才なる讀者諸君、不用の書物の交換は如何です、繪葉書、お手紙のやうなものでも結構です御賛成なら送つて下さい、屹度相當の御禮はいたします、寫眞もお送り下さい、私も當所大日公園繪葉書と寫眞で御禮します。

○ 岡山縣小田郡吉田村字尾坂道萬九百五十九番　中野美代志

▲持つてゐる書物　魔風戀風全部。己が罪全部。乳姉妹上下。金色夜叉全部。若き妻二冊。青春。にせ紫二冊。緣不緣。横戀慕二冊。少華族二冊。伯爵夫人二冊。露子夫人。琵琶歌。一葉全集。不如歸。新不如歸。後の不如歸。戀無情二冊。捨小舟三冊。火の柱。青春怨。やどり木。

△讀みたい書物　露伴叢書。紅葉全集第五巻。椿姫。

○ 越後北蒲原郡乙村　井上貞子

▲持つてゐる書物　手許に殘花一輪。白光。ドオ

ヂイ作母の繪。藤村詩集。藝術集。新玉集。新古今集（全部）
△讀みたい書物　獨吟の戀歌、晶子先生の歌集小説黑潮。御持ちの御方は御交換下さいますかそれとも、暫らくの間御貸し下さいませんでしようか、前以て御一報を

○

名古屋市東區長堀町二ノ二
瀧本逸子

▲持つて居る書物「牛と驢馬東海道旅行」「俳句天地人」「俳句一萬集」「雜誌ホトトギス」「少年世界」「女學世界」「婦人界」「女子文壇」「秀才文壇」（昨年の一月分より今月號迄で）
△讀みたい書物「少女の戀」「ハイカラ令孃」「乙女の秘密日記」「初戀」「失戀」「夢二畫集」春の巻。旅の巻。換讀なり共御交換なり共所持者の御勝手

繪葉書

○

岡山市瀧本町六
田上桃のむら子

誌友の姉様、春が來ましたのね、川邊の柳も緑をよそほひ庭の面の梅も笑ひ始めました、ほんとに月日の經つのは早いこと。繪葉書は妾大好きですから送つて頂戴な、御禮には岡山後樂園を差上げてよ。きつと。男子の方は斷然嫌！

○

誌友くらぶの臨時別種交換

女子文壇の交換

▲紀念第百號の發刊を機會として、古い『女子文壇』の交換をしては何うです、皆様も有る號と、無い號とあるでせうから、それも一つの便宜でせう、左の書式にて原稿お送り下されば、來る第百號に掲げます

女子文壇交換
○何國何郡何町村何番地　何の何子
▲所有の分　第何年第何號（明治何年何月）
▲求むる分　第何年第何號（明治何年何月）
但し増刊は特に其書名を書くこと

風俗繪葉書の交換

▲全國各地の風俗繪葉書の交換も紹介いたしませう、年中行事祭禮、市中の有様、婦人の風俗などを寫眞版又は適當なる繪畫に現はしたるもの、書式は初めに『風俗繪葉書交換』と題し、次に住所姓名を明記したゞけでも宜しいが、成るべく所有の分、求める分と區別して、明細に書いた方がよろしいでせう、此も同じく第百號に發表します

右二項何れも誠實を旨とせられたし、後に不誠實の行動露顯したる時は、容赦なく筆誅す（記者）

右の外書物交換、繪葉書、交際、個人消息等如例盛んに掲載

しめきり四月十五日

大連市信濃町岩佐内
河村その子

私病氣で長く失禮しました、不相變レターやエハガキの交換をねがひます

○

岡山縣兒島郡與除村大字中畝松浦彌吉内
政子

繪葉書の交換をねがひます

○

愛知縣知多郡内海町字山海石黑源三郎方
かさえ

誌友の姉様達と妾は繪葉書の交換がしたいわ　妾は御交際は始めてですが本誌を讀んであるのは三年前からです什麼敬宜敷御交際下さい、御返信は屹度發送します

○

府下豐多摩郡中澁谷一〇三
龜井よしえ

花笑ひ鳥歌ふ今日此頃、御懷しい誌友の諸姉妹様方には如何御起居遊ばされます、よし枝は過る月ある人の勸で獨立でつまらぬ事を始めたのよ其ため住所も前と變りましたけれども例の繪はがき道樂は止みませんで盛に買ひ集め居りますのですから何卒皆様

の御手本に御座いましたら何でもよう御座いますからどし／＼御交換下さいませんか今手許には東京名所、美人愛らしき少年少女風景などが御座いますから是非御取りかへ下さいませ雜誌も昨年私が全部（女子文壇）婦人界婦人世界などが澤山御座いますから御都合で交換致します市内の方は是非御遊びに御出下さいませ澁谷と云ふても青山からすぐですのよ

○　嚴島雨町　　脊木かつよ

私はなんの樂しみもなく寂しく暮してる乙女です、御同情ある誌友姉樣方に美人繪葉書及び肉筆繪葉書の交換を願ひます、御送附の方には、當地名所繪葉書を以て間違ひなくぜひお送りいたします、またお自筆の和歌俳句を書添へて頂けば結構です、吳れ／＼願ます、

○交際

岡山市上ノ町八十九番地　　三宅政代

▲猫が大好き●●●●●　誌友の皆樣に御願ひ致します私は猫が大好きで猫に關したものをいろ／＼集めて居ります何卒繪葉書、玩具、繪畫、細工物其他何でも猫のついてるものでさへあれば宜しう御座います故送って下さいな失禮ながら私の方よりは名物吉備團子又は繪葉書、書籍の内から御寄附の品に應じてきつと御返禮致します尙不束者ではございますけれど外の繪葉書の御交換も御願ひいたします

○　From. T. Kuwagiil.
927. china Alley Fresno. Calif

▲北米より●●●●　母國の友よ私は北米に居る共日

本に姉妹なき故に女子文壇愛讀者に封入繪葉書交換願度住所姓名を御知らせ下さい女子文壇の愛讀者謹賤伏して望みます

○　小石川區餌差町三十五　　中山千代子

▲たゞ一人●●●●　御願いたします、日毎に暖になつて參りましたもう櫻も咲き匂ふ頃となりました妾はこの一月より文だんの友となりましたのですけれど御交の御願いたしますは、此度が始めてなのですの、妾の田舍には母もなく妹もない彼にも兄きにもたよる者とて一人もありませんのよ、

毎日／＼學校へ行つて、校舍の窓よりあちらかと思ふ妾の田舍の空を一人ながめては深い／＼愁みの中に遊ぶのが何よりの樂しみで御座いますの、そうして去んぬる日妹と共に摘み合つたすみれの境など偲んでは、情のない世の中をうらんで居りまする、あはれ世にすてられたる身を、不便と思召して御交り下さる御方は御座いませんでせうか………只たつた御一人にてもよろしう御座います、死ぬる迄も親切に御交りがいたしたら御座います、

○大阪府下泉南郡西葛城村字居場　　不破紀美世

▲春　皆樣都の春はさぞ賑やかでせうね人里淋しいこんな山の中にもいつにかわらぬ美しい春が來て花を咲かしたり鳥をうたはしたりして私等の目をよろこばして下さいます

また折々山へ登つてゆきますと春の神樣は美しい櫻の枝を下さるのよ皆樣も一度いらつしやい

○朝鮮京義線開城驛官舍一號二　　今村ふさ子

▲朝鮮より●●●●　私は未だ新しい女子文壇の讀者ですが、私今年取つて十八歲よ、兩親には東西も知らない間に別れました、便りに思ふ妹とも死別れました、今は兄上が此地の片田舍に住んで居られます、私女子文壇を見る度に繪葉書や寫眞の交換をして此淋しい月日の慰めにしやうと思ひます、御禮には私のやうなみにくい者の寫眞でもお嫌ひなくば、朝鮮名所繪ハガキなど共にお送りいたします。

○廣島縣佐伯郡嚴島町　　加茂章子

▲嚴島より●●●●　おなつかしい誌友の皆樣私は日本三景の一嚴島に住む者です姉上樣方中嚴島においでに成る方は春なれば四五月の櫻更なれば七八月の海水浴秋なれば紅葉の十月頃おいで下さい御案内致しますわ待つて居ますよ

○大分縣速見郡山香村　　小屋落子

▲御熱心な方●●●●　諸姉上樣よお懷かしう御座います妾前月よりの愛讀者なの何卒これから誌友としてお交り下さい私は淋しい山中に生きて居る不束者です文歌には下手ながら趣味を持つてる一人ですよ御熱心なお方は俳句和歌の交りをお願ひ申ます名所又美人繪葉書でも永久御交際下さつた御方へは御返事致します

○　佐渡國新町　　本郷京子

▲離れ小島より●●●●　誌友の皆樣私も二月號からの

愛讀者です離れ小島に友もなく寂しく暮して居ます何卒御交際下さい ましさびしいはなれ島でも景色のいゝ事は何とも云はれない位、夏になると東京邊からたくさん人が來 ますよ暖くなると岩の上で書物を讀む、樗牛崇拜者と御交りでも五巻が……樗牛全集一等すき其中出來れば一等嬉しいわ

○高知市帶屋町上一丁目
西本ちづ子

▲●●●●●●
▲文學を愛する方 ねえ誌友の皆様おかはりなくつて私昨年からの愛讀者ですのよ何分よろしくそして本誌愛讀者の方で文學に趣味を持っていらつしゃる方何とぞ御交際下さいましね不束な者ながら少しお相手いたしたう存じますのよけれど男子の御方は固く固く御斷りですわ只美しい諸姉様とだけね清い御交りをいたしませうね

○栃木縣今市春日山一號地
手塚靜子

●●●●●●●
▲誌友の諸孃様よ 妾は一人淋しい山里に悲しう日を送つて居る一人ですが本月號から誌友となりましたどうぞね玉章並に綺葉書の交換を偏にお願ひ致します

○深川區佐賀町一丁目三十三
清水喜久子

●●●
▲お願ひ お情深い誌友の諸姉様よ……私はお正月から此清い〳〵女子文壇の最愛讀者の一人になりましたのよどうか皆様これから永久に御交際下さいな又妹と思召してレターの御交りもして頂戴ね御返事はきつと差上げますから

○埼玉縣秩父郡皆野村
金子明子

『縞帖』を造らんとする人の為に

▲縞帖とは、いろ〳〵の絹布の小片を集めて帖面にするのです、縞帖を造りたいと思ふ方は、本紙に發表してごらんなさい、好いものが出來上るかも知れません書式は左の如し

縞帖の希望

△題 『寸錦』(此は記者が假につけた名で、諸賢は勝手に好い題名を考へて其縞帖に命名する事

△希望 縞類、友禪類、絣類、毛織物、リボン類、メリンス、木綿(其他注文を書く)

△寸法 二寸四方以内とか三寸とか隨意に

△御禮 繪ハガキとか、自作の詩歌とか、新聞とか、雜誌とか明記すること

住所 姓名

右も、希望者も、應ずる方も、誠實に約を守つて欲しいものです、出來上つた場合、寄送者の名を本誌に發表しても宜しいです(紀念第百號に發表しますから希望者は本月十五日までに原稿を送つて下さい)

●●●●●●
▲秩父山中より 博學なる本誌愛讀の諸姉様方よ妾は秩父山中に住む無學な何にも知らない田舎娘ですがどうぞ〳〵諸姉様方のお中に與の妹と思召して永久に水魚の御交りをして下さる御方がございましたならどうぞ〳〵御願ひ申します

○大和宇智郡宇智村 丸谷たつを

●●●●
▲吉野より お姉様今に吉野の花がまつさかりになりますと、ちやうど紅雪の降下つたやうに書齋の窓から一目なの、おたより下さいませね姉様に満足なお答してよ

○茨城縣新治郡下大津村大字石崎
來栖かつ子

●●●●●●●●
▲霞ケ浦の畔より いと御慕しき誌友の皆々様、不束なる私は女學校三年の者ですが、今後妹と思召して御玉章や綺葉書の御交換を願ひます附次第すぐ返信いたしますわ、でも一時的の御方は固く御斷申しまする

○淡路國野崎村
國分光子

●●●●●●●●
▲淡路の愛讀者様に 淡路の愛讀者諸姉よどうか御交際下さいましねそして誌友會開きましては如何双手をあげて御賛成下さい

○澁谷三四四
竹内ツネ子

●●●
▲仲よく 懐かしい御姉様方私も此文壇と大の仲よしで御座います何卒誌上で御交際下さいお願ひ致します

○千葉縣君津郡中川村藏澤
高橋九兵衛方 高橋榮子

●●●●●●●●
▲なつかしさ誌友の皆様 お變りもなく私は本年一月號より愛讀者諸姉の仲間入りをしましたから是からよしなに指導して下さいまし

女子文壇紀念第百號豫告

内容の一般

○若き女の身の上話…………………………誌友數名

△其他、吉井勇の對話、河井酔茗の詩、溝口白羊の論文、横瀨夜雨の蘇生の續稿、澤村胡夷の美術の話、佐野天聲の富士山麓、澤田順次郎の食物と健康、大關ちか子の看護婦と信仰、上流家庭の應接室、女庭訓、女子自炊生活の實際、女子文壇追想記、佛蘭西印象派の女畫家、新派和歌評釋等數へ來れば殆ど枚擧に遑あらず

繪畫

○春の溫泉（木版極彩色 日本紙刷）（本誌二倍大）竹久夢二

竹久氏獨得の情趣に富める傑作を、日本固有の木版十數度の色刷となし、日本紙に印刷するものなれば、明治の新錦繪を見るが如く、雜誌界には得がたき逸品たらむ

○表紙……………………太田三郎
○祇王……………………山中古洞
○鳥………………………渡邊ヨヘイ
○晶子の歌より…………岡本一平
○若き日…………………萬代つねし
○門………………………竹久夢二
○名流婦人の芳姿………寫眞版

愈よ來る五月一日發行

紙數三百餘頁
定價金參拾錢

雜報

櫻ふゞき

△四月三日には日本橋の開通式がある、工事に着手したのが去る明治四十一年、あしかけ四年の時日と、工費金五拾貳萬參千餘圓を投じて落成したる日本橋。日本橋の歷史は、一面に於て江戶の歷史であつた、今や昔日本橋の面影は全く去つて、此處に橋の爲に一紀元が起つた、橋畔幾町の住民が開橋式を飾る爲に熱注してゐるのも尤である。

△西洋の或る博士は、ハイカラ（高いネクタイ）は、肺、胃、神經を壓迫し、之が爲に神經痛、嘔吐知覺喪失等を惹起すと云ふことを言つてゐる、婦人方の知つたことではないかも知れん。

△フランスの巴里では、女に股を開かせないやうにするため、金のくさりで足と足とを繫いで歩くことが流行しはじめた、但し昔のやうに鋌前は嚴重ではない。

△文藝協會の發展と共に、同附屬の研究所第一回卒業生は、來る五月頃同會が開演するハムレットに登場するさうだ、多分帝國劇場で開くだらうとの噂である。

△我邦洋畫界の開拓に尠少ならぬ功績あつた白馬會は此度開放した、つまりもつと廣く洋畫界全體の上に活動する爲に。

△彼岸の入に雪が降つた、彼岸前は餘りに暖かに過ぎた、綻びかけた花は雪の爲めに又た縮かまつて了まつた。

△詩歌專門の雜誌『詩歌』の初號が近く世に出る筈である。

△十月會の機關雜誌『北光』も再興するさうだ。

△帝大文科生の機關とも云ふべき『新思潮』は岡本一平氏同夫人等も之に加はりて、近々體裁内容ともに一新する筈。

△與謝野夫人は女子を分娩した。

△夏目漱石氏、文學博士の學位を受けず、文部省は又其辭退を受けず、一つの文學博士が宙にぶらついてゐる。

△悪に御船千鶴子を自殺せしめた千里眼問題は未だ其解決の付かぬうちに、またく長尾郁子を病死せしめた、何れも直接千里眼の爲に死んだのではないかも知れぬが、勿論深い關係がある、斯く二婦人を犧牲にまでして、なほ千里眼問題は五里霧中にある。

△女子大學は文科を廢した。

△同じく女子大學内、櫻楓會で編輯してゐた雜誌『家庭』は三月號限りで廢刊した、世に知れなかつた割には、生氣のある新しい好雜誌であつたが惜いことだ。

△昨年女子大學を首席で卒業した上代たの子は今回文部省の英語檢定試驗に及第した、同女は本誌にも折々執筆されるが、現今は日本で發行する英文雜誌『ライフ、エンド、ライト』の編輯に從事してゐる。

△麴町高等女學校では前月廿一二日手工展覽會を開いた、女子職業學校でも廿五六七の三日間展覽會があつた、女子音樂學校の卒業演奏會は二十二日の午後靑年會館で開かれた、東京音樂院の演奏會も同日にあつた。

△京都では本願寺、知恩院等の遠忌があるので洛中洛外は善男善女を以て埋まつてゐる。

△漢詩界の泰斗槐南森文學博士は病を以て永眠した。悼惜すべきことである。

○新發見藥トニチン　近頃神經衰弱症に係る人多くなりしに就いて、瑞西國ウオルフエンスベルゲル社に於て發見せる新藥トニチンは百發百中奇効神の如し、神田五軒町日新館藥房にて發賣せるが、毎月の販賣高九千劑に及ぶと

○新刊紹介　次號にゆづる

○女子文壇定期號 投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る
▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること
▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は斷じて受付ず)に送ること
▲小說と、詩と、雜錄とは振假名をつけること
▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初めての投書は三十行以內、詩と雜錄は行數制限なし
▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす
▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る
▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め、大さは二寸に三寸、一人一枚限
◉投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す
▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢
▲『和歌』俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す
▲『雜錄』は金五圓以下壹圓以上、正金にて呈す(但し二頁以內の短きものは此限りにあらず)
▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす
定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲▲▲▲毎月一回(一日)
一冊(一回分) 定價金拾五錢…郵稅一錢五厘 計金拾六錢五厘
三冊(三月分) 前金四拾三錢五厘……同四錢五厘 計金四拾八錢
六冊(半年分) 前金八拾四錢……同九錢 計金九拾三錢
十二冊(壹年分) 前金壹圓五拾六錢……同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲▲▲年四回(二月、五月、八月、十一月)
一冊(一回分) 定價金貳拾錢…郵稅一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二冊(半年分) 前金三拾八錢……同三錢 計金四拾壹錢
四冊(壹年分) 前金七拾二錢……同六錢 計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部▲▲—十六回▲▲▲
四冊(三月分) 定價金六拾三錢五厘…郵稅六錢 計金六拾九錢五厘
八冊(半年分) 前金壹圓二拾二錢……同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
十六冊(壹年分) 前金貳圓二拾八錢……同二拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▲申込注意(振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增(收入印紙謝絕)、凡て前金拂込に限る

明治四十四年三月廿五日印刷納本
明治四十四年四月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本魁
印刷所 合資會社東京國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話(京橋六〇七番) 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

◎ 口癖の樣に頭痛がするといふ婦人あり

御婦人は十人寄れば、七八人まで頭痛して困ると仰しやいますが、頭痛の起る原因に色々あるけれども、婦人病の殆んど總てが頭痛の原因となるといふ事は、どの御醫者さんも申します、併し多くの婦人は、頭痛のするのは、時候の爲めだとかいつて、顳顬へ頭痛膏だの、梅干の皮などを貼て、それで治ると思ふ人もある樣ですが之れは大なる誤解である、婦人病の根治を圖らない内は、頭痛は決して止むものでない、上述の如く頭痛がして困ると云ふ方は、多くの場合に於て婦人病に罹つて居るのであるから、特に是等の婦人病の為め に、婦人病の兆候及び療法に付て簡單に述べて見ませう。

ヒステリー症は俗に言ふ血の道で最初は頭が重く氣がふさぎ次で頭痛が起る、もう一歩進むと癇高ぶり、些細の事が氣にかゝり、過が去つた事や、取越苦勞をする樣になる、白血赤血こしけ●●●は子宮内膜炎の結果で多量のねばくした帶下を漏らし、其帶下は時としては、血液又は膿を含む事があり、甚だ惡い臭がする、此病氣は懷妊の機能を害ふから子寶を擧げ難く、顔色は常に青く活氣に乏しい年頃になつて月のものを見ないとか、たとへあつても、時期一定せず、其量に多少あり、月經時に苦痛を感ずるのは皆病氣の結果である、「つわり」は姙婦の持ち前の如く考へて治療を怠る方があるけれども、營養分を攝取することが出來ない爲めに身體甚だ衰弱し、之が爲めに難産小産する恐れがある其他腰足が引釣り痛み、又胸先へ差込み錐を揉み込まれる樣な痛みを覺えるとか目が眩んだり、耳が鳴つたり、肩が凝つたり、腰足が冷えたり、顔がほてつたりする容態は、多く婦人病から起るのである、此外産後古血が滯ると色々の病氣が起る、肥立ちが惡るければ手足が水腫が出來たり、しびれたりする、以上述べた所は、婦人病の大要であるが、是等の病氣に對する治療法は、津村順天堂の自宅治療法を以て最良とする、津村順天堂には内服藥としては中將湯あり以上の諸病に特效があります、外用藥即ち子宮座藥としては中將球があります、此兩藥を併用すれば、藥效は内外相應じて一層著しいどういふ時に中將球が必要かといふと、子宮内膜炎とか白帶下、赤帶下、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、前の惡臭、前の瘙痒、月經時の疼痛及び夫の痳疾に罹り居る時等に中將湯を服用して中將球を兼用するの必要があります

◎中將湯、中將球は全國到る處の藥店にて販賣す、若し無き時は病人の容體詳しく書き添へ、本舗、東京日本橋通四丁目津村順天堂へ注文せられよ中將湯には數種の加減藥ありて本舗は其病症に應じ適當の加減藥を發送する

中將湯代價五週分貳圓五十錢、三週分一圓六十錢、二週分一圓十錢、一週分六十錢、四日分三十五錢、二日分廿錢

中將球定價百二十個入五圓、四十五個入貳圓、二十個入一圓、九個入五十錢、試分三個入二十錢

(明治三十七年十二月八日第三種郵便物認可)

▲女好定價金拾五錢 郵税五厘